



TITLE:

# 『我身にたどる姫君』の研究(Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

金光, 桂子

---

CITATION:

金光, 桂子. 『我身にたどる姫君』の研究. 京都大学, 2001, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2001-03-23

URL:

<https://doi.org/10.11501/3182830>

RIGHT:

新制

文

355

『我身にたどる姫君』の研究

金光 桂子

『我身にたどる姫君』の研究

金光 桂子

## 目次

第一章	はじめに	(1)
第二章	女帝の人物造型をめぐる	(3)
第三章	虚構の歴史物語	(33)
第四章	聖代描写の源泉	(85)
第五章	聖代描写の意義	(113)
第六章	卷六の位置付けについて	(145)
第七章	卷六における仏教的教誡	(171)



はじめに

『我身にたどる姫君』は、鎌倉時代中期の成立と推定される全八巻の物語である。本文は、この物語の後半部（巻四〜八）を中心に論じたものである。

中世の王朝物語の特色として、『源氏物語』などの先行作品を安易に模倣する一方で、平板化を免れるため猟奇的な趣向を好んで盛り込むという二つの面が、おおむね否定的に言われてきた。近年は、模倣の中に独自性を見出そうとする動きが活発で、新奇な趣向について、頽廃的と片付けるに留まらず、正面から論じられることが増えつつある。しかしなお大方の関心は、それらが王朝物語の伝統の軀から脱していかに斬新であるかという点に集中しているように思われる。

その中であって、『我身』も多分に漏れぬ

なわが身が、物語の中心人物として描かれてきた作品である。しかしそれは、決していたずらに奇抜さを求めたものではなく、また、物語の伝統と全く無関係で異質なものでもないと考ええる。むしろ、それまでに蓄積されてきた数多の物語を享受し、吸収することによって生まれたところが、意外に大きいのではないだろうか。そうした先行作品からの影響を徹底的に追求することによって、かえって時代性や作者の個性が見えてくることもある。物語の享受と制作がともになお盛んであったこの時代、その両者の相関関係を探るためにも、この作品はある手がかりを提供してくれるように思う。

以上のような展望に立って、『我身』において特に新奇性が目立つ、『女帝』という人物の周辺、及び『並びの巻』とされる巻六、この二点を中心に論を進めてゆきたい。

※本論文における『我身にたどる姫君』の引用は、鎌倉時代物語集成による。ただし、底本の誤脱と思われる箇所は他本を参照して校訂し、注にもとの形を記した。また、特に注記するもの以外の引用は、次のテキストによる（一部表記を改めたところがある）。なお、引用文中、〈 〉内の注記及び傍線は、すべて稿者による。

勅撰集・私撰集・私家集 — 新編国歌大観  
『竹取物語』『落窪物語』『源氏物語』『今と  
りかへばや』『平治物語』

— 新日本古典文学大系  
『浜松中納言物語』『狭衣物語』『栄花物語』  
『大鏡』『愚管抄』『沙石集』『神皇正統記』  
— 日本古典文学大系  
『松浦宮物語』『無名草子』『十訓抄』『とは  
ずがたり』 — 新編日本古典文学全集  
『浅茅が露』『海人の刈藻』『有明の別』『石

清水物語』『いはでしのぶ』『苔の衣』『雫  
に濁る』『むぐらの宿』

— 鎌倉時代物語集成  
『源氏古系図』『原中最秘抄』

— 源氏物語大成  
『大日本国法華経験記』『拾遺往生伝』

— 日本思想大系  
『春記』『申右記』『三長記』

— 増補史料大成  
『安元御賀記』『賦光源氏物語詩』『職原鈔』

— 新校群書類従  
『明文抄』『年中行事抄』 — 続群書類従

## 第一章 女帝の人物造型をめぐる

『我身にたどる姫君』には、個性的な女性が多数登場するが、その中で最も目を引く一人が「女帝」であろう。嵯峨院とその后との間の一人娘として生まれた彼女は、三条院に入内して立后、やがてその譲りを受けて即位し、藤壺（三条院中宮）との共同統治の末、讓位・崩御に至る。奇抜な趣向の好例とされがちだった女帝だが、辛島正雄氏は、物語の世界に女帝誕生の前史をたどり、女の物語という伝統を継ぐものと位置付けられた<sup>三</sup>。また、女帝の発する超人的な光輝・芳香や、辞世に詠んだ「月のみやこ」「たちかへる雲井」等の歌句は、彼女の前身が天女であり、その死は天上への帰還となることを示している。やはり辛島氏は、そこに『竹取物語』が深い影響を及ぼしていることを、女主人公の系譜

という観点から詳しく論じられた<sup>四</sup>。

ところで、女帝の死にまつわる記述には、かくや姫の投影ばかりでなく、仏教的要素も少なからず見受けられる。その点はすでに諸先学の研究や注釈書<sup>五</sup>で指摘されているのだが、おおむね「時代思潮を映してか、困難とされる女人往生とダブらせてある」<sup>六</sup>とか「仏教色を加味し、かれへかくや姫の昇天」の超現実性をやや合理化したもの<sup>七</sup>という程度の扱いしか受けていないようである。しかし女帝の場合、往生といっても一般的な極楽ではなく、殊更に兜率往生と設定されていることに留意され、仏教色を時代思潮の反映や合理化のレベルで済ませてよいのか、疑問が残る。女帝の人物像を全体として把握するには、帝位、天女、往生といった諸要素を総合することが必要になる。そしてその造型には、辛島氏が指摘されたものも含め、様々な先行物語の人物たちが関与していると推測される。本稿は、兜率往生の意味を吟味すること

からはじめ、女帝の人物像が、数多の既存の物語の主人公像をいかに摂取し、あるいはそれを取り越えて形成されているかを検討するものである。そして、この物語における女帝の存在の重要性を、改めて確認したいと思う。

一

女帝は巻五の最後に崩御するが、その後、巻六の末尾近くに、女帝追善に余生を送った近習女房たちが兜率内院に生まれ変わり、女帝のもとで歌会を催した旨が語られている。当然、女帝も兜率天に往生していたことを意味しよう。

のちの世はみな、とそちのないぬんへま  
いられけるとかや。はてはなを、うらや  
ましき人にぞさだまりはてにける。かの  
きんず女房たちに。おほせて、わかのく  
はいありけるにや。

(一九四)

極楽往生に比較して、兜率往生が物語で取り

上げられることは珍しく、女帝を論ずる上で注目に値する。

ただし、兜率天の名を記すのが巻六のみという点は問題になるかもしれない。巻六はいわゆる「ならび」の巻で、内容・用語ともに他の巻々と相当性格を異にしており、別作者や後補を想定する論もある。成立の事情はともかくとしても、兜率往生の設定は巻六独自のものではないかという疑いは生じよう。本系の巻々でも兜率往生が意図されていたかどうか、確認しておく必要がある。

ここで兜率天について簡単に説明しておく。欲界の第四天に位置し、その内院は補処の菩薩の居所で、現在は弥勒菩薩が説法している。釈迦入滅から五十六億七千万年の後、弥勒菩薩は地上に下って成仏し、竜華三会を催して衆生を済度するという。その三会に値遇しようとするのが下生信仰で、弘法大師が高野山に入定して弥勒の出現を待っているという伝説で知られる。一方、死後直ちに兜率

天に昇り、弥勒とともに地上に戻って三会に参加することを願うのが上生信仰である。当来仏弥勒の住む兜率内院は、六道の内ながら浄土と呼ばれ、そこに生まれることを往生という。

さて、女帝の臨終の場面を見ると、往生譚の要素は見られるものの、極楽と特定する指標、たとえば西方に向かう、念仏を唱える等の表現が全く見当たらないことに気付く。代わって印象的なのは、最期を迎える女帝が、全巻暗誦しているにも関わらず、法華經を殊更手に持っていたという記述である。

法花經は十巻ながらおぼえておはしませど、などにかもたせ給へる時もあれど、八のまきのおくほどにぞありける。

(一五八)

「八のまきのおくほど」と特筆する以上、『法華經』卷八のいずれかの經文を暗示していると思しい。今井注は二つの案を示すが、開結二經を加えた場合、「八のまき」は『法華經』

卷七に相当するとの解釈から、卷七・藥王菩薩本事品第二十三の、女人(極樂)往生を説いたくだりが妥当かとする。しかしたとえば、法華講で最重視される卷五・提婆達多品にあたる日が、開經・結經を加えた法華十講であれば、一品ずつの三十講であれ、八講の場合と同じく「五巻の日」と呼ばれる。ように、『法華經』の巻序数はほぼ固有名詞化していたものと思われる。開結二經は別格として、『法華經』のみの巻数を考えるべきであろう。

とすると、今井注の挙げるもう一説が浮上してくる。卷八のまきに最後に位置する、普賢菩薩勸発品第二十八、『法華經』読誦等の功德により、兜率天に生まれることを述べた部分である。

若但書寫。是人命終。当生忉利天上。……何況受持読誦。正憶念。解其義趣。如說修行。若有人受持読誦。解其義趣。是人命終。為千仏授手。令不恐怖。不墮惡趣。即往兜率天上。弥勒菩薩所。弥勒菩

薩。有三十相。大菩薩衆。所共圍遶。  
有百千万億。天女眷屬。而於中生。<sup>三</sup>

(下十三二六八)

この經文は、後述するように『狭衣物語』に引用されるほか、『いはでしのぶ』にも、

すこしよみさしてまどろみ給へる、八のまきのおく、「そくわうとそつてんじやう、みろくぼさつ」などいふわたりを、すこううちあげよみ給へる御こへのたうとさ、…… (三三一)

と、「八のまきのおく」の一節として取り込まれている<sup>三</sup>。また、『大日本国法華經驗記』によれば、生前惡業の限りを尽くした阿武大夫は、臨終の際、「第八卷」のこの箇所が誦まれるを聞いて蘇り、一念發起して仏道に精進し、やがて兜率天に生まれたという<sup>四</sup>。その他、治安元(一〇二一)年、皇太后妍子女房主催の法華經書写供養における講師永昭の説法は、

法華經書写供養の物、必ず切利天に生る。

いかに況んや、この女房のいづれか法華經を読み奉らざらん。兜率天に生れたまて、娛樂快樂し給べし。

(『栄花物語』もとの零・四五)

と、やはり勸発品のこの一節を引用していた。

このように、「即往兜率天上。弥勒菩薩」のくだりは、勸発品ないし「八のまき」の中でも比較的著名な部分だったようである。女帝が「八のまきのおくほど」を誦んでいたという思わせぶりの記述も、この經文への連想を誘うものではないだろうか。そして、死の直前に『法華經』を含む五部大乘經を書写供養した上、『法華經』全十巻を暗誦し、臨終まで手放さなかったという女帝の兜率往生を、暗に告げているのではなからうか。

巻八にも、女帝と兜率天との関わりを示唆する場面がある。八月十五夜、時の帝令上帝の病を癒すために天降った女帝が、藤壺の夢枕に立ち、二首の歌を詠みかける。その二首目は、

あか月をたましく庭にまつ人をふかきに  
ごりの袖はかはかず (二三二)

というものであった。

一般に釈教歌において、釈迦涅槃後のこの世を闇夜に、弥勒の竜華三会を暁に喩えることが多い。特に「暁を待つ」は、弥勒の出現を待望する表現として定着していた。

勸発品 即往兜率天上

はるかなるそのあかつきをまたずとも空  
の気色はみつべかりけり

(『長秋詠藻』四三〇)

高野にまゐりてよみ侍りける

寂蓮法師

暁をたかのの山にまつほどやこけのした  
にもあり明の月

(『千載集』釈教・一二三六)

前者は例の勸発品の経文を、後者は弘法大師の入定伝説を踏まえ、それぞれ弥勒下生の時を「あかつき」と詠む。女帝の歌の上句も、三会の暁を待つ、の意に解釈できよう。歌に

続く「あひみんことをおぼせかし」という言葉もまた、契の深さを弥勒の世での再会に託す慣用表現に基づくものと思われ、女帝自身が兜率内院に生まれて弥勒の下生を待っているばこそ、ふさわしい言であろう。

以上のように、女帝の兜率往生は本系の物語の中でもそれとなく仄めかされており、巻五以来の一貫した構想と見なしてよいと思われる。

では、なぜ女帝の往生の地として、殊更に兜率天が選ばれたのであろうか。もちろん弥勒信仰は早くから盛んであり、浄土教の広まった院政期以降の貴族社会でも、来世信仰としての上生信仰は、極楽信仰と渾融する形で存続していたとされる。また、鎌倉初期には、念仏宗に対抗して、旧仏教側の明恵・貞慶らが兜率往生を説いていた。しかし浄土として的一般性を考えると、やはり兜率は極楽に一步譲らざるを得ないようである。また、『我身』の作者が特に熱心な兜率信仰の持ち主だ

ったとも思えない。概してこの物語には真摯な宗教性がむしろ稀薄なのだが、散見されるものも、「西のむかへ」「あみだ仏」等、典型的な極樂信仰に則ったものばかりである。

もっとも、極樂往生が不都合だった理由の推測は困難ではない。極樂と兜率の優劣がしばしば論議される中で、極樂優位の主張の一つに、女人の不在が数えられていた。「かみあげすがた、ましてきよげ」なる天女たちが、「ひかりをさゝとはなちて、まひあそびあはれたりける」というような情景（巻六・一九五）は、極樂ではあり得ないのである。

また、極樂は輪廻を解脱した浄土なので、そこから人間界に転生して再び戻って行く、という論理は成り立ちがたい。女帝がかくや姫の面影を帯びた天女である以上、やはりその帰る先は「天」でなければならぬのである。

では、なぜ数ある天の中でも兜率天なのか。たとえば同じく欲界の第二天、帝釈の住む喜

見城を中心とする忉利天は、兜率に劣らず著名な天である。六道を論じる『往生要集』は、忉利天でもって天道を代表させているほどであるし、最高の歓楽の地として引き合いに出されることも多い。また、『今昔物語集』の載せる説話によれば、妻に耽溺する難陀を教化しようとする釈尊が、より美しい天女を見せるために連れて行った先も忉利天だった。

物語に目を転じると、『浜松中納言物語』の「かうやうくゑんの后、今そこの世の縁尽きて、天にむまれたまひぬる」（巻四・三七九）という一文を、『無名草子』が「河陽県后、忉利天に生まれたる」（二三九）と引用していることはよく知られている。現存する『浜松』の伝本に「忉利天」とするものはないようだが、かつてそのような本文が存在したのかもしれない。あるいは仮に『無名草子』作者の記憶違いないし解釈だったとすれば、天といえは忉利天が第一に連想されたという



背景が考えられるだろう。構想を『浜松』に負うところの大きい『松浦宮物語』でも、主人公たちは「第二の天」、つまり忉利天の天衆ということになっている。

遡って『宇津保物語』、『俊蔭卷』では、俊蔭が出会った七人の仙人が、「我は、昔、兜率天の内院の衆生なり。いささかなる犯しありて、忉利天の天女を母として、この世界に生まれて」(二七)と名乗る。男性は兜率天に、女性には忉利天に配されていることになる。『法華驗記』所載の道成寺説話でも、老僧の供養により蛇身を逃れた男女は、男は兜率天、女は忉利天に生まれ変わったという<sup>12)</sup>。『法華驗記』『今昔』には、その他にも忉利転生譚が散見されるが、大半は女人及び異類の話である。釈尊の母摩耶夫人が死後忉利天に生まれたという伝<sup>13)</sup>をはじめとして、女性と忉利天の関わりは深いのである。

このように見てくると、忉利天の方が兜率天以上に物語的想像力を喚起し、かくや姫の

「月の都」に重なりやすいようにも思われる。しかし、『我身』が敢えて兜率天を選んだ理由は、女性と結び付くことが多いという忉利天の性格にこそ求められるであろう。つまり、忉利転生者の多くが女人・異類である背景に、来世の地として、極楽はもちろん兜率天よりも劣るという認識が看取できるのである。欲楽を享受し長寿を保つ忉利天の天女も、やがては五衰を迎え輪廻転生を免れない。『往生要集』にせよ難陀を導いた釈尊にせよ、忉利天の快樂を示す真の目的は、その虚しさを説くところにあつた。忉利天への転生は、人間界に比較すれば望ましいものであるが、決して理想的な往生とはいえないのである。

同じ欲天に属するとはいっても、兜率内院に生まれる者は不退転で、将来弥勒の三会に値遇して得脱することを約束されている。その意味で極楽にも匹敵する浄土なのだが、一方、人間界への通路も失っていない。要するに兜率内院とは、天と浄土、双方の性質を兼

ね備えた場所なのである。そうした二重性は、天界へ帰還する天女にしてかつ往生を遂げるという女帝の性格を照らし出すに効果的であろう。兜率往生という構想は、女帝の人物像の根幹に関わって選択されたものと考えておきたい。

## 二

女帝の兜率往生の意味は、『狭衣物語』を踏まえることにより、一層鮮明になるだろう。先に掲げた勧発品の一節は、早く『狭衣』の用いるところであった。天稚御子降下事件の翌朝、昇天の機会をむさむさ逃してしまった狭衣が、兜率内院へ行くのならば迷わなかったのにと悔む場面である。

ありし楽の声も、天稚御子の御有様など、思ひ出でられて、恋しうものの心細し。  
「『兜率の内院に』と思はましかば、とまらざらまし」と、おぼし出づ。「即往

兜率天上」と言ふわたりを、ゆるらかにうち出して、押し返し、「弥勒菩薩」と、よみ澄まし給へる、まことにかなしくて、「また兜率天の迎へや、得給はんずらん」と、きこゆる折しも、

(卷一・五二・三)

逡巡と後悔を繰り返す狭衣の人生、その始発が、帝の涙に昇天を断念した天稚御子事件であった。天稚御子は「月の都の人」(同・四六)と不可分の存在のようで、かくや姫昇天場面の投影は明らかである。さらにそれは兜率天とも限りなく近接していたことが、右の引用部分から察せられる。また、天稚御子事件と並んで悔恨の種となる「普賢の御光」(卷二・二一〇)、そのきっかけもやはり、「弘法大師の御すみか尋ね見たてまつりて、猶この世をも逃れなん。弥勒の御世にだに、少し思事なくて」(同・二〇五・六)という、今度は下生信仰中心だが、弥勒信仰に基づく高野詣であった。阿弥陀信仰と併存する形で

はあるが、弥勒信仰は狭衣の道心の大きな核をなしており、出家・現世離脱願望は兜率上生願望と置換可能なものであったといつてよい。

さて、『我身』が『狭衣』を摂取した形跡は随所に見られ、「さころもの女二のみや」（巻七・二二〇）と、その名を挙げることでさえある。この場面も、兜率内院を媒介として、『我身』への影響関係が予想されるところである。ただし、『狭衣』の当該部分には少なからぬ本文異同がある。勸発品を引用するのは深川本はじめ第一系統の諸本のみで、古活字本などは兜率天に一切言及しない<sup>21</sup>。『我身』が依拠した『狭衣』の本文系統を決定できない以上、直ちに両者の関係を論じるわけにはいかない<sup>22</sup>。

しかし、女帝の物語に『狭衣』の影響が窺えるのはここばかりでない。むしろ、狭衣という天皇となった主人公の先蹤を、意識的に踏まえているように思われる。まず、登極の

次第。狭衣の場合、時の帝が病のため退位しようとした際、次期東宮候補には嵯峨院の若宮しかいなかった。しかし、若宮の実父で、しかも比類ない器量を備えた狭衣が臣下のままでは不都合である旨、天照神の託宣があったため、現在の東宮を差し置いて狭衣即位の運びとなる。思いも寄らぬ展開に、本人は「ふさはしからぬ身の宿世」（巻四・四二六）と嘆くが、逃れる術もない。一方『我身』では、三条院には二人の皇子がいたが、継嗣のない伯父嵯峨院の心情を酌み、かつ女帝の才質を見込んで位を譲ることになる。当人は「あさましうおもひのほかなる御すくせを、いとみぐるしうわびしと」思いながら、「たゞあきてぞおはします」という状態であった（巻四・一二四）。

片や二世源氏、片や皇女と、通例を覆し、しかも第一継承者を差し置いての即位、本人たちは不測の運命に茫然とするばかり。世人は批判を内に秘めつつも承服するしかない。

「近き世に、かゝる例も殊になきことなり」と、おほやけを誇りたてまつるべきやうもなければ、「猶、いかなる事にかあらん」と、言ひ悩む人多かるに、……

（『狭衣』巻四・四二六）

「ひさしうたえたる事を、いかゞ」と、世人かたぶけど、これはいとさまかはりたる御ゆづりなれば、又ひさしくおはしますべきにしあらねば、たれもいかゞはきこえ給はん。（『我身』巻四・一二四）

彼らの即位によって傍系皇族の王権復帰が果たされる点といい、両者の登極の状況はよく似通っている。『狭衣』の次期東宮選定の過程で、「げに、女帝も、かゝる折や、昔も居給ひけん」（巻四・四二三）と、女帝の可能性が云々されていたことも示唆的である。

さて、帝位に違和感を捨て切れぬ狭衣は、「今二三年だに過しては、いみじからん絆どもをもふり捨てて、世を背きなん」（同・四

三七）と、頻りに退位・出家を願う。女帝もまた、一時的な在位のつもりであつたが、退位の意向は度々阻まれる。特に、「いよいよ讓位を決意した矢先に東宮が発病し、「かくれてもあらはれても、たゞあまてる御神のおしみきこえさせ給ゆへのみ、あらたにみえきこゆる」（巻五・一四〇）というのは、狭衣即位を促した帝の病と天照神の託宣を移してきたものと思われる。

しかし、狭衣と女帝との間には決定的な相違が生じることになる。退位と出離の素志を実行に移したか否かという点である。そしてそれは、問題の兜率天と密接に関わる事柄であつた。

狭衣は、出家を志すたびに挫折を繰り返しながら、ついに帝という現世最高の地位に到達する。しかしそれは、彼を仏道からさらに遠ざける結果となつた。物語の範囲では讓位を果たせなかつた狭衣は、最後の場面に至つてもなお、すでに出家した女二宮に執着する

迷妄の姿をさらすのである。一方女帝は、幾度の妨害にも退位の意志を捨てず、六年目に敢行する。そして、別れを悲しむ三条院や藤壺に哀れを催されながらも決然と死に赴き、兜率内院に往生する。同じく帝位を極めた両者ながら、迷いと悟りの対照は際やかである。先に『我身』が天照神の登場を移動させていることを指摘したが、それもまた、より甚大な抵抗を押し切つて脱屣を断行した女帝の意志の固さを強調する意図によるものである。

退位と兜率往生による現世離脱の実行こそ、女帝と狭衣との分岐点であつた。兜率天への憧れと挫折を、しかもかくや姫の面影をも漂わせつつ語る本文が、現に『狭衣』自体に存在することは、偶然の一致とは思えない。そこには、女帝の兜率往生の証であつた例の經文まで引用されているのである。『我身』が第一系統の本文を持つ『狭衣』を参照し、『法華經』の文句を鍵として、女帝と狭衣と

の懸隔を兜率往生の可否によつて際立たせたと考えてよいのではなからうか。

光源氏をも上回る現世最高の地位を得た狭衣だが、結局迷妄の世界にさまよい続ける凡夫として終わる。一方同じように帝位を極めた女帝は、一切を捨てて浄土へと向かつた。兜率往生は、狭衣を凌駕する女帝の理想性を如実に物語っているのである。

### 三

天に出自を持つ女帝に対し、仏の再誕か天人の生まれ変わりかと噂されても、やはり狭衣は人の子であつた。兜率往生を果たすか否かという差は、詮ずるところそこに起因するのであらう。

帝をめぐる二つの物語は、それぞれの治世の描き方にも大きな相違を見せる。『狭衣』は、女の書く物語の例に違わず、狭衣帝の天皇としての事績やその御代の有様を描くこと

にほとんど関心を向けない。しかし『我身』は、女帝の徳のもと、宮廷はもちろん國中がいかに平穩に治まったか、筆を惜しまず縷述する。

人間界に転生した天女が聖代を築くという話柄は、『松浦宮物語』に見出すことができる。唐の文皇帝の死後、燕王・宇文会が反乱を起こし、幼帝とその母鄧皇后は都を追われるが、住吉神の加護を受けた弁少将の働きにより、反乱軍を撃破して平和を取り戻す。そして、母後の後見と訓育のもとに善政が布かれる。後に皇后自ら明かしたところによると、彼女は初利天の天衆であつたが、唐国滅亡をもくろむ阿修羅の化身（宇文会）に対し、皇帝の要請を受けた帝釈の命により、「天上に時の間のいとまをたまはりて、この国に生を享けて、乱を治め、国を興すべき御使ひ」（卷三・一二三）として降誕したのであつた。弁少将もまた、女身の皇后を助けるために遣わされた天童であつたという。救国という明確

な目的をもって人間界に現れた天女が、その使命を全うした上で、徳政を施し明王の養育に力を注いだ、というわけである。

『松浦宮』とほぼ同時代の成立と思われる『有明の別』も、やはり天女を主人公とする。

彼女は嗣子に恵まれぬ左大臣の祈禱に応じてこの世に生を受け、神の指示により男（右大将）として育てられる。成人後、手段を講じて継嗣を確保するが、帝に正体を見破られて女姿に戻り、入内して二皇子を儲け、中宮・女院に至る。

一身にして男女の役割を果たし、左大臣家に繁栄をもたらした彼女は、同時に天皇家の継承にも寄与している。時の帝も皇子のないことが悩みの種であつたが、ある時、夢想を得た。

そのころ、御かどの御ゆめに、あやしく心えぬことども、うちしきり御らんずれど、ことにおぼしめしわかず。いかなるゆへにかありけん、さばかりの御すゑよ

り、思ふことかなふべきにやなど、こそ  
むまれ給しも女におはすれば、心えず  
おぼしまはせど、いかゞはたしかにたど  
らせ給はん。

(巻一・三四〇)

この夢は、帝と主人公との逢瀬の直前に位置  
していることから、皇子誕生を予告するもの  
であつたと思われる。そして、左大臣家の継  
嗣獲得の際にも夢告が働いていたことを思い  
合わせるならば、これまた神意のなすところ  
であつたと解せよう。

やがて主人公女院の産んだ一宮は即位し、  
二宮は東宮となるが、特に東宮は母親似で、  
女院が右大将時代に身に付けた見識・才芸を  
伝授され、将来を嘱望されている。

たゞ春宮にのみぞ、とりわきいはけなく  
より、あさゆふよろづをきこえさせ給し  
かば、なにごとにつけても、たゞひかり  
かくれ給しこ大將、御かはりには、こ  
の宮のみぞするのよてらせ給べき。

(巻三・四二四、五)

主人公のこの世での使命は、左大臣家のみな  
らず、天皇家にも後継者をもたらし育成する  
ところにまで及んでいたと思しい。人間界  
からの要請により遣わされた天女、幼君を補  
佐・教導する男まさりの母后という点、『松  
浦宮』の鄧皇后に通じるものがあるう。

ところで辛島氏は、かくや姫から『我身』  
の女帝に至る女主人公の系譜の間に『有明の  
別』の女院を位置付けておられる。今詳し  
く述べる余裕はないが、『有明の別』は『我  
身』に少なからず影響を与えた先行物語の一  
つだと思われる。女帝の周辺に限っていえば、  
女帝が藤壺腹の二宮を養子とするのは、『有  
明の別』の女院が次男の東宮を偏愛したこと  
に倣っているのではなからうか。女帝亡き後、  
一宮(悲恋帝)の御代は沈滞気味だったが、  
その悶死を受けて即位した二宮が、女帝の教  
えを守って聖代を回復する。『有明の別』で  
は、女院は右大将の愛児東宮が右大将に代わ  
る世の光となるであろうと、兄帝を凌いで期

待されているのである。

また、『有明の別』の女院は申し子として生誕したが、女帝もその性格を幾分か有している。卷三末尾に東宮御息所の懷妊を知った嵯峨院（当時在位）の羨望が語られていたが、結局皇子に恵まれなかった院の一粒種の姫宮が女帝なのである。「わが世のすゑなくてやみぬる」代わりに、「たゞいかでも、かぎりあらん御位ひとつを」（一〇二）という嵯峨院の期待を背負って入内した彼女は、立后によつてその望みを叶えたばかりでなく、ついに帝位を踐み、父の無念を晴らした。家系継承の責務を一身に担つて誕生し、性差を越えた活躍によつてそれを果たした上、次代の後継者をも用意した天女という点で、女帝は『有明の別』の女院に深くつながっているのである。

さて、『有明の別』の女院の前生は、物語終結部近くの院御賀において、東宮の笛と女院の琵琶の演奏を称えて天女が降臨した時に

明かされた。『我身』でそれに対応するのは、讓位・崩御直前の宸筆法華八講における藤壺の夢であろう。

いさゝかねぶるともおほしわかれぬに  
いひしらずけたかげなる人々の、すが  
たかたちをはじめ、みもならはずいつか  
しげなる、このまうけられたる御丁のあ  
たりの、四王の座につき給べきとおほし  
きも、うへの御前のおはしますみすのま  
へに、いみじうかしこまりてすぎぬ。又  
くももてかしづききこゆるさま、たぐ  
ひなきに、又あやしきうへのまたおほ  
しけるにやとみえて、えもいはずきよら  
なる御すがたにて、この御かたはらにお  
はしける、いといたくうちなかせたまふ。  
あらたまのみとせの月日なをてらせ  
あまつ空には君をまつとも  
とのたまふを、うへはきゝいれさせ給ふ  
けしきもなし。はしをながめいらせ給て、  
にほひそふみのりの花にいそがれて



かひなき月日いかゞとゞめん

とのたまはするを、いかにときこえんとおほしめすほどに、うち見あげたれば、うへはたゞみつるながらに、ながめいりておはします。(巻五・一五〇—)

女帝と天との関わりが、天人の登場によつて初めて直接的に示される場面である。これを『有明の別』の天女降下(巻三・四三三—五)と比較してみよう。

まず、事件のきっかけが片や楽の音、片や仏事という違いに注目される。『我身』ではこの直後の八月十五夜、女帝が「あやしきさきの世のとかやの御て」(一五二)で琴を弾く場面があり、いかにも奇瑞の起こりそうな雰囲気なのだが、その場は特に何事もなく終わる。天人降下は、彈奏場面から仏事の場へと故意に移されているようである。

それに応じて、天降つて来る者もやや性格を異にする。『有明の別』では、『宇津保物語』以来の伝統に則つて、楽の音を賛嘆する

「あまつをとめ」であつた。『我身』の場合、「四王の座につき給へきとおほしき」は、まさしく四天王を指すとして、問題は、「うへのまたおはしけるにやとみえて、えもいはずきよなる御すがた」をした者である。女帝と瓜二つということから、その母嵯峨女院や祖母の水尾院皇后宮(嵯峨院の母)を当てる説がある。確かにこの物語は、血統、特に女系に容貌・性格が遺伝することへの関心が強く、中でも水尾院皇后宮とその子孫の美しさは特筆される。しかしこれまでのところ、女帝と水尾院皇后宮ないし嵯峨女院との容貌の類似には、全く触れることがなかった。この八講自体の目的が嵯峨女院追善であるため、女院説も一概に捨てがたいのだが、母の臨終を見舞えず痛恨していた女帝にしては、再会した亡母に対する態度があまりにそつけないようにも思われる。また、嵯峨女院が何故、娘の意に反してまで、「みとせの月目なをてらせ」と在位の継続を願うのか、今二つ

判然としない。

「うへのまたおはしけるにやとみえ」たというのは、血縁関係ではなく、女帝が天女であることの証なのではなからうか。「有明の別」では、女院の「あやしくむかしよりよのつねの人に、ずしるき御にほひ」が、降下した天女の「こよひのかぜのにほひ」と同じであることによって、女院の前生が明らかになつた。同様に、容貌の類似でもって、女帝もその族類であることを示す天女、それが「えもいはずきよなる御すがた」をした者の正体だと考えておきたい。あるいは、帝位に留まるよう求める姿からは、女帝の退位を惜しみ阻んでいた天照御神を連想できるかもしれない。

いずれにせよ『我身』では、女帝の甚大な功德に應じて、仏法の守護神四天王をはじめとする天衆たちが、女帝礼拝のためにやって来たのである。その「いひしらずけだかげなる人」の、すがたかたちをはじめ、みもな

らずいつかしげなる」という風貌も、「有明の別」の天女が「いひしらずめづらしきさましたる」「なまめかしくいふかぎりなき」であるのに比して、一層高貴な威厳を湛えているといえよう。

さて、『有明の別』の天女は、「おとめこがはなのひとえたとゞめをけ」という東宮の呼びかけに対し、女院の袖の上に「はなのかつらひとふさ」を牽り、

この世にはいかゞとゞめむ君とわがむかしたをりしはなのひとえたとゞめむ」と詠む。「この世にはいかゞとゞめむ」と言

いながら、天女の証拠である「はなのかつら」を女院に奉るということは、ともに天へ帰るよう、女院に促しているのであろう。しかし女院は、

はなのかはわすれぬ袖にとゞめをけなれしくもぬにたちかへるまで

と、まだその時ではないと返答する。それを聞いた天女は、涙を「気色ばかりをし」のう

ひて」天へ昇っていった。

一方『我身』の天女は、逆に、なお地上に留まって世に君臨するよう、涙ながらに女帝に勧める。しかし、女帝の讓位と死への決意は固い。その意志を支えるのは、いずれ五衰を迎えて消滅する「はなのかつら」ならぬ「みのりの花」、即ち『法華經』に代表される仏法であった。同じく天人の要請を拒否し、天人を涙くませるのだが、『有明の別』の女院とは全く方向が反対なのである。

『有明の別』の女院は、使命を担ってこの世に転生した、紛う方なき天女である。本人はその記憶をほとんど失っていたようだが、夢うつつの状態で「なれしくもぬにたちかへるまで」と詠んだように、いずれ天へ帰ることは約束されている。同じように樂によって奇瑞を起こし天人の誘いを受けても、所詮人の子に過ぎなかった狭衣とは、そこが大きな違いである。しかし、いまだ使命が完了していないのか、あるいは人間界の絆を断ち切る

に至っていないためか、ともあれ物語の範囲では、女院はなおこの世に留まり続ける<sup>171)</sup>。

その点は、『松浦宮』の鄧皇后にも共通する。彼女は前世の記憶を保っており、『帰らん道も疑ふところなければ』(巻三・一二六)と、天への帰還を確信している。しかし、『人の身を享けてけるまどひ』(同・一二四)を免れず、弁少将への愛執に引かれ、潔くこの世と訣別できそうにもないと言う。

「さてもはかなき世の命のほどを忘れて、この世ながら、いま一度の対面の待たるるこそ、待ちつけずはとまる心もやとあぢきなきまで」(同・一三一)

その皇后の行末は省筆と僞跋の内にくらまされ、やはり昇天は語られない。

『我身』の女帝は、これら先行物語の天女たちと対照的に、天上・地上双方からの引きとめを振り切って、ついに天へ帰って行く。そしてその強靱な意志は仏法に裏付けられており、昇天は往生という形を取るのであった。

#### 四

天との交渉という観点から大雑把に物語史をたどるならば、天と人間との断絶を告げた『竹取物語』を受けて、人間の物語に徹した『源氏物語』の後、『狭衣物語』等の後期物語は再び天を持ち出して主人公を美化する。しかしそれは同時に、彼らが結局天に到達できない人間であることの証でもあった。続いて『松浦宮物語』『有明の別』は、真正正銘の天人の物語を復活したが、その焦点は現世に生を受けた彼らの葛藤にあり、やはり昇天を語ることにはなかった。

天女の物語を継承した『我身』は、その天への帰還までを描き切った点、さらに『竹取』に近付いたといえる。女帝は嫉妬や愛執といった人間的煩惱とは全く無縁の存在で、皇后時代も他の后妃との確執を避けて里がちであつたし、在位中は関心を寄せる廷臣たちに

一切隙を見せなかったという。まさにこの世の濁りに穢れることなく、天女の清らかさを保持したまま、決然と天へ帰って行つたのである。

しかしもちろん、それは単なるかくや姫の再来ではなく、天をめぐる展開してきた物語史を確かに反映している。まず、『竹取』には、かくや姫の生まれの卑しさ、皇権力との不調和に対し、世俗的価値観からの批判があつた。

かくや姫ののほりけむ雲井はげに及ばぬことなれば、たれも知りがたし。この世の契は竹の中に結びければ、下れる人のこととこそは見ゆめれ。ひとついゑのうちには照らしけめど、もしきのかしこき御光には並ばずなりにけり。

（『源氏』絵合・二―一七六）  
『竹取』以後、天と人間とを切り離した物語において、主人公の理想性を保証するのは、類稀なる容姿・才質とともに、この上ない社

会的地位であつた。その極点が狭衣の帝位、あるいは女性ならば后ということになる。まさしく天女である鄧皇后や『有明の別』の女院も、この流れから外れない。彼女らは元來人間の要請に應じて下されたのであるから、地上の権力と矛盾することなく、后・国母としてこの世に恩恵をもたらすことができた。『我身』の女帝は、皇女・皇后・天皇と、性差の壁を超越した最高級の地位を次々と経て、「もしきのかしこき御光」そのものとなり、遍く世を照らす。かくや姫の難点は、ここに完全に克服されたといえよう。

次に、女帝の篤い道心が語られ、昇天は死・往生という形を取ること。もつとも、仏教思想がすでに『竹取』にも反映していたことはよく知られるところである。月世界という理想郷への昇天は、浄土への往生と容易に重なり合う。仏教が一層浸透するにつれ、『竹取』の影響を蒙った後代の物語が、それを仏教的世界観・死生観と融合させてゆくのは、

自然の成り行きであろう。早くは『宇津保』から『狭衣』『松浦宮』に至るまで、『竹取』的な天と仏教的な天とは、必ずしも一致しないまでも、渾然として不可分の様相を呈していた。

また、実体的な天を持ち込まない『源氏』において、かくや姫の昇天は、紫上や宇治大君の死、浮舟の出家等に投影しているといわれる<sup>三</sup>。特に、「しら露のきえ行心ちする」（巻五・一五九）という終焉の形容において、女帝死去の場面が紫上のそれを範としていることは明らかであつた<sup>三</sup>。加えて、例の法華八講もまた、御法巻の法華經千部供養に倣うものであろう。源氏に協力を求めず、自力で「いつのほどにいとかく色くおほしまうけん」と賛嘆される盛大な供養を催した紫上は、すでに死を予感して、「何事につけても心ほそくのみおぼし知る」状態であつた（四一・一六四）。同様に、五部大乘經を自ら書写し、「わざとよるひるの御いとまいることも

みえざりしかど、いといみじうとゝのへさせ給へる」八講に臨む女帝もまた、「いいたくもの心ほそくのみおぼしめして、ながめがち」だったという（一五〇）。昇天を前に、月を眺めては「心ほそく」思うかぐや姫の姿を、それぞれ仏事の場に置き換えているのであった。

紫土の往生がはっきり記されているわけではないが、法華經供養の功德や手厚い追善により安穩な来世を得たであろうことは、「夢にだに見えこぬ」（幻・四―二〇三）という源氏の嘆きからも察せられる。よって、かぐや姫の昇天と往生とが結合する先蹤として紫土を挙げることができようが、女帝の場合、往生譚の色合いがさらに強くなる。改めて列挙すると、まず、法華八講の功德に感応して、四天王をはじめ天衆たちが降臨したこと。また、三条院が夢に見た、女帝の迎えと覺しい「御覧じなれたるみゆきのにもあらぬたまのこしの、いひしらずかされる」（一五四）

は、かぐや姫を迎えに来た「飛ぶ車」にとともに、往生者が乗る輿をも想起させよう。やがて退位した女帝は、自ら死期を悟って潔斎し、法華經を手にしたまま静かに息を引き取った。生前の功德、往生の瑞相、臨終の行儀と、往生伝の主要素をひととおり備えているのである。

『海人の刈藻』の即身成仏を早い例として、往生譚もすでに物語の話型の一つとなっていた。同じ趣向を用いる『零に濁る』では、帝が退位直後に出家・即身成仏する。『石清水物語』のように、主人公の極楽往生を後日談として締め括っている作品もある。また、往生の前段階ともいうべき出家遁世譚は、中世に盛行した話型であり、散佚物語まで含めれば枚挙に遑がない。もちろんそれは時代風潮の反映なのだろうが、物語史的観点からいえば、道心を抱きながら逡巡するばかりであった薫や狭衣から、さらに一步彼岸へと前進した主人公像がもてはやされたことになる。女

性の方では、浮舟や『狭衣』の女二宮など、出家を遂げる人物が早くから登場していた。『我身』がこれらの物語のいずれかを直接の源泉と仰いだ徴証は今のところ見当たらないが、女帝の死を彩る仏教的莊嚴が、当時流行の往生譚・遁世譚と全く無関係だったとはいえないだろう。

ただし、若菜巻以後出家を切望するようになる紫上を含め、一般に物語で遁世・往生を遂げる人々は、失恋なり愛する者との死別なり、何らかの悲痛な体験を契機として、憂き世を厭い仏に救いを求めたのだった。人間としての悩み・苦しみが大きければこそ、それを突き抜けた悟りが共感を呼ぶ。ところが女帝の場合、仏道帰依に至る経緯がはっきりしない。母女院の死が幾分関与しているようだが、先行物語の往生譚・遁世譚のような激しい動機は皆無である。道心は生来のもものと考えるしかない。やはり天女たる彼女は、かくや姫同様、人間的煩惱に穢されることから免

れているのであった。

とはいえ、決して人情を解さぬ悟り澄ました聖人というわけでもない。両親とのこまやかな情愛が強調されるほか、里住みの多い皇後時代に三条院と文を交わし、登極後は孤閨の寂しさを託ち、死を前に院や藤壺と別れを惜しむ等、女帝は情感溢れる歌を多く残している。卷四以降、女帝が登場するたびに、物語中屈指の情緒漂う場面が描かれてきたといつてよい。しかし、それらの場面はあまりに耽美的・感傷的に過ぎ、生々しい感情を伝える力は乏しいように思われる。女帝においては、愛情や悲しみまでが美化・浄化され、情理を知る人という理想化に寄与しているのではなからうか。

たとえば、女帝との別れを予感して取り乱す三条院に、「かぎりなくあはれと」(卷五・一五四)同情を寄せる条。昇天間際に「君をあはれと思ひいでける」(七四)と詠んだかくや姫はもちろんな、「年ごろの御契かけ離

れ、思嘆かせたてまつらむ事のみぞ、人知れぬ御心の中にも、物あはれにおぼされける」(御法・四一六二)と、我が亡き後の源氏の悲嘆を氣遣う紫上を連想させる場面である。しかし、紫上の感慨は、源氏との長く平坦でない夫婦生活の末に至った境地であつた。また、かくや姫が最後に漏らした「あはれ」は、それまで彼女が地上の論理を峻拒してきたからこそ哀切を深める。一方愛憎を超越したところにある女帝は、常に三条院の側から身を引き、かといって頑なに拒むわけでもなかった。現世に深入りすることなく適度に調和してきた彼女の心情は、迫真性において紫上やかぐや姫に及ぶべくもない。

女帝の見せる人間的感情は、確かにかくや姫の「あはれ」を継承するものである。しかし女帝の場合、それ自体が主題性を担うわけではなく、より幅広く完全な理想像の要件として付与されているように思われる。身分・容姿・才芸とともに豊かな人間的情愛を兼

ね備え、かつ俗世の濁りに染まることなく、仏道に精進して往生を期すという、あらゆる点で非の打ち所のない理想性、それが女帝の人物像の真髓なのだろう。

いずれの物語でも主人公は理想的に描かれるが、それぞれ何らかの点で綻びを残していた。多くの場合、その欠陥こそ、物語の追求するものであったといつてよい。「我身」の女帝は、それら先行物語の主人公たちの理想性を貪欲に摂取し、統合して造型された。かくや姫から天女の清らかさを、紫上から悲しくも美しい静かな死を、狭衣から帝位を、鄧皇后や「有明の別」の女院から現世への貢献を、往生者たちから道心・悟りを、という風に。そして彼ら全てを凌駕する最高の理想像、世俗の論理・天上の価値観・仏教の教理、いずれの立場から見ても完全無欠な存在となつたのである。その女帝にとって、天女の歌舞する天であり、当来仏弥勒の浄土であり、かつ現世とも紐帯を保つ、兜率内院ほど、ふさ



わしい世界はなかったといえようか。

## 五

女帝の造型にこれほど力が注がれているからには、物語におけるその役割の重要さが予想されるだろう。現に、巻五で聖代を実現したばかりでなく、死後まで大きな影響を及ぼし続けることになる。巻七の悲恋帝の御代は、女帝追慕の色調に覆われ、不本意な暗い事件が連続した。続いて最終の巻八に即位した今上帝は、女帝の後継者として再び善政を布く。やがて重病に陥った帝を癒したのは、亡き養母女帝であった。

八月十五夜、今上帝の夢枕に立った女帝は、「いまよりも、いさゝかの御身につゝがあらば」と、「花の一ふさ」を授けた（二二三）。『有明の別』の天女の「はなのかづらひとふさ」、さらに遡って『竹取』の「死なぬくすり」につながる霊物である<sup>131</sup>。しかし、『竹

取』の不死薬が帝の命により焼却され、『有明の別』の花が特に機能を持たなかったのに対し、この「花の一ふさ」は、明王の生命を、ひいては聖代の存続を保証する霊薬として、確実に宮中に保管されることになる。三十六年の治世を予言された今上帝は、全快してますます政務に励み、今度こそ真に申し分ない世が到来する。女帝はその死後まで、後継者今上帝を守護するという形で、現世に多大な恩恵を与え続けたのである。

同夜、藤壺も夢の中で女帝に再会する。苦境に沈む遺児を救うために冥界から訪れ、生者の心迷いを誠める亡き帝という状況、夢を見た人物の反応や、目覚めた後に残る月など、『源氏』明石巻の故桐壺院の夢（二一五六、七）を踏まえたと思われる場面<sup>132</sup>である。しかしここでも重要な差異は、罪障に沈む桐壺院が「いたく極じ」た状態で現れたのに対し、間違ひなく往生を遂げた女帝が、「むかしの御けしきよりはほこりかに」（二二三二）見え

たというところにある。そして、桐壺院の教示はあくまでも現世的であつたが、女帝は藤壺の「なみだもろなる御さま」を誡め、前掲の「あか月を」歌を詠みかけて、来世を思うよう諭す。

また、女帝の残したもう一首、  
君ゆへはいたらぬかたもなきものをなに  
人しれぬ袖ぬらすらん

の第二・三句は、たとえば、

妙音品

法のためきぬとみれども身をわけていた  
らぬかたはあらじと思ふ

(『公任集』二八三)

のように、衆生済度のため、仏菩薩が変幻自在にあらゆる場所に出現することを踏まえた措辞である。彼我の世界を自由に往来して迷いに沈む人々を教誡し、弥勒の世での再会を約束する女帝には、天女を超えて仏菩薩の風貌さえ漂つていよう。後年嵯峨院が、「せんだいへ女帝」の御むかへいちしるく、花ふり

しくといふばかりにて、おほしめす事」(巻八・二四一)、つまり往生を叶えたというように、女帝の威光はこの世の人々を来世に導くところにまで及ばんとしている。

この物語はしばしば歴史物語的と評されるが、それは単に七代四十五年という長期間を描いたというばかりのことではない。特に後半、巻四以降の巻々では、ほぼ天皇一代が一卷に充当し、物語世界の基調は天皇のあり方によって決定されることになる。その虚構の「歴史」は、女帝という超人的存在に領導されて、聖代の大団円で幕を閉じるのである。作品全体を貫く主人公を定めたいこの物語の中で、少なくとも後半部において誰よりも大きな存在感を保ち続けたのが、女帝だったといえるだろう。

女帝の存在の重要度は、彼女の治世下の物語が、例外的にもう一卷追加されたことから察せられる。その巻六において、女帝の兜率往生が四人の近習女房たちとともに再び取

り上げられることの意味については、第六章で改めて考えたい。

〈注〉

(1) 『物語史(源氏以後)・断章―夜の寢覚』『今とりかへばや』から『我身にたどる姫君』へ―(今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院、一九八九年)。

(2) 『我身にたどる姫君』の女帝―物語史における女主人公の系譜―(『徳島大学国語国文学』第二号、一九八九年三月)。

(3) 徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』(有精堂、一九八〇年)、今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』(桜楓社、一九八三年)。以下、それぞれ徳満注・今井注と略称する。

(4) 前掲注(2)。

(5) 市古貞次『中世物語の展開』(『中世小説とその周辺』東京大学出版会、一九八一

年)。

(6) 底本『女房たちし』。

(7) 巻六の成立論については、第五章参照。

(8) 弥勒・兜率信仰については、速水侑『弥勒信仰』(評論社、一九七一年)・平岡定海『日本弥勒浄土思想展開史の研究』(大蔵出版、一九七七年復刊)を参考にした。

(9) 『栄花物語』初花巻など。

(10) 引用は岩波文庫による。

(11) 『浅茅が露』にも『八まきのをくつかた』を誦む場面があるが、ここでは妙莊嚴玉本事品第二十七より、『於八まん四せんさい』の文句が引かれている(一〇六)。

(12) 巻下―九十七。『今昔物語集』巻十五―四十六にも。

(13) 第六章参照。

(14) 『往生要集』大文第三に、諸論が集成されている。

(15) たとえば、前掲の永昭の説法にも、『九重の宮の内に遊戯し給こと、伺利天女の快

樂を受けて、欲喜苑の内に遊戯するに劣らず、喜見の宮殿に興ずるにも勝る」(四六)などに見える。

(16) 卷一—十八。原拠は『法苑珠林』など。

(17) 中世、『古今和歌集』注釈等の場で様々に展開した竹取説話の内、『大江広貞注』所載のものは、竹取翁が地上の求婚者を退け、『帝釈にたてまつらん』と、姫を連れて空へ昇ったとする(片桐洋一『中世古今集注釈書解題』一、赤尾照文堂、一九七一年)。やはり帝釈の居地切利天がイメージされているのかもしれない。

(18) 引用は室城秀之『うつほ物語全』(おうふう、一九九五年)による。

(19) 卷下—百二十九。『今昔』卷十四—三にも。

(20) 『今昔』卷一—二にも見える。

(21) 深沢徹「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造(上)——陰画としての『無名草子』論——」(『文芸と批評』第五卷第三号、

一九七九年十二月)。

(22) 卷三には、女二宮の法華八講の場を浄土に比す描写の中に、「月の光さやかに隈なく、兜率天までは、易く昇り給ぬべかんめり」(三一七)という表現がある。『狭衣』の「兜率天」は、『竹取物語』的な天・月世界と仏教的浄土とを媒介する、ないし両者の渾融する世界のように、その点、前節で見た『我身』の兜率天の扱いに近似する。また、鈴木泰恵「『狭衣物語』と『法華経』——かぐや姫——の(月)の都——をめぐって——」(『国文学解釈と鑑賞』第六十一卷第十二号、一九九六年十二月)は、兜率天という新たな(月)の都が勧進品を介して創出されたと論じている。

(23) 中田剛直編『校本狭衣物語』卷一(桜楓社、一九七六年)による。

(24) 明らかに第一系統の本文によつて当該場面を取り込んだ物語の例に、時代は下るようだが、『あきぎり』がある。

(25)第二章参照。

(26)前掲注(1)。

(27)『松浦宮』の鄧皇后から『我身』の女帝への影響関係については、第三章で論じる。

(28)底本は「などこそ、」と区切り、「こ」は「ゝ」の誤記かと傍記している。大槻修

訳注・全対訳日本古典新書『有明けの別れ』

(創英社、一九七九年)は、「などこそ」

と校訂し、「むまれ給し」は左大臣家に主

人公が生まれたことを指す、と解釈してい

る。しかし、次に述べるように、この「御

ゆめ」は皇嗣誕生に関するものと判断し、

「これほど年を取ってから念願(皇子誕生)

が叶うのだろうか、しかし去年生まれたの

も皇女であつたので、不審に思つた」と解

しておく。

(29)西本寮子『『在明の別』再考―家の存続

と血の継承―』(稻賀敬二・増田欣編『継

承と展開5 中古文学の形成と展開―中古

から申世へ―』和泉書院、一九九五年)は、

女院の役割を、家の存続、家の繁栄につな

がる皇嗣を産むこと、右大将時代の栄光を

東宮に継承させること、の三点にまとめて

いる。

(30)前掲注(2)。

(31)第二章参照。

(32)徳満注は水尾院皇后宮、今井注は嵯峨女

院とする。

(33)宮田光『『我身にたどる姫君』に於ける

人物の対比と系統性について』(『熊谷武

至教授古稀記念国語国文学論集』笠間書院、

一九七七年)。

(34)巻六では、女帝の容姿を「こと人ときこ

ゆべくもあらず、故宮ににたてまつらせ給

へる」(一六八)と述べており、この「故

宮」は水尾院皇后宮と思われる(両注と

も)。ただしここでは、続いて「夢ばかり

もかよひきこえ給はぬ人」つまり異母妹前

斎宮との格差を強調するために、共通の祖

母である水尾院皇后宮との相似が持ち出さ

れたのであろう。巻六の特異な性格を考え  
ても、不用意に物語全体に敷衍することは  
控えたい。女帝に関しては、嵯峨女院及び  
その母（故関白北の方）より続く系統性が  
語られるが、この系統が伝えてきたのは、

「御心せちにきよらにおはしまして、むか  
しのうばうへ（故関白北の方）の御心にや、  
いさゝかもまさなき御うらみなどまじら  
ぬ」（巻四・一〇三）という性格的美質で  
あつて、容貌の類似には全く言及されない。  
それに、「えもいはずきよらなる」という  
最上級の形容は、天女たる女帝はともかく、  
嵯峨女院にはそぐわないようである。

（35）この後の譲位の場面で、女帝は「たゞ神  
などのあらはれおはします心ちして」（巻  
五・一五六）と描写されている。

（36）前掲注（28）大槻氏の訳は、「この世に、  
どのようにしてとどめおきましようや」と  
ある。常盤博士「『在明の別』の「天人降  
下」考」（『実践国文学』第四十三号、一

九九三年三月）も同様に、「いかゞ」を疑  
問の意で解釈している。しかし、女院の返  
歌に対する天女の涙が「天稚御子はうち泣  
き給て」（『狭衣物語』巻一・四七）に対  
応する等、『狭衣』の投影を鑑みて、「い  
かゞ」を反語と取り、天女が女院を天へ誘  
った歌と見ておく。

（37）『有明の別』の現存本は、侍従内侍の打  
ち明け話が途中で断ち切られる形で終わっ  
ており、本来の末尾が欠脱している可能性  
もある。しかし、女院の物語は院御賀の奇  
瑞の場面で最高潮に達しており、仮にさら  
に物語が続いていたとしても、昇天までは  
描かれなかったのではなからうか。なお、  
『風葉和歌集』所載の『有明の別』歌二十  
首は、全て現存本に含まれている。

（38）天女に拙き宿世を予言された『夜の寝覚』  
の中の君、天に転生しながら愛執に引かれ  
現世に戻って来るといふ『浜松中納言物語』  
の唐后も同様。また、散佚物語『夢ゆる物

思ふ』も、天人と人間の姫君との契と破局を描いた物語であつたらしい（辛島正雄「あめわかみこ往還―お伽草子『あめわかみこ』とその源流―」『説話論集』第八集、清文堂出版、一九九八年）。

（39）辛島氏は、女帝にこの世への末練が皆無であることを、昇天前のかぐや姫の哀切な心情と対比し、「物語『竹取』を通り抜けて、それ以前に広がっていたであろう伝承の世界での主題性を継承する」「一見、かぐや姫の再現のようでもあるが、その昇天にまつわる主題のあり方は、およそ対局を向いている」と述べておられる（前掲注（2））。本稿も女帝の強い意志に注目する立場は同じだが、『竹取』を源泉とする他の物語と比較する上で、天の羽衣を着たかぐや姫が物思いのない月世界へ帰って行くという結末の一致に重点を置いている。また、後述するように、現世の人々と別れを悲しむ人情は、女帝にとっても重要な属性

である。

（40）河添房江「源氏物語の内なる竹取物語―御法・幻を起点として―」（『源氏物語の喩と王権』有精堂、一九九二年）・伊藤博「死なぬ薬・死ぬる薬―竹取と源氏―」

（『国語と国文学』第六十四巻第三号、一九八七年三月）・久富木原玲「天界を恋うる姫君たち―大君、浮舟物語と竹取物語―」（『国語と国文学』第六十四巻第十号、一九八七年十月）など。

（41）両注及び前掲注（2）に指摘がある。

（42）たとえば、壬生良門の千部法華經書写供養の時、「天諸童子、華を捧げて来り」「護世の天人、合掌して敬礼す」といった奇瑞が「或は夢の中にあり、或は眼の前にあり」、その後、良門は兜率上生の瑞相を得て息絶えたという（『法華験記』巻下―百十二。『今昔』巻十四―十にも）。

（43）今井注及び前掲注（2）に指摘がある。  
（44）往生の瑞相として「宝輿」を夢に見ると

いう話は、『日本往生極樂記』東塔住僧某甲伝・僧尋静伝・寛忠大僧都姉尼某甲伝などに見える。その他、蓮台・車・舟等が往生者の乗り物となる場合も多い。

(45) 法華經を持して臨終を迎える話は、『法華驗記』巻上―二十、巻中―四十一、六十三、巻下―百二十一などに見える。

(46) もとより性差による宗教性の内実の違いは軽視できるものではないが、ここでは出家という行為を基準に一括している。

(47) 女帝の詠歌は全十七首で、巻四以降に登場する人物の中では三条院の十八首に次ぐ。しかも三条院詠の内十七首までが、女帝との贈答、女帝哀悼など、女帝関係で詠まれた歌である。

(48) 今井注は三条院が女帝に対し「あはれと」思ったと訳しているが、前後の文脈から徳満注の解釈に従う。

(49) この箇所は紫上とかくや姫との関係について、前掲注(40)河添氏論文参照。

(50) 極樂に対し兜率信仰が根強い支持を集めた理由の一つは、下生という形で現世に再帰可能という点にあったとされる(前掲注(8)速水氏著書)。

(51) 前掲注(2)。

(52) 今井注に指摘がある。

(53) 「華徳。汝但見妙音菩薩。其身在此。而是菩薩。現種種身。処処為諸衆生。說是經典」(『法華經』妙音菩薩品・下―二三〇)による。

(54) 第二章参照。



## 第二章 虚構の歴史物語

中世の王朝物語の傾向の一つに、歴史物語的作風といふことがいわれる。その特徴は、統一的な主人公を設定せず、貴族社会を舞台に多数の人々の動向を描きつつ、おおむね数十年にわたる年代記的な物語を展開するところにある。そうした物語の早い例である『海人の刈藻』が、「言葉遣ひなども、『世継』をいみじくまねびて」（『無名草子』二四八）と評されているように、『栄花物語』に代表される歴史物語の手法を取り入れたものとされる。

同様の作風を持つ鎌倉期の物語として、『若の衣』や『我身にたどる姫君』が挙げられている。その内『我身』には、「物語を一貫させるだけの、自他共に認め得るような主人公が無」く、「作者が描こうとするのは、個々

の人物ではなく、むしろ貴族の家々であり上層階級の限られた社会圏であり、そういう家々の年代記なのであった」という概括がなされている。ただし『我身』の場合、歳月の推移をこと細かに追ったり、行事・儀式を煩瑣なまでに記録したりする傾向が、『海人の刈藻』『若の衣』などに比してさほど顕著でなく、その点では『栄花』のような歴史物語の特徴から少しく距離がある。

しかし『我身』は、他の作品とは少々異なつた意味で、歴史物語に近い性格を強く持つていゝるように思われる。しかも、人物の系譜などの点で史実を大幅に取り込み、それに改変を加えることによって、いわば独自の虚構の歴史を描いているように見受けられる。以下本稿では、この物語がいかなる点で歴史物語に接近しているのかを検討し、さらに史実から創り上げた虚構の歴史を追うことによって、作者の歴史意識のあり方をも考察したい。

一般に歴史の書は天皇の事績に重きを置き、天皇一代を基準に構成される。六国史をはじめとする漢文体の歴史書は、編年体を基本とする一方、天皇の代替わりで一区切りとし、帝紀の体裁をも兼ね備えているのが通例である。仮名作品でも『大鏡』『今鏡』『愚管抄』等はいずれも冒頭に天皇の歴史を据えており、『六代勝事記』『五代帝王物語』に至っては、書名自体に代々の天皇を打ち出し

卷八	今上帝	卷頭	「あたらしき御世は…」
卷七	悲恋帝	卷末	崩御
卷五	女帝	卷頭	「いまの御かどは…」
卷四	我身院 三条院	卷末	譲位

ている。道長の栄華を主題とする『栄花』でさえ、形式の上ではさほど顕著でないが、「世継」という別称が端的に示すように、皇位継承史がその根幹にあったとされる<sup>20</sup>。

作り物語である『我身』も、特に後半にあたる巻四以降は、皇位継承の次第に関心を寄せ、物語が帝を中心に展開する傾向が顕著である。見やすいところでは、巻五の並びという特殊な位置にある巻六を除いて、一巻がほぼ帝一代の治世に充当することが指摘できる。それぞれの巻頭部・巻末部から、その状況を概観しておこう。

最後の巻八を除く各巻の巻末はいずれも御代の終結を語り、巻五・巻八の巻頭は新天皇の善政ぶりを称える文章ではじまる。巻七でも、冒頭の女帝追悼場面が終わるとすぐに、「あたらしき御世のよろこび」「御そく位のぎしき」(二〇二)という言葉が現れる。巻四のみ二代にまたがっているが、我身院が位にある部分(巻四全体の三分の一弱)は、巻三・巻四間の十七年の空白期間に生じた変化を説明するとともに、東宮時代の三条院に妃たちが参入する経緯を述べており、いわば三条院即位前紀の役割を果たすものといえよう。原則として一巻一代という帝紀風の巻立が守られているのである。

そして代々の帝は対照的に描き分けられている。「をのづからこうりやうでんにおはしましくらして、くもり日のくるゝをおぼしめしわするゝ時もありしかど」と、龍妃後涼殿を溺愛するあまり公事を怠りがちであった三条院に対し、女帝は「なに事もたゞすがすが

ととゝのへられつゝ、御ぐしなどかきくださるゝまで、露ばかりほどもへず」と政務に励む(巻五・一三二)。続いて叔母の皇太后宮に強引な恋慕を寄せ破滅的な死に至った悲恋帝、その兄の醜聞を教訓に身を修め善政に努めた今上帝という具合に、一代ごとに賢愚が入れ替わる形になっているのである。

さらに各巻の全体的な色調自体が、当代の帝のあり方と即応した対照性を見せている。巻四の三条院の後宮では、中宮藤壺と後涼殿の反目や二組の密通(殿の中將と麗景殿・宮の中將と後涼殿)などの不祥事が起こるが、巻五では女帝によって宮廷の網紀が刷新され、前代の后妃たちもそれぞれの境遇に落ち着いている。巻七は女帝喪失の悲しみの内に幕を開け、三条院が藤壺との夫婦関係を強引に復活したり、右大將(宮の中將)が再び後涼殿と密会するなどの事件が続いた末、皇太后宮・悲恋帝の相次ぐ悶死という悲劇に至る。続く巻八では、今上帝が築いた聖代のも

と、全ての主要登場人物はあるべきところに収まり、あらゆる懸案が解決されて大団円の終結を迎える。要するに巻六を除いた巻四以降の巻々は、当代の帝の賢愚・明暗に対応して、混乱と秩序を交互に繰り返すのである。帝一人一人の「代」というものへ関心を寄せ、その連続と対照を物語展開の機軸としている様が看取されるであろう。

物語の前半部においては、帝と物語世界との関連が後半部ほど緊密とはいえない。巻三以前の巻々では、我身姫君をはじめ比較的限制された人物を中心とする恋愛物語が物語の進行を支えており、巻三における水尾院から嵯峨院への譲位も、その中に組み込まれる形になっている。しかし物語がはじまってまもなくの時点で、長文を費やして当代水尾院の後宮と皇子女たちが紹介されていた（巻一・一四・六）。そこでは三人の皇子の個性が描き分けられ、皇位継承をめぐる問題が浮上しており、帝位の行方に対する関心の高さはす

でに窺われるところであった。

冒頭に述べたように、『我身』という物語には終始一貫した主人公が存在しないに等しい。その中で、物語にある程度の統一性を保証し、物語の進行を導く中心軸の役割を果たしているのが、帝という存在、それも特定の一人の帝ではなく、次々と継承されてゆく歴代の帝であるように思われる。こうした特徴は、歴史物語的作風と称される他の現存物語には見られないものである。この物語を歴史物語に比し得るのは、何よりも、このように皇位継承を基本軸とした物語展開という点においてではなからうか。

しかもそれら歴代の帝やその周辺の人物の造型は、全くの創作ではなく、ある時代の史実に基づいているものと思われる。その模様を次に検証してみよう。

卷四の主な舞台となる三条院の後宮では、

その東宮時代から多くの妃たちが寵を競っていた。即位とともに嵯峨院の姫宮（承香殿皇后、後の女帝）と関白の姫君（藤壺中宮）が后に立てられ、二后並立の状態となる。三条院は最愛の女御後涼殿をも后にと望むが、三人の后は先例がないという世人の疑義に加え、藤壺を後押しする祖母水尾女院の強硬な反対に押されて、当面見合わせることになる。

三人はれいなきことゝ、かたぶく人おほかれど、猶后にたち給べしときこゆ。されど、女院のいみじうのたまはせむつかれば、いましばしとおぼしめすなるべし。

（一〇三）

やがて藤壺が皇子を産み威勢を増すにつれ、不遇の日々を送る後涼殿に対し、関白でさえ同情を寄せるが、

たゞ女院などの、「三人の后と、きゝなはずもあるかな。時の後の皇太后宮といはるゝは、いとまがくしかりける御

代の末にありけるとかや。あるまじのことや」と、いさめ申させ給に、わづらはしうて、えしもおぼしめしたゝぬなるべし。

（一二三）

と、やはり水尾女院に反対されて立后には至らなかつた。

数年後、讓位を決意した三条院は、その直前になつてついに後涼殿の立后を実行する。

御くにゆづりちかくなりて、まづ太皇太后宮、太上天皇の位えさせ給て、つきくあがらせ給ふ。こうりやうでん后にたち給ふ。

（一二四）

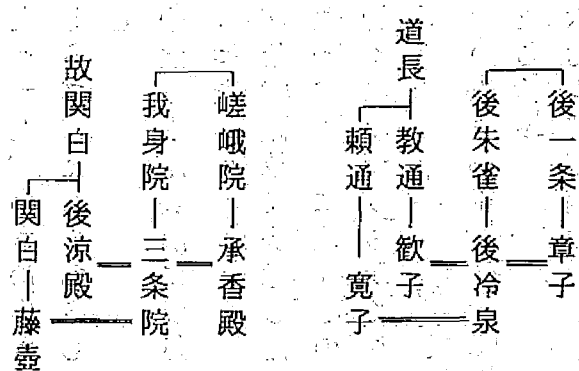
太皇太后（嵯峨院后、嵯峨女院）が女院となつて、皇太后（我身院后、我身姫君）↓太皇太后、承香殿皇后↓皇太后、藤壺中宮↓皇后とそれぞれ移り、後涼殿が中宮に立てられた。まもなく三条院は承香殿に位を譲つたため、ごく僅かの期間ではあったが、「三人の后」が実現したわけである。

一人の帝に三人の后が並び立つ状態は、す

でに指摘されているように、史実においてただ一度、後冷泉天皇の代に存在した<sup>三</sup>。治暦四（一〇六八）年四月十六日<sup>三</sup>、皇后藤原寛子と中宮章子内親王がそれぞれ中宮・皇太后に移り、女御藤原歆子が皇后に冊立されたのである。「時の後の皇太后宮といはるゝ」実例も章子のみ<sup>三</sup>、しかも後冷泉はその三日後の十九日に崩御している。三条院の場合、讓位後も上皇として存命するという違いはあるが、御代替わり直前の慌ただし立后による三后鼎立という事態は、この後冷泉朝に倣ったものではなからうか。そして「いとまがく」しかりける御代の末<sup>三</sup>という水尾女院の非難も、後冷泉の時代に末法に入ったという思想<sup>三</sup>よりは、三后出現の直後に天皇が崩御したという先例の不吉さを指しているものと考えられよう。

もつとも、一方では「三人はれいなきこと」と言い、一方では当代の后を皇太后と称する先例を持ち出している点、厳密な意味で准拠

と定めようとする若干の齟齬を来すのだが、少なくとも三条院の後宮が後冷泉の後宮を参照して設定されていることは、認めてよいと思われる。それは、藤壺—寛子—承香殿—章子、後涼殿—歆子という具合に、三条院の後の一々が後冷泉の後たちと対応することからも察せられる。双方の人物関係を簡単に図示すると、次のようになる。



以下、后妃たちの対応関係を、後冷泉朝の後宮の有様を最もよく伝える『栄花物語』を主に用いながら、より詳しく見てゆきたい。まず関白の娘である藤壺は、関白頼通の娘寛子と同じく摂関宗家の出身で、天皇の伯父として政界第一の地位にある父の権力を背景に、最も勢威を誇る后であつた。

次に承香殿と章子は、単に皇女というばかりでなく、各々の父親まで含めて共通点が多い。承香殿の父嵯峨院と章子の父後一条天皇は、いずれも皇位を受け継ぐ男子に恵まれないう天皇であつた。弟東宮（後朱雀）の皇子誕生を聞いた後一条天皇が、「羨ましげにおぼしめされたり」（楚王の夢・二一五）と羨望したので同じく、『我身』の嵯峨院も、異母弟の東宮（我身院）の御息所が懐妊したことをついとうらやましく」（巻三・八九）思つたという。

兩帝の後（藤原威子・嵯峨女院）については皇子は誕生しなかつたのだが、いずれも帝

後の仲が非常に睦まじく、後宮に他の女性を交えなかつた点も共通する。皇子のない代わりに后との間に儲けた皇女を溺愛し、その処遇を思い悩んだ末、それぞれ「今少し動きなく見奉らん」（歌合・三八二）、「うごきなき御位を」（巻四・九七）と願つて入内を決ずる。しかも、章子を後朱雀の后にというのが後一条の本来の遺志であつたのと同様、嵯峨院も当初は我身院に内意を伺つていたといふ点まで相似している。

入内した皇女たちは、「むつまじくあはれにやむ事なき方」（根合・四四八）「様におろかならず辱く心苦しく」（同・四五六）、「いとをろかにおもひきこゆべくもあらず」（巻四・一〇二）「をもきかたの御おぼえこよなき」（同・一一七）と、その身分柄尊重されることとなる。のみならず、

御方々参らせ給へれど、更に御覧じ入れず、ものじき御けしきにもあらず、よその事におぼしめして、あてには高く、

聞しめし入るゝ御けしきにもあらねば、いとゞあはれに有難く思申させ給て、何事もまづと、この御方の御事をばおぼしめしたり。

(根合・四五六)

という章子、

御心せちにきよらにおはしまして、むかしうばうへの御心にや、いさゝかもまさなき御うらみなどまじらぬぞ、いましほの御おもひもそふべき。

(巻四・一〇三)

れいのなに心なく、おほどかにもてなさせ給へる御けしき、あてになまめかしき物から、いみじうあひ行づきて、おくゆかしう心にくき御さまぞし給へる。

(同・一一二)

という承香殿、いずれも嫉妬を知らぬ心の高潔さが、ますます帝の愛情を深めたのである。このように、承香殿の人物像は、その両親をも含めて章子に似通うところが大きいといえよう。

最後に後涼殿は、表向き故関白と水尾院女三宮との間の娘で、現関白の異母妹にあたる。摂関家の出身であることは間違いないが、父を早くに失ったこともあって、現関白の娘藤壺と較べれば傍流的な立場にあった。いち早く后となり皇子を次々と産む藤壺の威勢が増すにつれ、なかなか后位に手の届かない後涼殿と母女三宮は、「世をうき物に」(巻四・一〇三) 思い、「かへすぐあさましう」(同・一二三) と嘆いていた。そして前述のように、三条院譲位の直前になって漸く立后を果たしたのである。

一方、道長三男教通の娘歎子は、後冷泉の女御となっていたが、後から入内してきた頼通の娘寛子に后位を先んじられてしまう。教通は「いと口惜しうあさましう」(根合・四四八) 嘆いて歎子を里下がりさせ、自らも籠居したという。そして念願の立后が叶ったのは、後冷泉崩御の直前であった。摂関家の嫡流からやや外れた出自ゆえに嫡流側に圧倒さ



れ不遇をかこつていた点が、後涼殿と歠子に共通する要素である。

ところで、歠子は一般に「小野皇太后」の名で知られている。女御時代から小野の山荘で勤行生活を営むことが多く（煙の後・四七五）、出家後は「小野にのみおはします」（紫野・五四五）という余生を送り、その地で逝去したことによる。歠子の小野隠棲は、白河院の小野雪見御幸の逸話<sup>三</sup>によって夙に著名であつた。そして後涼殿もまた、物語最終の巻八、それもほぼ巻末に至つて、小野に引き籠ることになる。すでに皇后に転じ、三条院と死別して出家を遂げた後のことである。

をのといふわたりは、心ふかくおぼしめ  
しまうけて、うつろはせ給にしかば、ま  
して分まいる人もまれに、こゝろぼそき  
御すまひなり。（巻八・二四七）

晩年を小野で寂しく過ごした后宮といえば、小野皇太后と称された歠子へと自然に連想が赴くであろう。この点でも、後涼殿の造型に

は歠子が関わっていると考えられるのである。

以上のように、三条院の「三人の后」の個々の人物像は、後冷泉天皇の后たちに重なるところが少なくない。三后鼎立の設定ばかりでなく、三条院の後宮の構成そのものが、後冷泉の後宮を範として発想されていると考えてよいだろう。

ただし、三条院後宮の発想源は後冷泉後宮に限らないようである。たとえば、絶世の美貌を誇る後涼殿が、「うちにはへこうりやう殿にのみおはします。うへの御つぼねにもつとさぶらひ給ふ」（巻四・一〇三）というほど寵愛された点は、「里に久しくおはします」（煙の後・四七五）ことの多かつた歠子と大きく相違する。社会的立場の弱い妃への宮廷秩序を乱すほどの偏愛という状況が、『源氏物語』の桐壺更衣を想起させるのはもちろんだが、後涼殿の人物造型の根幹に歠子があつたことを考慮すれば、歠子の姉にあたる後朱

雀女御藤原生子が浮かんでくる。

生子は教通が后がねと傳いた長女で、後朱雀天皇に入内して梅壺女御と呼ばれる。天皇は「いと愛敬づきけ高くおかしげに、御髪などめでたくおはしましけり」（暮待つ星・四一二）という美貌の生子を寵愛し、「上の御局にのみおはしまさせ、御心ざし深げに聞えさせ給し御仲らひ」（根合・四三三）であったという。しかし、立后はなかなか叶わなかった。

梅壺の女御殿、御覚、月日に添えていとめでたく世人は申せど、いかなるにか、「后にはえ居給ふまじ」とのみ申す。

（暮待つ星・四一七）

やがて後朱雀が重病に陥り讓位も近くなつた頃、教通はしきりに生子立后を嘆願する。天皇自身も「いみじういとをしう」（根合・四二九）思っていたが、実行できぬまま崩御した。「この人の御女ならぬ人の御子おはしまさぬがならせ給ふ例はまたなきこと」（同・

四三〇）という理由で、関白頼通が難色を示したゆえであった。

娘を后にという教通の願望は、生子・歎子の姉妹に引き継いで託され、二度とも摂関家宗主の立場にある頼通の反対にあったわけである。後冷泉朝の末、頼通が教通に関白職を譲って引退した時点で可能になつた歎子の立后は、まさに姉妹二人がかりでの悲願達成を意味していた。第一の寵妃でありながら摂関家の利害を代表する水尾女院の妨害を受け、しかし最終的には后位に至つたという後涼殿の半生は、この姉妹のたどつた運命を一つに足し合わせた形になつていたのである。

こうした合成的な人物造型は、後涼殿と生子・歎子との関係に限られたことではない。そもそも、皇女・摂関家嫡流の後・摂関家傍流の女御という三者から成る後冷泉後宮の構成は、前代の後朱雀天皇の後宮に極めて似通っていた。後朱雀に入内した摂関家嫡流の娘は、後冷泉を産んだ道長娘嬪子と、頼通の養

女嬪子である。もともと嬪子は東宮妃の段階で逝去しており、中宮となつた嬪子も二皇女を残して早世した。

もう一人、後朱雀の東宮時代に入御しやがて皇后となつたのが、三条天皇皇女禎子内親王である。その禎子は、断絶すべき運命にある皇統の皇女という点で、後冷泉中宮章子並びに『我身』の承香殿と通じるものを持ってゐる。三条天皇には皇后嬪子との間に四人の皇子がおり、長子敦明親王が皇太子となる。しかし『栄花』によれば、敦明はその窮屈な身分を嫌い、

故院へ三条のあるべきさまにし据へ奉らせ給し御事をも、いかにおぼしめして、やがて御跡をも継がず、世の例にもならむとおぼしめすぞ。(ゆふしで、三九七) という母嬪子の制止や、

いとあるまじき御事なり。さば、故院の御継なくてやませ給べきか。(同) という道長の諫めも聞き入れず、東宮位を辞

退してしまった。それが三条皇統(より正確にいえば、三条の父冷泉天皇に発する皇統)の断絶を意味することは、嬪子や道長の言葉の中ではっきり意識されている。

小一条院の院号を授けられて余生を過ごした敦明自身、後年禎子の東宮入内を噂する中で、己の責任で父三条天皇の皇統を絶やしてしまったことを述懐するとともに、異母妹に望みを託すことになる。

「あはれに、故院のいみじうし奉らせ給はんとおぼしたりし物を。おはしまさましかば、さりとともこよなからまし。さやうに参り給て、思様におはせば、いかに嬪しからん。あさましう院の御名残なき。いとをしきに、人のする事にもあらず。我御心とかくてあるとは思ながら、いとも狂をしき事ぞかし」(楚王の夢、二三一)

「思様」の具体的な内容の一つに、后という女性最高位を極めることが含まれていたとす

れば、禎子は皇嗣の絶えた三条皇統の期待に十分応えたことになる。そうした禎子の境遇は、摂関家出身の後（道長次女妍子）を母に持ち、父天皇に大変鍾愛されていたという点も併せて、章子や承香殿に相似する。

さらに承香殿が章子より禎子に近いと思われるのは、父院の住む嵯峨に下がりがちで、しばしば三条院から参内を勧められている点である。内裏に住まうことの多かったらしい章子に対し、禎子は天皇の慇懃にも関わらず、内裏へ入ることを拒んでいたとされる（暮待つ星・四〇四）。もつとも、承香殿の里住みが他の后妃との競合を避けてのものであったのに対し、禎子の参内拒否は源子の入内・立后への反発に由来していたという大きな相違があるが、それについては後に触れる。ともあれ三条院後宮における承香殿の人物像は、禎子と章子との組み合わせによってほぼ完成するといつてよい。

それぞれ相似た境遇を背負って、連続する

二代の天皇に入内した禎子・章子及び生子・歆子、その實在の後妃たち二人ずつが複合されて、承香殿と後涼殿の人物造型に関与していることを確認した。最大の威勢を有する摂関家嫡流の後の存在をも併せ、后妃たちの構成の上で似通うところの大きい後朱雀後宮と後冷泉後宮とを組み合わせたところに、『我身』の三条院の後宮は成り立っているのではなからうか。

### 三

史実に依拠した後宮の設定は、遑つて物語始発部における水尾院の代にも認められるようである。水尾院には、故院の皇女である皇后宮と、摂関家出身の中宮（後の水尾女院）という二人の后がいた。巻四の三条院の場合もそうであったように、皇后・中宮の並立は平安中期以降特に珍しい事態ではないが、ここでは一人の天皇に初めて二后が並び立った

一条朝に注目したい。

一条天皇の後宮には、元服直後に藤原道隆の娘定子が入内して中宮となっていたが、道隆を失った中関白家の没落後、権を握った道長が長女彰子を入れる。まもなく彰子は中宮に冊立され、定子が皇后に移ったことにより、前代未聞の一帝二后状態が出現した。二代の国母となり摂関政治全盛の要の役割を果たした彰子は、孫・曾孫の代まで長寿を保ち、皇室・藤氏双方から尊崇を集めた。外戚摂関家の利害を代弁する水尾女院が孫の三条院の代まで保持した発言力は、そうした彰子の存在の大きさに匹敵するものといえよう。

定子と水尾院皇后宮については、各々の出自は異なるものの、高貴な身分ながら有力な後見を失って不安定な境遇にあり、摂関勢力に支えられた中宮方に押されがちであった点是一致的である。また、立場の弱い反面で、皇后宮、御みめもうつくしうおはしましけるとこそ。院も、いと御志深くおはし

ましける。 (『無名草子』二七八)

のように、後世まで伝えられた定子の美貌と天皇の深い愛情は、水尾院皇后宮の「かぎりなき御さまかたち」及び「まことに御心ざしかぎりなくときめかせ給事、皇后宮にならびきこえ給人しおはせねば」という寵愛ぶり(巻一・一四)に比すことができよう。

そして両后とも天皇に先立って世を去ることになるのだが、水尾院皇后宮の崩御場面は、秋風たちぬれど、つゆとともにのみきえ、まさらせ給へば、かたへはおもひつきて、あるかぎりしめりくむじたり。ゆふぐれのおぎのうはかせすこくふきいで、いとかことがましき袖の露けさに、……

(巻一・三二)

以下、『源氏』の藤壺や紫上の臨終場面などを取り込みつつ、哀感漂う情景を描き出している。一方『栄花』鳥辺野巻も、

かくて八月ばかりになれば、皇后宮にはいと物心細くおぼされて、明暮は御涙に

ひちて、あはれにて過ぎせ給。萩の上風  
萩の下露もいとゞ御耳にとまりて過ぎせ  
給にも、いとゞ昔のみおぼされてながめ  
させ給ふ。(二一三)

という巻頭から、定子の寂しい出産と逝去を  
哀切に語っていた。最愛の后を失った水尾院  
・一条天皇が、ともに深く悲嘆したことはい  
うまでもない。摂関家の権勢を背景に威を振  
るう申宮と、天皇の寵愛を頼りとするはかな  
い境遇の皇后との並立、そして秋の情趣と悲  
哀感に彩られた皇后の死といった水尾院後宮  
の有様は、一条朝の史実から得たところが大  
きいのではないだろうか。

次に、一条天皇及び水尾院の皇子女たちを  
比較検討してみよう。それぞれの后たち所生  
の皇子女を挙げると、次のようになる。

定子――脩子(第一皇女)  
――敦康(第一皇子)  
――嫔子(第二皇女)

彰子――後一条(第二皇子)  
――後朱雀(第三皇子)

皇后宮――嵯峨院(一宮)

二宮

女三宮

中宮――我身院(三宮)

女四宮

男女の配分が若干ずれるものの、人数等相似  
た構成となっている。中でも留意されるのが、  
敦康親王と『我身』の二宮との対応である。

敦康は、后腹の第一皇子でありながら帝位  
に即けなかつた親王である。一条天皇は「あ  
はれに人知れぬ私物」として敦康を鍾愛して  
おり、讓位にあたっても、内心では「よるづ  
を次第のまゝに」第一皇子の立坊を望んでい  
た。しかし結局「はか／＼しき御後見もなけ  
れば」という理由で断念し(初花・二九六)。

彰子の産んだ第二皇子を東宮に立てる。その後二度（三条天皇の譲位及び敦明親王の東宮辞退の折）立坊の機会を逃した敦康は、式部卿宮として短い生涯を終えた。

一方『我身』の二宮は、諸皇子の中で最もすぐれた容貌に、「うたて世の人のそしりきこゆるまであだめき過て」（巻一・一五）という勾宮的性格を持ち合わせた人物で、水尾院にとってはやはり最愛の皇子だったらしい。しかし譲位の際には、「二の宮の御事を、いみじうおぼしめせど、このたびさへあるべき事ならねば」（巻三・六九）と判断して、中宮腹の三宮を東宮と定めている。かつて皇后所生の一宮が東宮に立った時でさえ、「あぢきなくそおほしむすほゝるべかりし」（巻一・一四）と不満顔であった申宮が、続いて二宮の立坊を承知するはずがないのであった。そして十数年後、巻四で再び登場した二宮は、式部卿となっている。

最愛の皇后の遺児として父帝の鍾愛を集

め、しかも兄弟順からすれば第一の東宮候補でありながら、摂関家を外戚とする異母弟に敗れた皇子、という二宮の人物像の輪郭は、敦康親王に酷似する。二后の勢力関係に加えて、二宮―敦康の対応により、水尾院後宮の設定に一条天皇後宮が影響を及ぼしていることは、否定できないものとなる。

先に、三条院の後宮が後朱雀後宮と後冷泉後宮とを組み合わせて造型されていることを確認した。一条天皇と後朱雀天皇の間に在位した三条・後一条の二代は、それぞれの皇女禎子・章子と承香殿との関係から敷衍すれば、その父嵯峨院に重なることになる。一条―水尾院の対応をもとに考えた場合にも、嵯峨院は水尾院の次代という点で一条を継いだ三条に該当する一方、水尾院の皇子の中で初めに即位したという点では後一条と同じ立場にある。つまり次に図示するように、『我身』の水尾院・嵯峨院・三条院の三帝は、一条から後冷泉に至る實在の歴代を、即位の順序も

そのままに覆っていることになる。



こうした史上の皇統譜との対応関係は、偶然の結果であろうか。嵯峨院と三条院の間に挟まれた我身院についても、検討する必要がある。我身院は物語に登場する帝の中で最も影が薄く、特徴にも乏しいのだが、水尾院の中宮腹の三宮にして、水尾院の皇子の中で二番目に即位したという点に着目すれば、彰子所生的一条天皇第三皇子である後朱雀に該当するといえよう。

一方、我身院の後宮では、故関白の娘で中宮となった我身姫君一人が、「ならぶかたなき御おぼえ」（巻四・九六）を誇っていた。当初我身院に打診されていた承香殿の入内

も、「たはぶれにもわくる御心し。おはしまさねば」（同・九七）ということである。嵯峨院と同様に、関家出身の后を生涯唯一の妻として守った帝、そうした例を史実に求めれば、やはり後一条天皇しか見出せない。後に後朱雀の后妃となる姫子・生子及び延子（道長次男頼宗の娘）はいずれも本来後一条への入内が希望されていたが、「たゞ今の時の后にて、また並ぶ人なく、たゞ人の様に候ひおはします」（殿上の花見・三四二）という中宮威子に憚って実行できなかったのだと伝えられている。

こうしたことから、我身院に後一条・後朱雀両天皇の面影を認めることができるならば、水尾院から三条院に至る歴代は、史実とより緊密に対応することになる。単にある実在天皇をモデルに、一人の帝が造型されたというに留まらないのである。相連続する二人の実在天皇を組み合わせたり、逆に一人の



天皇の性格を物語中の二人の帝に分与するなどの操作を加えつつも、『我身』の皇統譜は、全体として一条朝以降の皇位継承史をなぞるように形成されているのではなからうか。

#### 四

先に述べたように、歴代の帝を軸に物語が展開するところに『我身』の特徴があり、歴史物語に似た印象を与える要因でもあったが、その皇統譜は、一条朝以降という特定の時代の史実をもとに形成されていた。その際主な資料となったのは、すでに以上の比較においてしばしば用いてきたところだが、やはり一条から後冷泉までの期間を一作品の内に含む『栄花物語』であっただろう。しかし、『栄花』が『我身』に提供したのは、史実という素材ばかりではなかったように思われる。

『栄花』の歴史叙述の特徴の一つに、後宮

の占める比重が高く、政治権力の帰趨も後宮と連動して描かれる場合の多いことが挙げられる。それは女性が仮名で綴る歴史として自然な題材であったばかりでなく、天皇との外戚関係を基盤に発展した摂関政治の繁栄を語るに適切な方法でもあった。一方『我身』においても後宮は重要な場で、物語に描かれる具体的な事件の大半は、後宮を直接の舞台としないまでも、後宮に端を発し再び後宮に収斂するといっても過言ではない。

たとえば、『源氏物語』以降物語の定番である密通事件が、『我身』には五例あるのだが、その内の三例までは廷臣と后妃との間（故関白と水尾院皇后宮・殿の中將と麗景殿・宮の中將と後涼殿）に起こったものである。それによって誕生した不義の娘たち（我身姫君・忍草姫君・初草姫君）はみな、後に実父に引き取られて帝や東宮に入内することになる。また、中納言（後の関白）と女三宮との密通は、中納言への女四宮降嫁、中納言の父

故関白への女三宮降嫁に連動しており、二皇女の母にあたる水尾院中宮と皇后宮との反目が少なからず絡む事件であったと思われる。

やがて中納言と女四宮との間に生まれた藤壺、女三宮との密通により生まれた後涼殿は、それぞれ三条院後宮に入内して、再び対立関係を繰り返すことになる。もう一つは悲恋帝と皇太后宮との悲劇的な事件だが、その遠因を求めれば、関白やその子左大将（殿の中將、後の左大臣）に適当な娘がおらず、幼い帝が権門出身の妃のいない後宮に不満を抱いていたことに行き着くのである。

これらをはじめとして、物語中の主要な事件は、後宮をめぐる発生し展開してゆく。それは、『我身』が男女の恋愛を主たる題材とする王朝物語である以上、代々の帝を機軸に据えて展開するならば、当然予想されることでもあったが、そうした後宮での出来事の多くは、摂関家姫君の入内や摂関家子息への内親王降嫁などによって、天皇家と摂関家が

いかに結び付くかということに関わってくるのである。

また、この物語は、天皇を軸に展開すると同時に、随所に藤原摂関家の論理を垣間見せる。その中心が、「うちのほかのきさき」（巻四・九七）を阻止しようと躍起になって、娘の女四宮とともに孫娘藤壺を盛り立てる水尾女院である。藤壺自身も、「かぎりありて、わがうちをつぐべかりけるすくせのこよなさにこそ、かばかりもまじらひきこえけん」（巻五・一三九）と我が身の責務を見極めており、母娘三代にわたって、摂関家権力の支柱となる自覚を強く保持しているのだった。その他、摂関家に后候補のいない悲恋帝の御代には「大宮（藤壺）のあかぬ事なき御すくせにも、いつしかうちつがせ給はゞ、おもふさまならましを」（巻七・二〇三）、今上帝の御代に左大臣が娘を儲けた際には「大宮のきこしめす御心ちは、おとゞにまさりてやおほしけん」（巻八・二四〇）等、摂関家の後宮政策を支

持する立場からの言は少なくない。

皇位継承の次第を主軸に据え、摂関政治の論理に基づいて、後宮という舞台を媒介に、天皇と摂関家との関係を描いてゆく。こうした『我身』の物語展開もまた、『栄花』の歴史叙述の方法を踏襲したものではなからうか。先に検討した史上の皇統譜との対応にしても、多くの場合個々の天皇自身の資質や事績というよりは、后妃とその皇子女を含めた後宮の有様に基づいていたのだが、『我身』が『栄花』から得たものは、素材としての史実に留まらなかったと思われる。

ただし後宮を政治の舞台として描く方法は、『栄花』以前に『源氏』が作り物語の世界で編み出していたものであった。物語冒頭における桐壺院後宮の状況をはじめとして、女御たちの後見勢力が絵合という風流な行事を通して鎬を削った冷泉院後宮など、『源氏』が決してあらわには描かない公の世界の権力闘争は、後宮という場に反映されていた。周

知のごとく『栄花』は『源氏』から様々な影響を受けているのだが、それは後宮を叙述の主対象とし、後見の有無を重視するなど、摂関政治の諸概念によって歴史を捉える視点にまで及ぶという指摘もある<sup>三〇</sup>。

そしてその『源氏』自身が、歴史との関係を頻繁に論じられる物語であった。鎌倉時代すでに発生していた延喜准拠説は『河海抄』で大成され、中世古注釈の世界では、『源氏』を史書と同一視する認識さえ珍しくなかった。そこまで極言せずとも、醍醐天皇―桐壺帝を中心には、物語の皇室周辺系の譜が史実と重なり合うという事実には、否定できないものがある<sup>三一</sup>。特に准拠を有効に用いる第一部の物語は、光源氏に栄華の道を歩ませる過程で、皇位継承や政権闘争の始終を現実性もって描いており、一箇の虚構の歴史の趣を備えているといえよう。

『我身』がこうした『源氏』から影響を受けたところも、少なくなかったと思われる。

皇室周辺の人物像を系譜全体として史実に依拠する点が、第一に挙げられよう。また、光源氏の絶大な栄華を支えたのは、藤壺との間に生まれた不義の子冷泉帝であつたが、『我身』でも、后妃との密通によって誕生した娘たちがやがて入内し、摂関家の地位を保証することになる。後宮における密通事件を政治の文脈に取り込むこともまた、必ずしも直接『源氏』をまねたとは限らないにせよ、その流れを受け継いでいることは間違いあるまい。

しかし『源氏』においては、皇位継承をはじめとする宮廷史も、基本的に主人公光源氏の立場から、彼の栄華達成への道筋に合せて描かれる。一方、統一的主人公が存在せず、代々の帝という歴史を体现する存在を機軸に、その周辺の群像の動向を語つてゆく『我身』は、やはり『栄花』のような歴史物語、『栄花』の中でも、道長物語の性格が濃厚な正編よりは、明確な中心人物を持たず、天皇

家と摂関家を中心とした宮廷史を綴る続編の世界に接近している。同じく史実を取り込んだといつても、『源氏』の准拠は光源氏の物語のための一つの方法であつたのに対し、『我身』は『栄花』などに取材した歴史自体を、虚構の世界で描き直すことを志向していたように思われる。

史実に准拠して歴史性の濃厚な物語を構築した『源氏物語』、その『源氏』の多大な影響を受けて仮名で歴史を書き記した『栄花物語』という具合に、歴史と物語は相互に交渉を繰り返してきた。そして再び『我身』は、『栄花』の伝える後宮中心の歴史に材を取り、『源氏』の方法をも継承しながら、いわば虚構の歴史物語を創り上げたのだといえよう。しかし実をいうと、最も顕著な形で史実との関連が見られた「三人の後」に関する記述が、『我身』の主たる歴史資料と思しい『栄花』には存在しない。後冷泉朝の後半を語る煙の後巻の最終記事は治暦三（一〇六七）年

十月の宇治行幸、続く松の下枝巻の冒頭は三年後、すでに後三条朝に入った延久二（一一〇七〇）年となっており、その間の歎子立后、後冷泉天皇崩御、後三条天皇踐祚などの重要な出来事を欠いているのである。

とはいえ、『今鏡』には天皇の病中に歎子が皇后となつた旨が記されているし、

皇太后諱歎子……去治暦四年四月臨<sub>二</sub>天

皇晏駕之剋、忽冊為<sub>二</sub>皇后<sub>一</sub>

（『中右記』康和四年八月十九日条）

皇太后宮歎子は……治暦四年四月十九日

に后に立ちたまふ。この夕帝崩じたまへり。（『拾遺往生伝』卷下・三七三）

のように、歎子の立后が後冷泉の崩御直前であつたことは、諸文献の伝えるところである。

また『十訓抄』は、白河院小野雪見御幸の逸話を記す中で、歎子について「入内の夜、院、隠れさせ給ふ」（第七・二九一）と述べる。

この記述には幾分誤伝が混じっているかもしれないが、歎子に天皇崩御のイメーシがま

つわり付いていた証左となろう。後冷泉朝最末期に慌ただしく生じた一帝三后という事態は、異例が重なっているだけに、後代まで記憶されていたものと思われる。

しかし、後冷泉から後三条への御代替わり前後の記事が『栄花』にないという事実には、十分注意を払っておきたい。それは偶然の欠落ではなく、書くことができなかったのだと、煙の後巻の巻末で『栄花』自身が述べているのである。

世の変る程の事々もなく、俄に宇治の人へ頼通へおほしめす事のみ出で来たるこそ怪しけれ。後冷泉院の末の世には、宇治殿入り居させ給て、世の沙汰もせさせ給はず、春宮と御申悪しうおはしましければ、その程の御事ども書きにくうわづらはしくて、え作らざりけるなめりとぞ人申し。春宮とは、後三条院の御事也。

（四八二）  
後冷泉崩御直前、頼通は関白職を教通に譲り、

政務から身を引いて宇治に隠遁した。その原因は東宮（後三条）との確執にあったというのである。

やがて即位した後三条は、摂関家を外戚に持たない自由な立場にあり、親政を目指して摂関勢力と対立することになる。『栄花』は正編以来、摂関政治の繁栄を描いてきたが、それは天皇家と外戚摂関家との一体化によってもたらされるべきものであった。特に道長がその頂点を極めた後は、統編の頼通の代に至るまで、天皇と摂関との仲は常に良好であったように伝えられている。その『栄花』にとって、後三条の登場によって両者が対立関係に入り、摂関政治が衰退の兆しを見せるという実態は、確かに書きづらいものであったに違いない。

もちろん現存する『栄花』は、以下松の下枝巻・布引の滝巻を経て紫野巻まで続き、後三条・白河の治世を覆い堀河天皇の代に至るのだが、文体等種々の異質性から、それらは

別作者によって書き継がれたものであらうとされている。では、後三条の譲位・崩御までを含む松の下枝巻において、摂関家と対立した彼の治世は、いかに語られているのだろうか。

松の下枝巻の冒頭は、後三条の皇女に仕えていた源基子（小一条院男源基平の娘）が天皇に寵愛されて皇子を産み、更衣どころか女御の榮に浴したという話題からはじまる。摂関家と全く関係のない基子の幸いは、「めでたし」「いみじ」としきりに称えられる一方、「いとあざましきなり」という感想も見える。

やはりこの作者は、「入道殿（道長）に后・帝はおはします物と思ふに」（四八六）という摂関全盛期の通念を保持しているものと思しく、それに反する事態に驚きを隠せず、やや戸惑っているようでもある。

また、もし後冷泉の時代に同様のことがあったとしても、頼通への遠慮からこれほど皇子をもてはやすことはできなかっただろうと

述べ、さらに、「何事もたゞ殿へ頼通」にまかせ申させ給へりき」という後冷泉に対比して、後三条の性格を、

この内の御心いとすぐよかに、世中の乱れたらん事を直させ給はんとおぼしめし、制なども厳しく、末の世のみかどには余りてめでたくおはしますと申けり。人に従はせ給べくもおはしますさず、御才などいみじくおはします。後朱雀院をすくよかにおはしますと思申しに、これはこよなくまさり奉らせ給へり。世人怖ち申たる、理なり。(四九〇)

と描写する。天皇と摂関家との対立をあらわに記すことは決してしないが、両者の関係が以前と変容したことは、後冷泉朝との比較という形で暗に示されているのである。

その後、師実(頼通男)の養女賢子が東宮(白河)に入内し寵を受けるといった摂関家の慶事も語られるが、無条件に摂関政治を賛美してきた煙の後巻以前に較べ、かなり色調

が異なっていることは否定できない。『栄花』の作者がどれほど自覚していたかは疑問だが、後冷泉から後三条への代替わりが歴史の一転機であったことは、作品の申に自ずと反映されているといえよう。

『栄花』のこうしたあり方に着目されるのは、『我身』における史上の皇統譜との対応関係が、後冷泉―三条院の代で途切れているからである。三条院を継いだ女帝に匹敵する実在天皇を摂関時代の史実から見出すことは、到底無理であろう。代々の帝の造型を史実に依拠し、一条以降の歴代天皇をひととおりたどってきた『我身』は、ここで大きく歴史から離れることになる。それがちやうど歴史の側では後冷泉から後三条への継承期、『栄花』が執筆を断念した時点にあたることは、『栄花』が『我身』の最有力資料であったとすれば、偶然の一致と片付けられないのではなからうか。

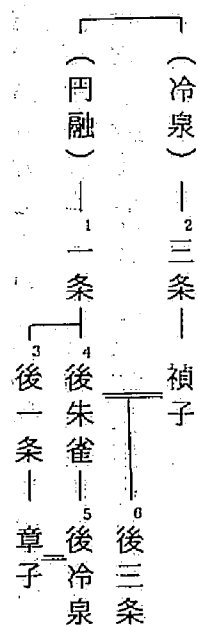
『我身』に登場する七代の帝の内、三条院までの四代は、一条天皇から後冷泉天皇に至る史上の皇統譜をなぞるように形成されていた。ところが、次に即位したのは三条院の皇后承香殿だった。奈良時代まで遡らなければ実例を見出せない「女帝」の誕生によって、物語は平安朝の史実から大きく離れてしまったように見える。

ただし、物語最後の帝である今上帝には、再び後冷泉の次の後三条天皇に倣った造型を見出すことができる。後三条は後朱雀天皇の第二皇子、母は三条天皇の皇女禎子内親王である。つまり後三条の即位によって、皇位を子孫に伝えることのできなかった三条天皇の血統が、女系を通じて皇統の正流に復帰したことになる。一方『我身』の今上帝は、三条院と藤壺中宮との間に生まれた第二皇子だが、出生後すぐに承香殿（女帝）の養子に迎

えられていた。やがて即位した今上帝は、勤行三昧の余生を送る嵯峨院にも、「むかしの御心をきてたがはず、わきてつかふまつる心さしをつくしきこえん」（巻八・二三一）と、孝心篤かった女帝の遺志を継いで孝養を尽くしたという。血のつながりこそないものの、今上帝は養母女帝を通して、皇子に恵まれなかった嵯峨院の流れをも継承しているのである。

後三条天皇と『我身』の今上帝は、ともに「両流ヲ内外ニウケ給テ継体ノ主トナリマシマス」（『神皇正統記』一四〇）天皇だったことになる。ここで改めて、史実と物語における天皇家の系図を比較対照してみる。先に検討したように、『我身』の登場人物には二人の實在人物が合成されていることが多いため、厳密な一対一の対応は定めがたい。しかし大局的に見て、皇統の二つの流れが後三条・今上帝によって収束されるまでの過程は、並行しているといつてよいだろう。





皇后宮

2 嵯峨院 — 5 女帝

1 水尾院

7 今上帝

3 我身院 — 4 三条院 — 6 悲恋帝

中宮

そして史実においても物語においても、二つの皇統の最も大きな差は、摂関家との外戚関係の密度にあった。三条天皇の場合、母超子は藤原兼家娘で道長の姉にあたり、その点では同じく兼家娘詮子を母とする一条天皇と同じ立場にある。しかし超子が早くに亡くなったこと、詮子が道長を特に引き立てたことなどから、道長との関係の深さにおいて、三条は一条に劣っていたといわざるを得ない。

一方『我身』という物語は、皇位の帰趨をめぐる問題を含め、皇室系（水尾院皇后宮系）と摂関家系（同中宮系）との対立から融和へという枠組みで捉えられることが多い。皇室・摂関家という区別は必ずしも厳密なものではないが、嵯峨院の母は皇女、我身院の母は関白の姉妹、摂関家との外戚関係の点で両者の格差は歴然としている。一条から後三条に至る皇位継承の史実を、外戚が微弱で断絶しかけた皇統が、皇女の入内によって摂関家を外戚とする皇統と結合し、両統の流れを受け継ぐ皇統の誕生を見る、という流れで捉えるならば、『我身』の皇統譜がほぼ同様の過程をたどっていることが確認できよう。

後三条と今上帝の類似点は、系譜上の位置に留まらず、天皇としての資質にも及ぶ。前述のように、『世中の乱れたらん事を直させ給はん』と意欲的に親政を志した後三条の治世は、『よるづの事、昔にも恥ぢず行はせ給て、山の嵐、枝も鳴らさぬ世』（『今鏡』）手

向・三五」と、後代まで絶賛されている。今上帝も、「なにごとにつけても、たゞ世のまつりごとすなほに、たみやすからんことをつくりいださむとのみ、よるひる御心にかけて」て政務に励み、「めやすき御代」を実現したのだった（巻八・二三一―二）。

また、今上帝の弟東宮と後三条の次代白河天皇との間にも、共通項が見出せる。皇太子時代の白河に師実の養女賢子が入御したことは先に触れたが、賢子の実父源顯房は、師実の妻麗子の兄という関係にあった。一方『我身』の初草姫君は、右大臣（宮の中將）が関白の落胤である北の方との間に儲けた娘という触れ込みで、伯父左大臣（殿の中將）の後援を受けて東宮に入内している。縁戚関係を結んだ摂関家と賜姓源氏との協力のもと、源氏出身の女御が入内して寵を集めるという後宮のあり方において、『我身』の東宮は白河に重なる。このように物語最終部に至ってもなお、今上帝―後三条、東宮―白河と史実

をなぞってゆく意識は見受けられるのである。

しかしながら、天皇と摂関家との関係から考えた場合、ここでは大きな差が生じている。今上帝の実母が摂関家出身の後藤壺であり、さらに東宮も同じ藤壺所生の皇子だったのに対し、後三条・白河はいずれも摂関家を外戚としなかったという点である。後三条の母后禎子内親王は道長の外孫とはいえ、摂関家からは「スコシノキナリケリ」（『愚管抄』巻四・一八七）という存在であり、しかも姫子の入内・立后以来、頼通と不和であったとさえ伝えられる。また白河の母茂子は、異母兄頼通に対抗して禎子を後見し、後三条の立太子にも尽力したという道長五男能信の養女であった。そもそも後三条の後宮には摂関宗家出身の娘がいなかったのに対し、『我身』の今上帝には左大臣の娘忍草姫君が入内して中宮となっており、摂関家は母后と中宮を自家出身者で固めた上、次代東宮とのつながりを

も確保していることになる。これは摂関体制の最も安定した状態の典型であり、摂関家との縁が稀薄だった後三条の御代とは実に対照的である。

今上帝治世下の摂関家では、藤壺の父関白が薨じた後、その子左大臣が内覧の宣旨を蒙ったという。関白には就任しなかったようだが、内覧の実質的な職掌は関白に等しかったとされるし、道長でさえ一条・三条朝では内覧左大臣であつたことを考慮すれば、内覧という地位は、決して摂関家の権力衰退を意味するものではあるまい。むしろ天皇・摂関いずれかの専制ではなく、双方がそれぞれの役割をバランスよく果たすことのできる状態という認識があつたのではなからうか。摂関家出身の慈門でさえ、

関白摂政ト云コトハ、必シモタエズナル  
コトニハアラズ。……時ノ君ノ御器量ガ  
ラニテ、カツハヲカル、コト也。ヨノス  
エハ、ミナ君モ昔ニハニサセ給ズ、マコ

トノ聖主ハアリガタケレバ、イマハ様ノ  
事ト摂政関白ノ名ハタフルコトナシ。ソ  
レモ御堂へ道長ノハジメ、一条院、三  
条院、知足院殿へ忠実ノハジメ、堀河  
院、コノフタ、ヒハ内覧バカリニテ、関  
白ニハナラセ給ザリケリ。ヤサシキコト  
也。（『愚管抄』巻三・一五九〇六〇）

と、「マコトノ聖主」には摂関は不要とし、  
道長や忠実が内覧のみで関白にならなかつた  
ことを評価しているほどである。  
親しく政務に精励する明王今上帝とそれを  
補佐する外戚藤原氏、両者の協調の要となる  
のが母后の存在だが、その藤壺は常に宮中に  
あつて帝を後見し、「たゞ御心ひとつなる世」  
（巻八・二四四）というほどの影響力を持つ  
ている。忍草姫君の入内・立后は、天皇と摂  
関家との絆をますます固くした。上皇三条院  
は在位中より政務を怠りがちだったが、帝の  
父院となつた今も口出ししている気配はな  
い。今上帝の御代は、天皇が摂関勢力を抑圧

して独断専行するのでもなく、外戚が天皇を無視して専権を振るうのでもなく、院政期のように上皇が実権を握るわけでもなく、天皇・外戚・母后・上皇らが各々の分を守つて、協調的に務めを果たしているのである。摂関政治という体制のもとで、これは最も望ましい宮廷のあり方だったといえるのではなからうか。

同様に理想的な構図は、巻五で語られた女帝の御代にも当てはまる。女帝は「かぎりなくらうく」じく、いたりふかゝりし御心をきて「（一二九）を控え目ながら發揮してゆく一方で、母方の伯父にあたる関白、及びその子左大将（後の左大臣）」との協力も欠がさない。

はかなきほどの事にも、をのづから人の  
はからひ申すべく、のちにとかくなどあ  
りぬべきさまの事は、大とのをばさる事  
にて、左大将に、うるさきまでのたまは  
せあはせぬ事なく、かぎりなくたのみお

ほしめしたるすぢ、ことに人に過たる物  
から、……（一四一）  
さらに、関白の娘藤壺が常に女帝の側にあつて、補佐の任を果たしていた。

そもおなじきさきときこゆるなかにも、  
いみじういたりふかく、むべくしき御  
心ざまなれば、関白殿の、あけくれまい  
らせ給はぬ御かはりに、まだきによろ  
づをのたまはせをきてつゝ、みかどのふ  
た所おはしますやうなり。（一三〇）  
女帝の母后嵯峨女院も、除目にあたつて参内  
し後見している。一方父の嵯峨院は、嵯峨に  
隠棲してほとんど都に出て来ることもなかつ  
たという。三条院も、

つかさめしなにやかやと、さるべき世の  
大事をばさらにもいはず、あさ夕のこゝ  
のへのうち、かぎりあるとしのうちのお  
ほやけごとなどは、たゞ御心とおこなは  
るべきよしをのみ、そうせさせ給へば、  
……（一二九）

と、女帝に政務を一任していた。今上帝と同様女帝の御代においても、天皇・摂関・母后・上皇といった諸勢力のうるわしい調和のもとに、理想的な摂関政治体制が具現していたのだった。

こうした天皇と摂関家との協調的な関係を史上の後三条の治世と比較した場合、大きな懸隔があることは明らかであろう。後三条の時代には教通が引き続き関白の地位にあったが、外戚関係のない関白は、親政を志す天皇としばしば対立した。その類の逸話は『愚管抄』『続古事談』等に伝えられ、『栄花』でさえ、

一院いとあざやかにすぐ／＼しく、人に従はせ給べき御心にもおはしまさゞりしかば、関白殿も、え御心にもまかせさせ給はずなどありしかど、……

（布引の滝・五一八）

と、婉曲ながら両者の反目に言及している。やがて次代の白河が讓位後も権力を保持し、

摂関や天皇との間に摩擦を生じつつ院政を行うようになる。摂関政治の時代は完全に終わりを告げる。『我身』はそうした歴史の流れと対照的に、摂関政治という体制を大前提に、全てがほどよく均衡を保ち円満に調和する聖代に到達したのであった。

一条朝から後冷泉朝という摂関全盛期に倣った貴族社会を描く『我身』は、主要資料の『栄花』と同じく、天皇家と摂関家との一体化による協調的な体制を理想としていたと思しい。その『我身』にとって、両者が対立関係に入る後冷泉朝末期以降の歴史は、『栄花』同様「書きにくうわづらはしく」感じられるものだったのであろうか。ちょうど『栄花』の記事欠落期間にあたる三后鼎立の先例を、水尾女院は「いとまが／＼」かりける御代の末の出来事と認識していた。彼女が摂関家の利害を代表する人物であったことを考慮すれば、それは立后直後の天皇崩御という凶事ばかりでなく、後冷泉朝の終息とともに

はじまった摂関政治衰退をも示唆していたのかもしれない。

自らの史観に甚だしく反する事態に遭遇した時、史実という制約のある歴史物語『栄花』は、一度そこで筆を擱くしかなかった。一方作り物語たる『我身』は、形の上で史実をなぞる意識を保ちつつ、実際の歴史とは根本的に異なる独自の虚構の歴史を綴り続け、申し分ない理想の聖代を創り上げることができたのではなからうか。

## 六

一条朝以降の史上の皇統譜を追うように進んできた『我身』だが、単にその時代の歴史を再現すべく漫然とまねただけでないことは、史実と乖離する結末を見れば明らかであろう。しかしそうした実際の歴史からの転換は、最後に至って唐突に起こったものではあるまい。それ以前の段階から、史実を取り込

む一方で、大団円へ向けての改変を加えていたであろうことが予想される。

最も重要な分岐点は、巻四で三条院の中宮藤壺が二人の皇子を産み、将来にわたる摂関家の外戚権を保証した時点であろう。三条院の後宮に対応する史上の後朱雀、後冷泉の後宮では、頼通や教通の娘たちに皇子が誕生せず、摂関家と縁の薄い後三条の即位を余儀なくされたのである。また同じ巻四において、殿の中將と麗景殿、宮の中將と後涼殿との密通がはじまったが、その二組の密通により生まれた姫君たちが成人してそれぞれ今上帝・東宮に入内し、御代の安泰と繁栄に貢献することになる。少なくとも巻四の段階において、史実に依拠するかたわら、調和世界実現のための操作がはじまっていたことは確かである。

それと並んで重視されるのは、『栄花』が行き詰まった後冷泉から後三条への継承期に該当する巻四末で、女帝の即位という歴史離

れを起こしたことの意味であろう。史上の皇統譜との対応関係は度外視しても、平安・鎌倉時代の現実には「女帝」の存在が極めて特異であることは否定できない。もっとも、女帝誕生に至る前史が先行物語の中に見出されることは、すでに辛島正雄氏が論じておられる<sup>15</sup>。たとえば『狭衣物語』巻四では、時の帝が退位を思い立った際に女宮立場の可能性が云々されているし、『今とりかへばや』では朱雀院の女一宮が実際に東宮に立てられて、「女東宮」が誕生する。その女東宮実現のモデルとして、近衛天皇天逝の後、鳥羽法皇の皇女暲子内親王を女帝に擁立する動きがあったという史実も指摘されている<sup>16</sup>。

しかし『我身』における女帝即位の状況は、これらの諸例と比較してもなお特異である。辛島氏も言及されているように、『狭衣』や『今とりかへばや』で女宮の立場が取り沙汰されあるいは実現した背景には、皇位を継ぐ

べき男御子がいらないというやむを得ぬ事情があった。そして、『狭衣』では主人公狭衣の即位という形で決着が付いて、女東宮は避けられたし、『今とりかへばや』の女東宮も、女主人公が入内し皇子を儲けた後にその地位を退いている。両作品における女帝の可能性は、主人公に栄華の道を進ませる過程で、物語が克服してゆくべき課題として設定されたものであり、初めから実現の見込みはなかったといつてよい。暲子内親王擁立にしても、皇位継承者の人選に迷う鳥羽法皇の脳裡に兆した苦肉の策であつたと思しく、結局法皇の第四皇子（後白河天皇）の踐祚という妥当な解決に落ち着いている。

つまり、先行物語や史実において持ち出された女帝擁立案は、適当な男子皇位継承者を探しあぐねた場合の窮余の策であり、可能な限り回避すべきものという認識が前提となっていた。しかるに『我身』の三条院には、摂関家出身の後藤壺腹の皇子という歴とした皇

嗣が二人もおおり、この皇子に位を譲ることに何ら障害もなかった。そうしない方がむしろ不自然である。にも関わらず三条院は、「ひさしうたえたる事を、いかゞ」（巻四・一二四）という世人の疑念をよそに、躊躇なくいとも簡単に女帝への譲位を実行してしまうのである。

その第一の理由は、継嗣のない伯父嵯峨院への同情と配慮であつたという。

さがの院の御心をきてをはじめ、皇后宮の御ことを、猶いといみじう思ひきこえさせ給あまり、かの御すゑの世におはしまさぬも、いとおしうおほしめさるゝにより、むかしもれいなきにあらずと、御位をゆづりきこえさせ給。（同）

跡を継ぐ皇子のいない嵯峨院は、「たゞいかでも、かぎりあらん御位ひとつを、わが世のすゑなくてやみぬる御あはれびにも」（同・一〇二）と、せめてものことに姫宮の立后を期待して、すでに多くの妃のひしめく東宮（三

条院）に、敢えて興入れさせたのだった。その願いは成就して、「いともうれし」（同・一〇三）と喜んでいたが、さらにその姫宮が帝位に至るといふ僥倖にめぐりあつたのである。

嵯峨院の感激がいかにかりのものであつたか、想像するにあまりあるが、巻五の女帝の朝覲行幸の場面では、「をしのかはせ給ふ御袖もたゆげなり」（一三五）「うちゑみ、うちなみだぐみつゝ、みたてまつらせ給」（一三七）等、娘の晴れ姿に感極まって涙を流すばかりの嵯峨院の様子が、実に印象的に描かれる。同時に、女帝への異例の譲位を断行した三条院に対して、「たが御をきてならねば、院の御心ぎしを、返々しはたれおはします」（一三八）と、深い感謝の念を表している。

女帝誕生の最大の意義は、後継ぎのいない嵯峨院の嘆きを慰撫するところにあつたと考えられよう。皇子のない代わりに皇女を皇嗣に、というわけである。これは確かに思い切



った発想であるに違いない。しかし完全に物語作者の創意であつたのだろうか。何か参考にした例がなかつただろうか。

継嗣のない天皇の皇女が嫡流を継いだ天皇の後となるというパターンは、実際の皇室の歴史においても幾度か繰り返されている。『栄花』の語る範圍でいえば、まず朱雀天皇が「いかで後に据ゑ奉らん」（月の宴・二八）とかしずいていた一粒種の皇女で、冷泉天皇の后となつた昌子内親王。それにすでに論じた禎子・章子両内親王、及び章子の妹で後三条天皇に入内した馨子内親王が挙げられる。断絶皇統の期待を担う彼女たちは、后となることでその任を果たしたのであり、即位など実際問題として考慮の外であつた。ただしその可能性、というより夢のような希望が語られていたことはあつたらしい。章子内親王の場合である。

章子は万寿三（一〇二六）年の誕生、中宮威子の入内後九年目にして初めて授かつた子

だけに、同じことなら男子であればとの思いはありながらも、父後一条天皇の喜びは大きかつた。『栄花』は残念がる女房たちを諭し励ます天皇の言葉を伝えるが、その中に「女帝」の語が現れる。

「こは何事ぞ。平かにせさせ給へるこそ限なき事なれ。女といふも烏滯の事なりや。昔かしこき帝く、皆女帝立て給はずはこそあらめ」（若水・二七九）

女子でも落胆することはない、女帝に立つた先例もあるではないかというこの発言は、女房ばかりでなく天皇自身の気を引き立てるためのものであり、期待の皇子を産めなかつた后へのいたわりでもあつただろう。この時点で、あるいはこれ以後も、後一条が本気で内親王の即位を考えたとは思えないのだが、後年もう一度、「女帝」の語が章子の周辺に現れることになる。

承保元（一〇七四）年、章子が院号宣下を受けた際、天皇の母后でないという理由で、

本来女院に支給されるはずの年官を賜らなかつたことに對し、

「例はみかどの御女、后に立ちて、後に女帝に居給もなくやはありける。まして院分などかなからむ」

(布引の滝・五一)

と異議を呈する上達部がいたというのである。章子の年官に関する『栄花』の記述は他史料と齟齬しており、この上達部の発言の信憑性にも疑いが残るが、いずれにせよ、皇女↓后↓女帝という、『我身』の女帝と全く等しい経路が、章子と無縁のものではないと認識されているのである。

「三人の後」の一人、継嗣のない天皇の皇女という点で、章子は『我身』の女帝の人物造型に關与していた。その章子をめぐって、實際問題として実現性はほとんどなかったにせよ、「女帝」の期待が語られていたことは注目に値しよう。断絶する運命にある皇統の慰撫策として皇女を即位させるという、一見

奇抜な構想もまた、章子に託された願望を發想源とし、その可能性を実現させたものではなかつただろうか。

もつとも女帝には実子がなく、嵯峨院の皇統は再び絶えることになるが、女帝の養子今上帝が位を継いで、晩年の嵯峨院に孝養を尽くす。直接の子孫ではないにせよ、嫡流皇統とのつながりを確認した嵯峨院にはもはや思い残すこともなかつたか、やがて先立っていた愛娘女帝に迎えられる、往生を遂げたという(巻八・二四一)。このように女系を通して皇統に復帰する過程が、史上の三条―禎子―後三条という系譜と相似形であることは、先に述べたとおりである。

史実において、三条・後一条と、子孫に皇位を伝えることのできなかつた天皇が二代連続し、それぞれの皇女に期待が寄せられていた。章子の場合には叶えられなかつたものの「女帝」の夢が託され、禎子の方は、父天皇の崩御からずっと後になるが、所生の皇子が皇位

を継ぐことによつてその任を果たした。自ら天皇となりまた義理の国母となつた『我身』の女帝はこの両者を足し合わせたような働きをしたことになる。それによつて、嵯峨院の子孫断絶の嘆き、三条・後一条両天皇と共通する無念は、完全に慰撫されたのである。

嵯峨院とその娘女帝の人物造型が、三条・禎子及び後一条・章子という史上の二組の父娘に拠っていることは、この点からも確認されるだろう。その内、三条天皇の系統との対応関係は、今上帝・後三条の代までつながつてゆくだけに重要である。物語の結末において史実と乖離するに至つた過程を、嵯峨院系統と三条系統とを今一度対比することによつて、検討しておきたい。

三条天皇は、母后を媒介とする摂関家とのつながりが薄かつたばかりでなく、皇后・城子との間に多数の皇子がいたこともかえつて災いし、一条天皇の二人の皇子を外孫に持つ道長に快く思われなかつたらしい。道長が三条

や城子にしばしば嫌がらせを行つていたことは、『小右記』の記事などから明白である。

もつとも『栄花』や『大鏡』はそうしたことに一切触れず、特に『栄花』は、絶えず三条や城子に好意的な道長を描いている。とはいえ、眼病や内裏焼亡などの不運も重なつて早々に讓位を余儀なくされた三条天皇に、悲劇性が付きまどつていたことは否定できない。

三条天皇の悲運はその崩後まで続き、皇太子に立つていた第一皇子・敦明親王も、即位に至る前にその地位を退いてしまう。ここでも『栄花』はやはり、自由な身に戻ることを望む敦明に対し、道長は翻意を促したと美化するが、『大鏡』の方は、道長方の圧力が皇太子・辞退の真因であつたことをも明かしている。

翻つて『我身』の場合、水尾院の中宮・皇后宮を起点として、摂関家を外戚とする系統とそうでない系統とに分かれるとはいえず、後者が摂関家側から一方的に圧迫を被つたという印象はない。何といつても、中宮方の領袖

であるべき故関白その人が、早くより皇后宮に思いを寄せ、秘かに子までなした仲で、「たゞいかで、我心ざしとおほししらるばかりのふしをとのみ、人しれぬ御心ひとつにおもひたばかり給」(巻一・二〇)と、後見のない皇后宮に誠意を尽くし、甥の三宮(我身院)を擁しながら皇后宮腹の一宮(嵯峨院)に東宮位を譲ったため、妹の中宮に恨まれるほどであった。さらに臨終の皇后宮より遺児の行末を託された故関白は、嵯峨院に北の方腹の娘を入内させ、後見の姿勢を明らかにしている。

このように、政治的利害を度外視した故関白と嵯峨院との良好な間柄は、ある意味で『栄花』が描く道長・三条天皇の關係に通うともいえよう。ただし、道長の過分なまでの好意が彼の徳性のみに帰せられている点、やや無理が残っていたのに対し、『我身』の故関白には、母后への恋情という説得力のある理由が与えられているのである。

退位して嵯峨に隠棲した後の嵯峨院の暮らしは、「おほかたの御心いとよしありて、なだらかな院の人徳と、后嵯峨女院の勢望に引かれて、「いましも中く」なびきつかふまつらぬ人なく、はなやかなる御すまひ」だったという(巻四・九七)。こうした嵯峨院夫妻の人望は、嵯峨院の造型に関わったもう一人の天皇後一条とその后威子を想起させるものがある。二人は幼い皇女たちを残して相次いで早世したが、頼通・教通をはじめその遺徳を偲ぶ人々が遺児たちに誠意を込めて奉仕し、「めでたうおはしますみかどの御名残はかくこそはおはしましけれ」(暮待つ星・四一九)と噂されたという。ともあれここでは、摂関家との關係の稀薄な嵯峨院がさして不遇を味わっておらず、故関白の積極的な支援、その没後は嵯峨女院の存在に院自身の徳が加わって、在位中も退位後もそれなりに安定した境遇にあったことを確認しておきたい。

そうした嵯峨院にとって唯一の心残りが皇  
嗣のないことであつたが、その無念は女帝及  
び今上帝の即位によつて充足され、皇位を継  
いだ異母弟の系統へ恨みや対抗心を抱くど  
ろか、その厚意に感激するばかりとなる。系  
譜上対応する位置にある史上の三条天皇が、  
たとえ道長からの圧力をあらわに伝えられず  
とも悲劇性を帯びており、特に皇嗣問題では  
大きな痛手を被つていたのと比較する時、嵯  
峨院の生涯ははるかに恵まれたものであつた  
といえよう。子孫の断絶を遺憾に思う嵯峨院  
の存在が、たとえ中宮系皇統との敵対關係に  
發展するところまではゆかずとも、結末の理  
想的な調和世界に一抹の影をさすものとなり  
かねないことを思えば、確かに女帝の即位は、  
皇嗣に恵まれない皇統を慰撫し、「理想的な  
世の中に導く方法」であつたに違いない。  
さらに史実においては、三条天皇の皇女禎  
子内親王も、摂関家との軋轢による不遇を経  
験していた。東宮時代からの妃であつた禎子

に憚らず、頼通が養女姫子を後朱雀天皇に入  
内させ中宮に立てたため、禎子は参内せず里  
邸で嘆きがちの日々を送ることになったので  
ある。

宇治殿の故中宮を参らせ奉らせ給へりし  
に、女院へ禎子へはやがて入らせ給はで  
やませ給にき。人の御もてなしにや。我  
御心と入らせ給はざりしにや。

（松の下枝・四八九）  
姪にあたる禎子を蔑ろにするかのような頼通  
の行為、それに対する禎子の反発は、禎子が  
後朱雀の第二皇子を産んでいたことにより、  
感情的な問題に留まらぬ事態に發展する。「愚  
管抄」によれば、後三条天皇の頼通に対する  
深い「御意趣下モ」の根源は、姫子入内には  
じまる禎子・頼通間の不和にまで遡ると認識  
されていたらしい（巻四・二九二）。もつと  
も慈門自身は、後三条と頼通が対立していた  
という通念自体に否定的なのだが、状況的に  
ごく自然な推測であろう。

この里住みの多い后という禎子像が女帝（承香殿）に受け継がれていること、ただしその理由は大きく異なっていたことは先に触れておいた。女帝が里に下がりがちなのは、賑やかな後宮において、「あまりきほひがほなるもつゝましろ」（巻五・一〇三）という謙虚さによるものだった。他の后妃に対して嫉妬や競合心の全くない女帝は、摂関家の権力を背景に威勢を誇る藤壺とも「いとうるはしき御なからひ」（同・一二三）を保ち、その皇子出産にも「さらになにともおぼさざるべき」（同・一二〇）という鷹揚さを見せている。

女帝のこうした性格設定が章子内親王に由来するらしいことも、すでに述べた。幼くして両親を亡くした章子は、伯父の頼通から大切に世話され、その娘寛子とも和やかに交歓しつつ、後冷泉の後宮において確固たる地位を占めていた。同じく断絶皇統の皇女として入内した後でありながら、摂関家との関係い

かんによって、禎子と章子の境遇は大きく異なることになった。この両者の合成を基盤に造型された女帝は、摂関家と親密な関係を保った上で皇位継承者の養母ともなり、不遇感を味わうことは一切なかった。それゆえ、禎子の産んだ後三条が摂関家に反発したような事態は、女帝の養子今上帝には起こりようもないのである。

繰り返し述べるように、嵯峨院―女帝―今上帝と連なる系譜は、史上の三条―禎子―後三条に重なり合うのだが、三条・禎子が摂関家の栄華の陰で味わった不遇感は、嵯峨院・女帝においてほぼ払拭されている。そこに介在するのが、もう一つの源泉たる後一条・章子の父娘である。皇嗣がないという共通点を持つ後一条との組み合わせにより、嵯峨院は摂関家とも終始良好な間柄を保つことになる。その嵯峨院の流れを受け継ぎ、しかもまさしく摂関家出身の実母を持つ今上帝であれば、摂関家と協調的な姿勢を取ることは自然

であろう。悲劇性を帯びた三条系統を母方の先祖に持ち、摂関家に対する母禎子の悪感情を継承した後三条と、根本的に相違する点である。

『我身』の皇統譜を見る限り、摂関家との絆の程度に差のある水尾院中宮系と皇后宮系とは、皇位をめぐつて対立しているように見える。しかしその内実は、双方とも終始摂関家と紐帯を保って融和的な関係にあり、いずれかが一方的に苦杯を嘗めるようなことは決してなかった。それゆえ、両系統を統合する今上帝の御代に暗い影を投げかけるものは何もなく、誰もが自足し調和する理想的な世界が円滑に実現したのである。後三条即位に至る実際の歴史の流れを基にしながら、このように対照的な結末に達するためには、まず嵯峨院の系統から不遇感や悲劇性を取り除くことが必要だった。そのための操作は、ごく早い時期、おそらく水尾院後宮の状況を設定した物語始発の段階から、すでにはじまっていた。

たものと考えられる。

## 七

もう一つ、皇位にまつわる皇后宮系・中宮系の対立という点で取り上げねばならないのは、皇后宮所生の二宮の立場問題である。父帝に最も愛されながら、後見の欠如ゆえに東宮に立てないという、光源氏とも境遇の似た二宮をめぐつて、紛争が起る可能性は十分にあった。そうでなくとも、先述のように史上の敦康親王の例に倣うのならば、后腹しかも年長であるにも関わらず異母弟に越えられた悲運の皇子として、物語の暗部となりかねない人物であった。

しかし肝腎の二宮自身は、『もとより位まで思ひより給し御身ならねば』（巻二・四二）『をもだゝしきまつりことの、とありかゝりも、むつかしうのみおぼしとりにしかば』（同・四七）と、帝位にも政務にも全く興味のな

い性格に設定されており、弟の三宮が東宮となつても一切気にかけず、ただ理想の女性を追い求めていたという。地位・権力への恬淡とした姿勢は後年になつても変わらず、女帝の嵯峨院行幸の際、牛車の宣旨を賜り息子も加階されるという栄に浴しても、「御心にいらざるべし」(巻五・一三八)という無関心さであつたことが、殊更に強調されている。

片や三度も立坊の機会を逃した敦康親王は、「あさましう殊の外にもありける身かな」とうち返し、「我御身一つを怨み」(玉のむら菊・三七四)つつ若くして亡くなり、世人も「あさましう心憂かりける御宿世かな」(浅緑・四三〇)と同情を寄せた。その無念は死後まで残り、物怪となつて後一条を苦しめたとさえ伝えられている(衣の珠・二七二)。そうした敦康に比して、己が境遇に満足し何ら野心も持たない二宮には、悲劇性が全く感じられない。皇位を逸した者の恨みが物語世界に不調和を引き起こすような状況

は、未然に防がれているのである。嵯峨院の場合を併せ、皇位継承をめぐる皇后宮系・中宮系の間に深刻な事態が生じることは、ついになかったといつてよいだろう。

両系の競合関係がもう一度顕在化するのには、水尾院皇后宮・中宮それぞれの孫娘にあたる後涼殿と藤壺とが反目した三条院の後宮である。それが史上の後朱雀・後冷泉兩朝の後宮の状況に倣っていること、後涼殿の立后問題が教通の娘二人の合成であることはすでに論じた。しかしここでも、理想的な摂関政治体制の実現を妨げるような状況は、前もって取り除かれていたように思われる。二人の後妃の対立が後宮に混乱をもたらしたことは否定できないのだが、依拠した史実と比較した場合、後見勢力間の争いという政治的要素が欠落しているのである。

教通が娘たちに託した立后悲願の背景には、当然摂関宗家を継いだ兄頼通への対抗心があつただろう。生子の入内は、頼通の養女



中宮姫子が崩御してから僅か四ヵ月後のことだった。そうした教通の無神経な行爲は、「宮の御事の程なきになど、殿はおぼしめしたり」（暮待つ星・四一二）と頼通の不興を買っており、後に生子の立后に難色を示す一因となつたようである。歿子の場合、後から入内してきた頼通娘寛子が先んじて立后したため、一時后位を絶望し親子ともども悲嘆していた。その歿子が異例の三人目の后となつたのは、頼通が教通に関白職を譲って引退したのとほぼ同時、しかも後冷泉臨終間際の慌ただしいさなかなのであつた。

生子・歿子姉妹の立后問題は、数世代にわたつて繰り返されてきた、摂関家内部における兄弟間の権力抗争の一つだったといえよう。後年、関白職をいずれの子息に伝えるかをめぐつて、頼通と教通との間に行き違いが起こつたという<sup>三</sup>が、両者の対立はすでに後朱雀・後冷泉後宮を舞台としてはじまっていた。そしてこの段階では教通の側が劣勢で、

娘たちとともに苦い思いを味わっていたのである。

一方『我身』の場合、後涼殿は故関白の娘、藤壺は当代の関白の娘、ともに摂関家出身だが、父親同士が親子である上に、後涼殿の父の方はすでに故人となつてゐる。しかも後涼殿の実の父親は、若き頃秘かに女三宮と通じた関白、つまり藤壺の父親その人なのである。その事實は物語の表面の意識には上つてこないのだが、「したには入道宮（女三宮）の御心のうちを、思ひやりきこえ給はぬ時のまなけれど」（巻四・一二〇）と、今でも女三宮に同情的な態度を示す関白は、さらに「ことのきこえをき給しをおぼしむすれねば、さらにおぼんむすめの御うへにもおぼしをとさねど」（同・一二三）とあるように、父故関白の遺託を受けて、娘の藤壺にも劣らず、表向き異母妹の後涼殿を氣にかけてゐるという。こうした状況であつてみれば、藤壺と後涼殿が後宮でいかに反目したとしても、それ

が後見勢力間の権力抗争、しかも摂関家内部における争いに発展する恐れはない。そもそもこの物語に登場する摂関家の男子は常に一世代一人ずつであるから、兄弟間の競合は起りようがないのである。

そして後涼殿自身も、生子と同じく帝の第一の寵妃であつた上に、飲子同様、讓位直前に后位に達した以上、名実ともに満足すべき境遇を得たことになる。ここでもやはり二人の实在人物を組み合わせた造型が功を奏したといふべきか、最後まで立后できなかった生子、里住みがちであつた飲子、それぞれの不幸は相殺されている。その後も藤壺と後涼殿の感情的な確執や、皇子を産めない後涼殿の嘆きなどは継続して語られるが、権力抗争と無関係という原則は変わらない。

要するに、皇位の行方をめぐって、あるいは三条院の後宮において、皇后宮系・中宮系の間に対立的状況が設定されていることは確かだが、それらは原拠と思しい史実と異なり、

生々しい政治的抗争を伴うことがなかったため、平穏な解決が可能であつた。ではそもそもこうした対立的状況がどこから生じたのか、突き詰めて考えてみると、大半が水尾女院（水尾院中宮）に帰せられるようである。皇后宮方を憎み二宮の立坊を断念させたことといい、孫娘の藤壺に肩入れして後涼殿の立后を阻んだことといい、水尾女院の強氣な性格と大きな発言力が、あらゆる対立関係の元凶であつたといつても過言ではない。

その水尾女院が、史上の皇統譜との対応でいえば一条申宮彰子に該当し、その他にも共通する属性の見られることは先述した。ただ彰子には、敦康親王を愛する一条天皇の真意を思いやり、一条讓位の折にも、後年一条院が東宮を辞退した折にも、自らの産んだ皇子を差し置いて敦康の立太子を道長に進言したという、いわば美談が伝えられている（『栄花』岩蔭巻・ゆふしで巻）。それに比較すると、二宮を退け我が子の立坊を強硬に主張し

た水尾女院は、正反対の性格造型がなされているといえよう。一方の二宮が敦康と違い帝位に全く関心のない性格になっていたのと、ちようと対照的な変容である。

そうした水尾女院は、娘の女四宮とともに、波瀾を引き起こして物語の展開を面白くする人物であり、やや道化的に描かれてもいる。しかし彼女たちは、必ずしも物語世界を掻き乱すばかりではなく、摂関家の立場を守るという大きな責務をも担っている。水尾院皇后宮に思いを寄せ、その子嵯峨院の後見を引き受けた故関白、女三宮を思慕しその娘後涼殿にも同情的だった関白、いずれも皇后宮系に浅からぬ好意を示し、ともすれば摂関家の利害を忘れんばかりであった。そうした男たちを牽制し歯止めをかけていたのが、故関白の姉妹である水尾女院と、関白の妻女四宮の存在であったといえよう。

摂関家代表者としての水尾女院の役割が最大に発揮されるのは、巻四における藤壺の第

一皇子出産の際である。それは四日にわたる難産だったが、女院自ら「おほくのそうのしるしに過てたのもしきや」というほど熱心な祈禱を捧げた結果、摂関家の将来の安泰を保証する男御子が無事誕生した。その祈願の中で、

「我氏におほくの後、くにのおやいでものしたましかど、氏の大明神に、われほど心ざしたてまつりて、つかふまつりし人やおはせし。これ、よこさまのことをかまへ、いのるにもあらず。わが家、くにのつぎをつたへ給べき御うへなり。さきの世のむくひ、この世のをかしなりとも、やましな寺のほんそんたちかけり給へ」(巻四・一九)

と、「わが家」と「くにのつぎ」を並べているように、女院の願いは、皇室と摂関家との一体化による繁栄という、まさに摂関政治の原理に基づくものだった。その点からすれば、物語に混乱を引き起こしてきた水尾女院の存

在でさえ、天皇と摂関との協調体制という結末の大団円に貢献するところは少なくなかったといえよう。

『我身』の物語世界は、一条朝以降の歴史をたどるように進化した末に、実際の歴史の流れから外れて、理想的な摂関政治体制に到達する。史実から最も大きく離れた女帝の即位が断絶皇統の無念を解消する措置であったように、悲劇的な事態の種となり得る政治的抗争や矛盾を排除すべく、依拠した史実の状況や人物の性格は、適宜改変を加えられていた。物語は当初から、全てが円満に調和する大団円を目指していたのである。

## 八

一条朝から後冷泉朝にかけて、外戚の地位を確立した道長・頼通父子により、摂関家の権勢が絶頂を極めた数十年間は、まさに王朝盛時と呼ぶにふさわしい時代であった。数多

の女御・更衣が勢を競った醍醐朝や村上朝と異なり、この時代の後宮には、摂関家の姫君や内親王など、厳選された最高級の家柄出身の後妃たちが集っていた。王朝文化は彼女らを中心に爛熟し、物語文学にとっても、『源氏物語』の出現から天喜三（一〇五五）年の六条斎院家物語歌合を含む、記念すべき隆昌期であった。特に後冷泉天皇の時代は、皇后寛子・中宮章子や皇妹祐子・祓子両内親王らの和やかな交流の中で、歌合などの行事が頻繁に催され、

様々におかしき事多かる御時なり。御遊を好ませ給ひ、花合・菊の宴などおかしき事を好ませ給て盛の御世なり。

（根合・四四四）

と称えられている。

そしてこの時代の後宮文化を担った女性たちは、後代の人々の憧憬の的となった。たとえば『無名草子』の女性論で取り上げられた人物の大半は、この時期、特に一条朝に活躍

した人々であり、后の中では定子・彰子、それに歎子が挙がっている。また、鎌倉中期、実材御母<sup>（五）</sup>の周辺で行われた探題の歌会では、『伊勢』『源氏』『狭衣』等の物語に登場する実在・虚構の人物たちと並んで、定子皇后宮（『政範集』二五七）・梅壺女御（生子、同二五八）・堀河女御（小一条院女御藤原延子、『親清四女集』二七）といった、王朝盛時の后妃たちの名が歌題に選ばれている。

『我身』が自らの物語の舞台に採用したのは、こうした王朝盛時であった。それも漠然とした時代設定ではなく、皇統譜の対応を軸として、意識的にこの時代の史実をなぞっている形跡が確認された。そこに歴史への、特に過ぎ去った王朝最盛期への深い関心を読み取ることができるし、とりわけ後宮の設定においてこの時代の史実に倣う点は、右に述べたような摂関期の后妃たちへの興味・憧れを反映しているといえよう。そして、その史実に依拠した皇位継承の次第を中心に据えて物

語を展開してゆく『我身』は、歴史物語に極めて近い性格を有し、いわば虚構の歴史物語の趣を呈しているのであった。

もちろん『我身』は、史実そのものを描くわけではない。作り物語である以上当然のことだが、史実に基づいて設定された状況の中で具体的に生起する出来事は、『源氏』等先行物語の影響を色濃く受けた虚構のものである。さらに作り物語としての『我身』の特質は、依拠した歴史の流れそのものを組み替え、実際には存在しなかった理想的な大団円へと導いていったところにも求められよう。そこに作者の創作手腕と歴史認識を窺うことができるのではなからうか。

摂関政治が全盛に達した時代、同時にその繁栄の陰で、道長や頼通の外戚・後宮政策の犠牲となって不遇をかこつた人々も、少なからず存在した。本稿で取り上げた敦康親王、三条天皇・小一条院父子、禎子内親王、教通の娘たちなどは、その代表格といえよう。摂関

家賛美を基調とする『栄花』でさえ、その主題に抵触しない程度にはあるが、そうした人々の悲劇を同情的に描いていた。いかに美化して伝えられようと、外戚関係の薄弱な皇族への庄迫や摂関家内部における兄弟間の不和が、摂関全盛期の比類ない栄華にとつて一つの瑕瑾であつたことは否定できないだらう。

『我身』はこの時期の歴史を範に取りつつ、こうした汚点をほぼ取り除いていた。敦康に該当する二宮は全く皇位に執着しない性格となり、藤壺と後涼殿の対立からは、後朱雀・後冷泉後宮のような後見勢力の絡んだ政治性が払拭される。そして最も画期的だったのは、摂関家との縁戚関係が薄く断絶の運命にある皇統への配慮である。悲運の天皇というイメージの強い三条天皇に対し、摂関家と良好な関係を保つ嵯峨院には、失意や不遇感が稀薄で、僅かに残っていた継嗣のないことへの無念も、女帝の即位という僥倖によって完全に

慰撫されたのである。

実際の歴史では、後冷泉朝を最後に摂関家の外戚政策は行き詰まり、摂関勢力に対立的な後三条天皇の即位という、摂関政治の基盤を揺るがす事態に至る。その歴史の流れを直叙できなかった『栄花』に対し、嵯峨院皇統ともつながりかつ摂関家を外戚に持つ今上帝の聖代に到達するのが、『我身』の物語世界であつた。摂関政治の栄華に伴う矛盾や悲劇がほとんど除去されていた以上、その理想的な大団円に影さすものは何もない。結局のところ、『我身』という物語が描き上げた虚構の歴史は、初めから「予定調和の方向」<sup>23</sup>に向かつて進んでいたといつてよい。もっとも、対立的要素や矛盾が皆無なわけではなく、むしろ少なからず存在しており、物語の展開が単調に陥る弊害は免れている。しかし、公的な権力を保持する男性が概して消極的かつ善意の人であるため、いわば女同士の反目に留まり<sup>24</sup>、深刻な政治的抗争に発展

することはない。そしてそうした矛盾はやがて円滑に解決され、調和的な大団円にまで尾を引いて傷を残すことはないのである。

もちろん、公向きの事柄をあらわに記さないことは、『源氏』以来女の書く物語の約束であつた。しかし『源氏』の特に第一部では、女性の関わり得る世界の背後に、皇位継承問題や外戚権の獲得をめぐる政治的闘争が厳然と存在し、光源氏の栄華に至る過程に裏付けを与えていた。対するに『我身』は、天皇を中心とした史実に材を取る点で、他の物語に比較して公的世界に接近する機会を多く持っていたにも関わらず、予定調和の道を突き進むべく権力争いの側面を捨象し、安易に常套的な大団円の結末に落ち着いてしまったといえよう。

しかし翻って考えれば、皇位継承の過程や人物造型を史実に依拠する一方で、全ての調和した理想的な摂関政治体制を目指して、実際の歴史に存在した対立関係や矛盾を周到に

取り除いていった作者の見識と力量は、それなりに評価されるものではなからうか。王朝文化の最も華やかなりし頃を物語の舞台として選択した理由は、第一にその時代への憧憬であつたに相違ない。だが過去の栄光をいたずらに賛美し追憶していたわけではなく、それに伴う汚点をも十分に見抜くだけの歴史認識を持ち合わせ、さらにその解消のために操作を加える意欲と能力とを有していたのである。

歴史や公的世界に寄せる『我身』の関心の程度は、女の書く物語の中ではやはり相当に高かつたというべきであろう。そのことを確認した上で、範とした王朝最盛期の歴史の流れを組み替え、摂関体制を前提とした理想的な聖代を構築したことの意味を、物語史や当時の宮廷社会の思想的背景の中で、改めて考えてみる必要があるだろう。

〔注〕

〔1〕市古貞次「中世物語の展開」(『中世小説とその周辺』東京大学出版会、一九八一年)。

〔2〕同前。

〔3〕本稿でいう史実とは、必ずしも歴史的事実とは限らず、歴史物語の類によって物語成立当時知られていたであろう事柄を指すものとする。

〔4〕福田景道「歴史物語の範囲と系列(上)」

(『島根大学教育学部紀要』第二十七巻第一号、一九九三年十二月)。

〔5〕散佚物語に視野を広げれば、『風葉和歌集』に多数の和歌を残す『御垣が原』も、五人の院・帝が登場し、帝を主人公とする長編物語であったと推測され、『我身』との関連も予想される。近時の論に新美哲彦「散佚物語『御垣が原』考―その特質と成立圏―」・横溝博「『風葉和歌集』入集歌数上位の鎌倉時代物語の位相―散逸『御垣

が原』物語を切り口にして―」(いずれも『平安朝文学研究』復刊第八号、一九九九年十一月)がある。

〔6〕底本「名」。

〔7〕金子武雄「我身にたどる姫君論」(『物語文学の研究』笠間書院、一九七四年)で、成立年代推定の根拠として指摘されている。

〔8〕日付は『扶桑略記』『帝王編年記』『申右記』等による。『公卿補任』は十七日とする。

〔9〕物語の世界では、『狭衣物語』の嵯峨院后(女二宮の母)が、嵯峨院の在位中すでに「皇太后宮」と呼ばれている。ただし皇后は登場せず、中宮との二后並立だったようである。

〔10〕前掲注(7)。

〔11〕『今鏡』『無名草子』『十訓抄』などに見える。

〔12〕『栄花物語』や『大鏡』に詳しい。



(13) 底本「なき」脱。

(14) 徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』

(有精堂、一九八〇年)、今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』(桜楓社、一九八三年)の両注釈に指摘がある。

(15) 三条天皇の後宮にも、一条朝と同様、後見の弱い皇后城子(藤原済時娘)と摂関家出身の中宮妍子とが並び立っていた。そして、即位に至らなかったとはいえ、また妍子に皇子がないという事情があつたにせよ、皇后側から第一皇子敦明親王が東宮に立った点、皇后宮所生の一宮を立坊させた水尾院に近いといえよう。また、巻二から巻三にかけて、皇后宮腹の女三宮に恋い焦がれる中納言(後の関白)が、中宮腹の女四宮との縁談に思い煩い、重病に陥るといふくだりがある。一方三条天皇も、城子の産んだ第二皇女禊子内親王を頼通に委ねようとしたが、具平親王(頼通の正妻隆姫の亡父)の霊が頼通を苦しめたため、降嫁は

沙汰止みとなったという(『栄花』玉のむら菊)。摂関家嫡子が皇女降嫁を嫌がり病にまでなるといふ物語の趣向が、禊子降嫁をめぐる頼通を発想源としているならば、水尾院に三条天皇を重ねることも可能であろう。ただし、女四宮降嫁事件には、『狭衣物語』の狭衣・一品宮の結婚というより近似した例があるため、水尾院と三条天皇との関係は参考程度に留めておく。

(16) 底本「御心して」。

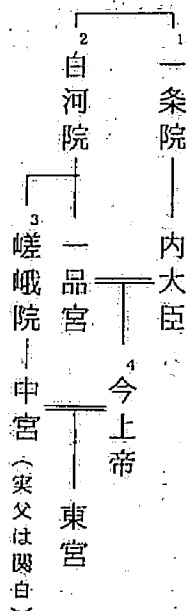
(17) 福長進『源氏物語』はなぜ歴史物語を生んだか(『国文学』第四十二巻第二号、一九九七年二月)。

(18) 清水好子氏は、『源氏物語論』(塙書房、一九六六年)・『准拠論』(『源氏物語講座』第八巻、有精堂、一九七二年)・『源氏物語における准拠』(『天皇家の系譜と准拠』(『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会、一九八〇年)の諸論考において、皇室関係の系譜が史実と一致する点に、特に准

拠の意義を見出しておられる。

(19) 立后後の正式の入内を指すという解釈もある(新編全集頭注)が、そうした記録は確認できないし、時期的に早すぎるように思われる。

(20) 『いはでしのぶ』でも、次に掲げる略系図から読み取れるように、両親から二つの皇統を受け継ぐ帝が誕生する。



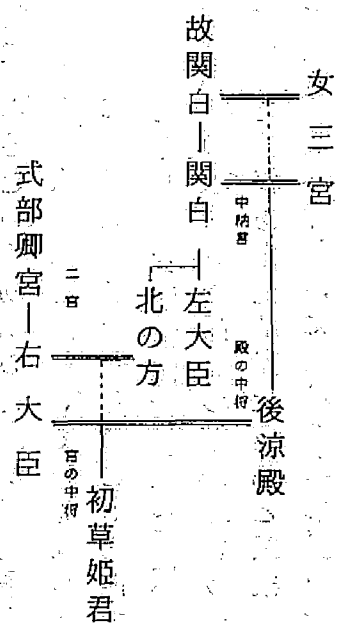
『いはでしのぶ』の今上帝の即位は、いったん臣籍降下した内大臣を通じて、一条院の系統が皇位に返り咲いたことを意味すると同時に、白河院の側から見ても皇女を通じて皇統の継続が保証されたことになる。ここでは詳しく触れないが、『我身』の今上帝や後涼殿の人物像には、『いはでしのぶ』の今上帝や伏見犬君(中宮の母)の授

影が見られ、『我身』が『いはでしのぶ』の皇位継承過程をも参照している可能性は考えられる。

(21) 前掲注(14) 徳満氏注釈の解題など。

(22) 佐々木紀一「我が身にたどる姫君」巻六、狂前斎宮とその女房達」(『国語国文』第六十三巻第三号、一九九四年三月)では、女帝の理想的帝王像の参考として、『続本朝往生伝』の後三条天皇伝を挙げている。その女帝は今上帝の養母であり、模範でもあったらしい。

(23) 関係系図を掲げておく。



(24) ただし、『栄花』や『大鏡』は、道長を「関白殿」と呼んでいる。

(25) 「物語史(源氏以後)・断章」『夜の寝覚』『今とりかへばや』から『我身にたどる姫君』へ——(今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院、一九八九年)。

(26) 『今鏡』『古事談』『愚管抄』に所見。西本寮子『『今とりかへばや』成立試論——女春宮設定の史的背景と女一の宮の役割り——』(『国語と国文学』第六十二巻第八号、一九八五年八月)・常盤博子『『今とりかへばや』の成立年代について』(『実践国文学』第二十八号、一九八五年十月)。

(27) 『藤原隆方朝臣記』(歴代残闕日記)には、「御封御季年官年爵如元、但大炊寮御飯停止」とある(大系補注)。

(28) 生澤喜美恵「女帝実現の物語としての『我身にたどる姫君』」(『池坊短期大学紀要』第二十七号、一九九七年三月)。本稿で扱った『我身』の皇位継承過程についての考

察は、同論文に多くを学んでいる。ただし、皇嗣のない嵯峨院の無念を、「自己の皇統に対する明確な執着」と捉えることには疑問が残る。後にも述べるように、予定調和的な結末に向かうこの物語では、特に男性登場人物を善意の人とし、政治的野心を持たせない傾向があり、嵯峨院もその例に漏れないようである。

(29) 『春記』長久元年十二月十八日条にも、「皇后宮此四年不参入給、……依故中宮参入給事也」と記されている。

(30) 前掲注(28)に指摘がある。

(31) 立后の儀が執り行われず、宣旨のみという点でも異例であった(『中右記』大治五年二月二十一日条)。

(32) 『古事談』巻二。『栄花』では、教通は内心我が子に譲りたかったが、頼通に遠慮したことになっている(布引の滝・五一七七八)。

(33) 前掲注(28)に指摘がある。

(34) 白拍子出身で、西園寺公経の寵を受けて  
実材らを産んだ女性。平親清との間にも多  
くの子女を儲けている。井上宗雄『鎌倉時  
代歌人伝の研究』(風間書房、一九九七年)  
参照。

(35) 前掲注(14)徳満氏注釈の解題。その他に  
も、「全体の形が持つ藤原摂関家と皇族と  
の対立から融和へという命題が、果してそ  
れなりの深刻な対立抗争から融和へという  
波瀾起伏を孕んでいるかとなれば、それは  
かなり疑問である」(前掲注(14)今井氏注  
釈の解題)、「皇室と摂関家という男系の  
二つの「家」が対立している点は窺えず、  
むしろ、このような融和関係を前提にする  
こともこの物語が示す理想の一つだと考え  
る」(前掲注(28))等、同趣旨の見解が述  
べられている。

(36) 水尾院皇后宮・中宮、女三宮・女四宮、  
後涼殿・藤壺という母子三代にわたる対立  
的關係を、物語の展開を支える主構想と見

る論もある(辛島正雄「『我身にたどる姫  
君』の一面―ある女系の「年代記」―」『今  
井源衛教授退官記念文学論叢』九州大学文  
学部国語学国文学研究室、一九八二年)。

### 第三章 聖代描写の源泉

『我身にたどる姫君』の主題の一つとして、今井源衛氏は、「男女の不思議なつながりというもの、特に非条理な恋愛、あるいは性愛の諸相というものを挙げ、しかも『それらの描写が常に女性の立場に立ってなされている』ことを指摘された<sup>③</sup>。それを受けて辛島正雄氏には、「女の物語」という観点から様々な考察された諸論がある<sup>④</sup>。確かにこの物語には個性的な女性が多く登場しているが、その中で特に目を引く一人が「女帝」である。嵯峨院の皇女として生まれ、従兄にあたる三条院の皇后を経て図らずも帝位に至り、四海に泰平をもたらした人物である。のみならず超人的な光輝と能力を持つ彼女は、実は天女の生まれ変わりで、崩御とともに兜率内院に往生したということになっている。女帝

即位の意義や天女・兜率往生といった特殊な趣向については、先学の論に導かれつつ、第一章・第二章で論じた。聖代を築いた明主としての女帝についても、やはり物語史における女主人公の系譜上に位置付けた辛島氏の論がある<sup>⑤</sup>。しかし、『我身』が殊更に聖代を描写することの意味は、女帝の人物論に限らず、物語全体の中で考察すべきではないかと思われる。本稿では、その前提として、為政者としての女帝像の源泉を『松浦宮物語』に求め、それが必ずしも「女の物語」の枠内に収まりきらないことから確認してゆきたい。

辛島氏は、女帝誕生に至る物語史の流れをたどり、『狭衣物語』、『今とりかへばや』などに女帝の可能性が見えることを指摘する一方、『夜の寝覚』の中の君にはじまり『今とりかへばや』の女中納言に継承された「女の

物語』の系譜の延長上に、『我身』の女帝を位置付けられた。男装して男性をも凌ぐ活躍を見せる女中納言は、物語の担い手である女性の潜在的願望を具現したような人物であり、女帝はその理想化を極限まで押し進める形で造型されたとし、しかもその女帝が聖代を実現するところに、おそらく女性であろう作者の熱い思い入れを読み取っておられるのである。

確かに『今とりかへばや』の女中納言は、琴・笛・漢詩・和歌等のあらゆる才芸に秀でていたばかりでなく、「今よりあるべきさまにむねくしく、世の有様おほやけ事をさとり知りたる事のさかしく」（巻一・一一四）と、公事に関しても比類ない能力を備えている。ただし、辛島氏も言及されているように、本来男性が担当する分野において女中納言が活躍するのは、男装していた期間に限られる。男尚侍と入れ替わって女姿に戻り、后・国母という女としての栄達を遂げた後は、その才

能をも譲り渡してしまったかのごとく、かつての活躍ぶりは二度と戻らず、追憶されることすらほとんどない。女の姿のまま帝位に上りつめ、控え目にはあるが英邁さを徐々に発現してゆき、理想的な政治を行った『我身』の女帝へ直接つなげるには、少しく距離があるように思われる。

その懸隔を埋める一人が、やはり男装の姫君という趣向を中心に据えた物語『有明の別』の女主人公（右大将の後の女院）であろう。彼女もまた、『なにがしのさだめ』そのときといふにも、「たゞこの君の御さへをのみ、よめでぐさにしたれば」（巻一・三三五）と、公事にかけて男性以上の才を発揮していた。しかも彼女の場合は、女姿に戻って帝の寵を一身に集めた後も、晴れの場で華やかに振舞い、みことな詩文を披露して人々の耳目を驚かした男装時代をなつかしみ、御簾の内に引き籠った現在の生活に、「むもれいたく」（同・三五四）充たされぬものを感じていた。

年月が経過して、所生の皇子が即位し女院となつた主人公は、実家関白家の後継ぎである左大臣を教育し助言を与える形で、再び漢学や政務に及ぶ男の世界に関わることになる。

をのづからをとこ女のけぢめばかりの御つゝましさだになく、まことくしきみちくゝのことまで、かたへはの給はせをしふる御心は、……（巻二・三七二）  
かやうのかたへなにがしのさだめまでいさゝかたどられ給はず、ことおほからぬ物から、そのせんとあるべきふしくたづねあきらめさせ給を、……

（同・三八二）

とはいえ、やはり左大臣には幾分遠慮があり、女院が自らの才をつつまず伝授したのは、次男の東宮であつた。この東宮はとりわけ母親似で、男装時代の主人公の栄光を継承する人物として、兄弟以上に将来を嘱望されていた。たゞ春宮にのみぞ、とりわきいはけなく

より、あさゆふよろづをきこえさせ給しかば、なにごとにつけても、たゞひかりかくれ給しこ大將<sup>（一）</sup>、御かはりには、この宮のみぞすゑのよてらさせ給べき。

（巻三・四二四、五）

こうした兄弟を凌ぐ次男への偏愛と期待は、『我身』の女帝が養子に迎えた三条院の二宮（今上帝）が、後に即位して女帝の聖代を継承したことと対応する。天女の物語という側面から女帝の造型を論じた際、この点を一つの根拠として、『有明の別』の女院が影響を及ぼしていることに触れた<sup>（二）</sup>。女院が女姿のまま政務に参画する点にも女帝とのつながりが窺われ、『今とりかへばや』の女中納言よりさらに近い関係が察せられよう。

しかしなお、『有明の別』の女院の政治関与は、左大臣や東宮という近親の男性を通じた間接的なものに留まっていた。女帝のように自ら君臨し政務に携わった女性ということになると、『松浦宮物語』の唐后、鄧皇后が

想起される。夫の文皇帝の死後、燕王・字文会がまだ幼い新帝に反旗を翻すという国難にあたって、「母后、朝に臨む名を盗まむとす」（卷二・六八）と自ら宣言して乱の平定を主導し、平和回復後も幼帝の後見に任じて理想的な治世を行わしめた母后である。帝位に即いたわけではないが、表立って政務に関与して聖代をもたらしたこの鄧皇后こそ、『我身』の女帝像に直接つながってゆくのではなからうか。

ただし、『有明の別』に関しては、種々の点で『我身』への直接の影響関係が指摘できるのだが、『松浦宮』の場合さほど顕著ではない。そもそも『松浦宮』という作品には、『源氏物語』以降の伝統的な物語の通念から逸脱する要素が多々認められ、物語史上かなり異色な存在であることは、衆目の一致するところであろう。『風葉和歌集』に十八首の入集を見ることから、後世まで低からぬ評価を受けていたことは疑いないが、これに追

随するような後続作品、明らかに影響下にあるような後代の物語は、なかなか見出せない。伝統的な物語のあり方を一応踏襲する『我身』も、全体の作風は『松浦宮』と大きく異なっている。

しかし、女帝が天女の生まれ変わりであるという点において、『我身』は『松浦宮』と接点を持っている。『松浦宮』の鄧皇后は、主人公弁少将とともにかつて忉利天の天衆であり、唐国を救うため地上に遣わされたのだった。もう一人、『有明の別』の主人公女院も同じく前生は天女であつたことになっており、概して現実主義的な『源氏』以降の物語史の中で、『竹取物語』『宇津保物語』といった前期物語のように、天に出自を持つ人物を主人公に据えるという特色において、この三作を括ることができよう。『無名草子』の記述から推して、『松浦宮』と『有明の別』の成立時期は近接しており、正確な前後関係や直接の影響関係は決定できないものの、何



らかの交渉があつた可能性はある。一時代成立の遅れる『我身』は、天人を主人公とするこの兩作を、ともに摂取しているのではなからうか。以下、『松浦宮』から『我身』への影響関係を確かめることとする。

天女としての女帝の造型には『有明の別』の女院の投影が大きいのだが、最終的に天への帰還を果たした時点で、物語の最後まで地上に留まつた女院から乖離することになる。それも、かくや姫のように目前に天へ昇っていったわけではなく、逝去という幾分現実的な形を取っていた。地上に一時生を受け、死んで天へ帰ってゆく天女、その先蹤となるのはやはり『松浦宮』の華陽公主である。華陽公主の前身は、弁少将や鄧皇后のようには明示されていないのだが、「前の世に琴を習ひて、しばしこの世に宿りたまへる」(巻一・三七)と紹介されており、琴を空に飛ばして日本まで送り届けるといった奇瑞を起こすところにも超人性が現れている。また、日本に

転生して弁少将と再会する手段としての公主の死が、『浜松中納言物語』の唐后の模倣であることは明らかなので、一度天に生まれ変わら再びこの世に戻ってくるという唐后と同じく、華陽公主の場合も死に昇天と考えてよいだろう。

華陽公主は琴の名手として登場し、八月・九月の名月の頃、弁少将に琴を伝授する。やがて弁少将と契を結んで転生後の再会を約し、その直後に宮中で死去した。兜率内院に往生した『我身』の女帝が転生することはないのだが、巻五巻末の女帝崩御前後の場面には、この華陽公主をめぐる物語を取り入れた形跡が見られる。女帝は崩御数日前の八月十五日、月のくまなく澄みわたる夜、姉妹のように睦んできた藤壺(三条院中宮)を相手に琴を弾く。女帝は父嵯峨院に習ったと言うが、その演奏は全くこの世のものと思われず、女帝の天女性をさらに明らかにするものであった。

をしへきこゆる人あらんやは。あやしき  
さきの世のとかやの御てなるべし。なに  
ゝかにたらん。

(一五二)

先に引いたように、華陽公主の琴も「前の世」  
に習ったものといわれていた。超人的な天賦  
の楽才を驚嘆される物語の主人公は数多いも  
の、明確に前世における習得と断定できる  
のは、天女の生まれ変わりである華陽公主や  
女帝なればこそであろう。

次に、少し遡って弾琴直前の場面になるが、  
藤壺の目から見た、月を眺める女帝の描写を  
見てみよう。

月のちりもくもらぬに、みすをさへすこ  
しあげて、ながめおはします御かたはら  
めの、なをたくひなくのみみえさせ給に、

(一五一)

「ちりもくもらぬ」という表現は、  
万代をあきらけく見むかがみ山ちとせの  
ほどはちりもくもらじ

(『拾遺集』神樂歌・六一三・中務)

などに見られるが、それを月明の表現に用い  
たのは、『松浦宮』の作者と目される定家が  
最初のものである。

さざ波やちりもくもらずみがかれて鏡の  
山をいつる月かけ

(『拾遺愚草』二二六二)

建仁元年八月十五夜歌合  
そして『松浦宮』では、弁少将が楼上で琴を  
弾く翁に出会った場面で、

塵も曇らぬ月影に、琴を弾くなりけり。

(巻一・三五)

と用いられている。この老人陶紅英が弁少将  
に華陽公主を紹介することから二人の交渉が  
はじまるのであり、公主をめぐる物語の中に  
含まれる部分といってよい。

また、月を眺める女帝の横顔の美しさを述  
べた部分は、弁少将に琴を教えた後の華陽公  
主の描写、

公主もいたう物をおぼし乱れたるさまに  
て、月の顔をつくづくとながめたまへる

かたはらめ、似るものなく見ゆ。

(巻一・四一)

と類似する。ちなみに『松浦宮』では、後に  
鄧皇后にも

物をいとあはれとおぼして、十四日の月  
の、雲間を分けて澄み昇る空を、つくつ  
くとながめたまへる御かたはらめぞ、な  
ほ似るものなくきよなる。

(巻二・八三)

と、ほとんど同じ表現を用いている。  
やがて女帝は、夫三条院のもとに行幸して  
それとなく別れを告げた翌日に譲位し、その  
まま内裏の中で、藤壺にみとられつつ崩御す  
る。

おもふもしるく、しら露のきえ行心ち  
するに、御てをとらへて、「や」とき  
こえさせ給ふにぞ、人々おきさはぎ、  
みずきやうなにくれ、そのこと、なし。  
頭弁なども、かうてなりけりと思ひあは  
すれば、かひなき御いのりども、いづこ

のいひ所なし。

(一五九)

この部分の文章が『源氏物語』の紫上死去の  
場面を模していることは明らかである。

宮は御手をとらへたてまつりて、泣く  
く見たてまつり給に、まことに消えゆ  
く露のこゝちして限りに見え給へば、御  
誦行の使ども、数も知らず立ちさはぎた  
り。さきくもかくて生き出で給おりに  
ならひ給て、御物のけと疑ひ給ひて、夜  
一夜さまくの事をしつくさせ給へど、  
かひもなく明けはつるほどに消えはて給  
ひぬ。

(御法・四一・七一)

ところで、華陽公主の死の描写も、やはり御  
法巻の同じ箇所を利用していた。

やがて露の消えゆくやうに、言ふかひな  
く見えたまへば、御前にさぶらふ限り、  
騒ぎ立ちて泣きどよむに、御門も聞こし  
めしつけて、いと言ふかひなく、くちを  
しきことをおぼし嘆く。明けゆくままだに、  
いまは限りの御さまなれば、言ふかひな

くて、まづ九重を出だしたてまつらんと  
騒ぐ。(巻一・五二・三)

紫上死去の場面、特に「消えゆく露」という  
比喩は、後代多くの物語に取り込まれており、  
他ならぬ『我身』もすでに巻一で、水尾院皇  
后宮の逝去の描写に用いていた。女帝崩御の  
場面が直接『源氏』に倣ったものであること  
は疑いないが、その際、同じく御法巻を利用  
していた華陽公主死去の場面をも念頭に置い  
ていたのではなからうか。『我身』『松浦宮』  
ともに、それぞれ先の引用部分に引き続いて、  
『我身』——院にぞきこしめず御心ち、い  
かゞは。……ゆめかうつゝかとも、な  
ををろかなりとぞ。

『松浦宮』——御垣のほかにて聞きつけたる  
あけぼのの心地ぞ、言ふはおろかなる。  
と、宮廷の外にいて愛する女性の急死を知つ  
た三条院・弁少将の衝撃を伝える。いずれも  
その直前に相手と稀の逢瀬を持ったばかりで  
あったという点などからも、両者の関係が察

せられよう。

以上のように、天女としての女帝の造型の  
内、月光のもとに琴を弾いて超人性を発現し  
た後、恋着する男に別れを告げて昇天を果た  
すという死去前後の場面は、華陽公主に負う  
ところが大きいと見なせる。それを踏まえた  
上で、改めて『松浦宮』のもう一人の天女鄧  
皇后との関係を考えてみたい。

## 二

鄧皇后と女帝の共通点として、身体から発  
する光と香、特に異常なまでの芳香がまず挙  
げられる。もちろんそれは華陽公主や『有明  
の別』の女院にも見られる天女の特性なのだ  
が、鄧皇后・女帝においてはとりわけ強調さ  
れているように思われる。『松浦宮』では、  
梅の里で出会った謎の女の正体が鄧皇后であ  
ることを弁少将に悟らせる手がかりとして、  
香が重要な機能を果たしており、『世に知ら

ぬにほひ」(巻二・九一)「あやにくなるにほひそとろせき」(同・一〇六)「吹き交ふ風につけて、世にたくひなき御衣のにほひの、ただそれかとまがふ」(巻三・一〇八)等、謎の女Ⅱ鄧皇后の超人的な芳香が繰り返し語られる。

女帝の場合、光と香は死を目前にしていや増していく。

いかなるにか、このころとなりて、あらぬさまの御ひかりそふ心ちして、もとよりかぎりなかりし御そのにほひなども、あまりさまあしく、こゝのへのうちも、さまあしきまでのみおはしますを、……

(巻五・一五〇)

「この世の人とおほえさせ給はぬ」(同・一五四)袖の匂い、「所せき御にほひ」(一五六)「けしからぬにほひ」(一五七)は、行幸した三条院寝殿の御簾の外にまで留まり、譲位の際には、紫宸殿から南庭を隔てた承明門に控える官人まで、「あやしき風のか

ほり」(一五八)に驚いたという。この大袈裟なまでの香の強調は、鄧皇后のそれをさらに誇張した趣のものといえよう。

次に、鄧皇后と女帝の最大の共通点、后から直接政治を掌る立場に至り、しかも申し分ない善政を布いたことに関連する記述を対照してみよう。まず両者の経歴は、それぞれ、鄧皇后——十三にて、宮のうちに選ばれ参りたまひける。かたちのすぐれたまへるによりて、ほどなく位を進めて、十七にて、后に立ちたまへる……(巻二・九七)

女帝——うへは、十六にて東宮にまいらせ給て、やがてそのとし御くにゆづりありて、后にたゞせ給て、廿一にて御位につかせ給ひしかば、……(巻五・一五七)と、年齢を明記した類似の文体で紹介されている。

また、文皇帝崩後の国乱に際会して朝に臨むことを決意し、諸臣を促して乱を平定する指導力を見せた鄧皇后だが、文皇帝の生前は、

「牝鶏の朝する戒めを恐れて、掖庭のせばき身のうへのことをだに、君のみことのりにあらずして、一事詞を加へ行なはざりき」(巻二・六七、八)と、身を慎んでいたという。一方の女帝も、「もとより、かぎりなくらくくじく、いたりふかゝりし御心をきて」の持ち主ながら、皇后時代はその才をあらわにせず、「たゞそのふしとみえきこえじ」と謙虚に振舞っていた。しかし帝位に即き完全に政務を委譲されると、「やうく御心をきての、みえきこえぬにもあらず」と本領を発揮してゆくのだった(巻五・一二九)。

さて、『松浦宮』では、平和回復後、鄧皇后が幼帝を補佐して世を治めた様が、次のように描写されている。

世の中諒闇なるうへに、後の御掟、ひとへに儉約を先として、よろづのことにつけて、人のわづらひをはぶかる。民の力をいたはり、おほやけのせめをとどめて、樂しび喜ばぬたくひなし。早朝に、朝堂

に薄物の帳を垂れて、日ごとに聞こしめすことはてて、露寝に入りたまひては、才ある限りを召し集めて、文を講じ、理を論じて、御門を教へすすめたてまつりたまふ。朝夕に、国の栄え、民安かるべき道をのみ聞こえ知らせたまふ。御門、いはけなくおはしませど、父御門、母后にもなほ進みて、むかしの聖の御代を慕ひたまふこと深ければ、なべての人も、心をつくるひ、身を慎みて、いまより靡き従ひたてまつる。ただ二三十日に、島の外までのどかに治まりぬ。

(巻二・七四、五)  
女性ゆえ「薄物の帳を垂れて」、文字通りの垂簾政治を行ったわけだが、その事情は女帝も同じであったことが、「内侍すけ、内侍など、御木丁さし、なにやかやと、あるべきさほうにこそすれ」「せちゑなどには、御丁のかたびら、よのつねのよりはいぶせき心ちこそすれ」(巻五・一三二)と述べられている。

ただし、僅かに漏れる御衣の裾や袖口は「かゝやくばかり」の光輝に満ちており、やはり「光を放つと言ふばかり」（巻三・一一九）という鄧皇后と共通する天女性を示していた。また、早朝から聴政し夜は幼帝の教育に熱心な鄧皇后の精勤ぶりも女帝に引き継がれ、日の暮れるまで寵妃のもとに籠って公事を怠りがちであつた三条院に対し、女帝は「なに事もたゞすがすがとゝのへられつゝ、御くしなどかきくださるゝまで、露ばかりほどもへず」（巻五・一三二）、政務に励んでいたという。

その女帝が築いた聖代については、雨風のをと、月ほしの光まで、あまりまことしからぬまで、世に見ならはぬさまにのみおさまり、しづかなる御代を、さきくくちおしかりしにはあらねど、心なき草木までなびききこえさせて、まだきにおしみきこえさするたぐひのみ、よものうみ、しまのほかまであまねくなり

にたれど、……（巻五・一二九）  
という概括的な描写がある。類型的な修辭の続くところだが、傍線部のように『松浦宮』と同様の表現が用いられていることに留意される。

さらに巻六では、「へんげの人にや」と思わせるほどの女帝の学才が、三条院の口を通して伝えられる。漢籍では『文選』を暗記した上に、『群書治要』全五十巻を三条院から借りて読破していたという。

ゆづりきこえし時、故院へ三条院の父我身院のたまはせたりしぐんそちようと、いふふみをそ、むかしの御いさめそむきて、われはうるさくて見る事もせざりしを、だてまつりしも、こそそかへし給へる。（一八七）

『群書治要』は、唐の太宗の勅命により諸書から政治に有用な文章を抜粋して編集された書で、治世の基本として日本でも尊重された。鄧皇后もまた、その『群書治要』に通じ

ており、帝に教えている。

群書治要といふ文を読ませて、その心を御門に教へきこえたまふ。御才のほど、そこひも知らず見えたまふ。

(巻二・九〇)

以上のように、為政者としての女帝像には、鄧皇后と共通する要素が少なくない。華陽公主から女帝への影響関係を考え併せると、『松浦宮』の二人の天女の特徴が、それぞれ『我身』の女帝に投影しているといえそうである。ただしもちろん鄧皇后は君主ではなく、あくまでも母后として帝を後見・教育する立場にある。そして帝の方も、幼いながら母の教えを忠実に守って徳政に意を尽くす明主であり、母子の協力によって聖代が実現したのである。『我身』の女帝の養子となつていた二宮が後に今上帝となつて善政を布くという構図もまた、こうした鄧皇后と幼帝との関係に匹敵する形になっている。ただし、直接帝を補佐・教導する役割という点では、むしろ今

上帝の実母藤壺の方に、鄧皇后の面影が色濃く見られるようである。

藤壺は三条院の中宮として二皇子を儲けたが、院の退位後も東宮の母として宮中に留まり、女帝から絶大な信頼を受けて、毎日御前に控えていたという。「おなじきさきときこゆるなかにも、いみじういたりふかく、むべくしき御心さま」の藤壺は、父関白の代役として女帝の相談相手となり、「みかどのふた所おはしますやうなり」といわれるほどであつた(巻五・一三〇)。女帝が崩じてまだ幼い長男の悲恋帝が即位すると、父とともに政務を取り仕切り、「たゞおしき御命をことゆへなくて、内、春宮の御行衛、あくまで世中をこなはん」(巻七・二二二)という希望により、三条院の招きにも応じず内裏から出なかつた。しかし悲恋帝は叔母皇太后宮への恋慕叶わず悶死に至り、当年十二歳の二宮が後を継ぐ。実の母后である藤壺は、「かた時もえたちばなれきこえさせ給はず」(巻八・



二三一）後見を続け、年月が経って今上帝が成人した後も、

月日にそへては、たゞ御心ひとつなる世を、猶えおほしめしはなれぬにや、つきせぬ御うちずみなり。（同・二四四）

と、やはり大きな発言力を保持していた。賢才を備え幼年の帝を補佐して意欲的に政務に携わる母后という藤壺の性格は、鄧皇后と全く等しい。卷七には、悲恋帝に「御ふみなども御覧ぜよかし」（二〇五）と学問を奨励している場面もあり、やはり「文を講じ、理を論じて、御門を教へすすめたてまつりたまふ」という鄧皇后に通じる。

その母后に後見された今上帝もまた、兄悲恋帝の悲劇を教訓に身を慎み、昼夜を問わず熱心に善政を心がけて、女帝の御代に匹敵する聖代を築いた。

この御代は、御心をきて又あやにくにひきかへ、むかしの御をしへをも、いみじうま心におほしめしたもちけるにや。ま

して、うちあらはれていひさはがねど、あさましく、よのつねならずうちつゝかせ給にしことのさま、おどろくしかりし御心まどひともの、おほしまさぬあとまで、世人さへきゝくるしういひあつかふなるを、おほしあはするにつけて、「いかでこのみちに、人のをしりおはず、なにごとにつけても、たゞ世のまつりことすなほに、たみやすからんことをつくりいださむ」とのみ、よるひる御心にかへ、……おほしめしはげみたる御心をきてを、いつのほどにか世人も心うらん、まだきにたぐひなくゆゝしきまでぞ、しまのほかまでいひさはぐ。（卷八・二三一）

卷五にも見られた「しまのほかまで」、民の安寧を目指す儒教的政治理念など、やはり先に引用した『松浦宮』と共通する表現が用いられている。いずれも聖代を描写するに珍しい文句ではないが、賢明な母后の後見のもとで弱年の帝が善政に励むという構図と併せ、

偶然の一致とはいいいがたいのではなからうか。

以上の比較により、幼い帝とその母によって聖代が達成されるという点で、『我身』の女帝・今上帝の二代には、『松浦宮』の影響を認めてよいと思われる。その場合、鄧皇后の役割は女帝・藤壺の兩人に分与されたことになる。女帝は天女としての清らかさを保ったまま天上に帰還せねばならず、その後現世に留まって政務に臨む責務は藤壺に移行したのであろう。ともあれ、女の身で万機を統べ理想的な聖代を築く女帝の人物像が、『松浦宮』の鄧皇后に由来していることは、確認されるであろう。

### 三

ここで留意しておきたいのは、『松浦宮』が藤原定家の作と伝えられていることである。『無名草子』の記述に発する定家作者説

には、否定的な見方もあったが、様々な傍証によって支持されてきており、今日では大方の承認するところであろう。賢明な女性為政者という性格において女帝の先蹤と見なされる鄧皇后を造型したのは、定家という男性貴族であった。とすると、辛島氏のいわれるように、明王としての女帝の理想化を「女の物語」の展開の上に位置付けることには、いささか疑問が生じてくるのではないか。

『今とりかへばや』はもちろん、『有明の別』も、少なくとも巻一は、ゆえあって男として振舞う姫君が、男性を凌ぐ資質を発揮しているながら、やがて女の身に戻り、女として最高の栄達を遂げるまでの過程を語る。その意味で、確かに両者とも「女の物語」と呼ぶにふさわしいだろう。『今とりかへばや』から『我身』への直接的な影響関係は確認できないが、『有明の別』は明らかに『我身』が参照した先行物語の一つであり、主人公の女君が政治的能力を女姿のままに発揮する点に

ついても、『有明の別』の女院にその萌芽が見られた。しかし、女の身で君臨し聖代を実現する『我身』の女帝に至るまでには、さらに『松浦宮』の鄧皇后が介在していた。その『松浦宮』の作者が男性である以上、女帝の理想的帝王像を、純粹に女性たちの憧憬・願望の産物として捉えることには、慎重にならざるを得ない。

では、定家と目される『松浦宮』の作者は、いかなる意図をもって治世に能力を発揮する女性を登場させたのか、まずそこから考えておきたい。異国での幻想的な恋物語の相手役という鄧皇后の基本的な性格は、『浜松申納言物語』の唐后に由来する。その物語史の伝統に則った高貴な女性像に、執政の任を果たした賢明な母后像を付加し、さらなる理想化を施したわけだが、その際、作者に女性読者の歓心を買うという意識が全くなかったとはいえないだろう。『松浦宮』の有力な享受圏の一つが『無名草子』作者の周辺であつたこ

とは間違いないが、その『無名草子』に描かれた女性たちによる物語評論の場では、

いでや、いみじけれども、女ばかり口惜しきものなし。昔より色を好み、道を習ふ輩多かれども、女の、いまだ集など撰ぶことなきこそ、いと口惜しけれ

(二六三)

のごとく、男に対して女の限界を嘆く声や、それに反論して、

必ず、集を撰ぶことのいみじかるべきにもあらず。紫式部が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたるより、さきに申しつる物語ども、多くは女のしわざにはべらずや。されば、なほ捨てがたきものにて我ながらはべり (同)

と、女ならではの能力を自負する声が交錯していた。並み居る男性廷臣たちも及ばぬ鄧皇后の威厳と指導力・統率力は、作者の身近にいる女性読者たちのこうした思いを酌むものであつたかもしれない。

しかし、作者自身が漢籍に親しみ、公の政治の場に直接関わっていた男性貴族であるならば、やはり政治的理想という方面に、より比重がかかってくるのではなからうか。鄧皇后のモデルとして、後漢の孝和帝の皇后で、夫の死後幼主二代にわたって朝に臨み、善政を行った和熹鄧皇后（『後漢書』皇后紀上）が指摘されている。両者は名からして同じであるばかりでなく、『松浦宮』の鄧皇后が寸暇を惜しんで政務や学問に励み、儉約を奨励して民力涵養に意を注いでいる点も、和熹鄧皇后に共通している。鄧皇后という理想的な女性為政者像は、中国の史書が記録する賢后の伝から産み出されたのである。さらに鄧皇后は、自ら幼帝の後見に任ずる一方で、「我が国の習ひ、女王朝に臨みて、かならず乱る跡多かる」ことを深く恐れており、「外戚の政に臨む、世の乱るる基なり」と自制して、縁者を取り立てることなく有能な人材を登用した。また、「いづれも世を治めたまふ君、

かならず身の過ちを知りたまはず。いはむや、おろかなる女の身、知ることなくて、万機の政に臨む、いかばかりの過ちかあらむ」と自覚し、広く意見を募るため、舜の世に倣って「誹謗の木」を立てた（巻二・九七―八）。こうした鄧皇后の政治に臨む姿勢は、いずれも経史の諸書や『群書治要』などが示す儒教的理念の基本に則ったものである。

定家も漢籍を通じてこうした思想に親しんでいたはずだが、特に鄧皇后がしきりに懸念していた「牝鶏の朝する戒め」<sup>100</sup>については、『明月記』にも引用するところがある。後白河院の崩御後、その近臣であった源仲国の妻が、故院の託宣と称して御廟を建立せよと唱えていた。後鳥羽院もしばし判断に迷ったようだが、建永元（一二〇六）年五月二十日、ついに妖言として仲国夫妻を罰することを決断した。同日程、その件を記した直後の一節である。

今日聞建武貞観之徳政、感涙難抑、

只恨ニ牝雞之晨、扶桑豈無レ影乎、嗟乎  
何為乎<sup>三</sup>

後鳥羽院の英断を後漢の光武帝や唐の太宗の  
徳政になぞらえて感激する一方で、「牝雞之  
晨」を非難するのだが、その標的は、仲国妻  
の縁者で託宣事件を「結構」<sup>三</sup>したという丹  
後局であつただろうか。丹後局は後白河院晩  
年の寵妃で、院の生前・死後にわたつて政界  
で大きな実力を有していた。建久七（一一九  
六）年には源通親と結んで政変を起こし、定  
家が主家と仰ぐ九条家の人々を逼塞させてい  
る。仲国夫妻の事件の頃には丹後局の発言力  
もかなり低下していたようだが、代わつて当  
時の宮廷では、後鳥羽院の信任を受けた藤原  
兼子（卿二位局）が権勢を振るつていた。除  
目のたびに人事を専断する兼子に対し、「於  
今、権門女房偏以申行、殿下御力不<sup>レ</sup>及敷、  
後鑑可<sup>レ</sup>恥者也」（建仁三年正月十三日条）「偏  
在ニ狂女之心ニ欺、後代如何」（元久二年正月  
三十日条）等、憤懣の言がしばしば『明月記』

に見える。「牝雞の朝する」弊害を、定家は  
身をもつて感じていたに違いない。ちなみに  
『松浦宮』の成立は、丹後局が勢力を張つて  
いた文治・建久年間と推定されている。

しかし一方、摂関政治という体制を保証す  
るのは天皇との外戚関係であり、その要とな  
る母后の重要性を最も認識していたのは摂関  
家のはずである。摂関勢力の挽回を図る九条  
兼実は、文治六（一一九〇）年、外戚関係復  
活の期待を込めて、娘任子の後鳥羽天皇に入  
内させている。また後年のことになるが、兼  
実の弟慈円は、『愚管抄』において、「女人  
此国ヲ入眼ス」（巻三・一四九）という史観  
を開陳している。それは主に、有能な臣下が  
補弼の任を果たした古代の女帝の代々、及び  
藤原氏の娘が国母となりその父を執政の臣と  
する摂関政治体制を意味していた。  
このように定家は、母后でもない女性が政  
治に介入した時代、母后の役割が期待される  
環境にあつた。その定家が、中国の史書に伝

を残す賢后を範に、儒教的な政治理念を駆使して虚構の世界で創り上げた理想の母后像が、『松浦宮』の鄧皇后だったのではあるまいか。つまり、聖代の実現者という鄧皇后の造型に託されたものは、女性としての理想というよりはむしろ為政者としての理想、それも漢籍に基づく男性的な理想だった。作者が男性である以上当然といえどもそれまでのことだが、全体の構想や作風から見ても、『松浦宮』を『女の物語』と読むことは難しい。

もちろん『松浦宮』としても、主たる享受者には女性を想定していたであろうし、その女性読者たちがこの異国の后にどのような感想を抱いたかは、作者の思惑とは別問題である。『無名草子』に登場するような女房たちの中には、光り輝く美貌に男性を凌ぐ賢才を兼ね備えて大唐国に君臨する鄧皇后を、賛嘆と憧れの目で見える者があったとしても不思議ではない。『我身』の作者がそうした一人であり、その延長上に女帝の理想的帝王像が造

型されたという可能性を、強ち否定することはできない。第一章で確認したように、女帝には先行物語の主人公たちの美点が結集され、あらゆる点で非の打ち所のない最高の理想性が付与されていた。為政者としての英明もまた、その理想性の一つとして、鄧皇后から得てきたものであることは間違いない。

ただし、聖代実現の功績は必ずしも女帝の完成するのではなく、物語の最後に泰平の世をともに注意を払っておきたい。なるほど今上帝の御代には、冥界から加護を垂れる亡き養母女帝<sup>三</sup>、宮中にあつて補佐する実母藤壺<sup>四</sup>という、二人の母の力が少なからず働いていた。しかし聖代を完成させた最大の原動力は、『なにごとにつけても、たゞ世のまつりごとすなほに、たみやすからんことをつくりいださむ』と政務に励んだ今上帝自身にある。そして、弱年の帝が賢明な母の薫陶を忠実に守って善政に意を尽くすという構図もまた、『松浦宮』

を模倣したものと推定されるのである。その今上帝の御代には、先に引いたような典型的修辭による贊辭ばかりでなく、

たゞあけたてば、大く殿のやふれたる、ぶらく院のつくるはるべきなどいふことをのみいとまなませ給て、ふるきをおこし、たえたるをつがんとのみおほしめしたれば、……（卷八・二四〇）

以下、皇族の御封・御莊の停止、公卿人員の削減、大学の振興など、善政の数々が具体的な政策にわたって語られる。女帝の御代には、公的な政治向きの話題にここまで踏み込むことはなかった。主体が男の帝であればこそ、可能だったものではなからうか。

仮に女帝の人物論に限定するならば、聖代を築いた英邁さに女性たちの理想が託されている面を重視して、「女の物語」の極限に位置付けることも、首肯し得る評価であろう。しかし、辛島氏も認めておられることだが、女主人公の一生を追う『夜の寢覚』や『今と

りかへばや』と違って、総体としての『我身』は、七代四十余年にわたって天皇家・摂関家周辺の人々の動向を描く、歴史物語風の作品である。その年代記はかなりしつかりした構想を持って大団円を目指していたと思われるが、最終的にそれが実現したのは今上帝の治世下であった。女帝の存在感は物語の最後まで大きいし、女帝の聖代は今上帝の先例・模範として不可欠のものだったが、詮ずるところ、予定された結末に至るまでの一つの階梯であったといってもよい。物語全体から見れば、女帝・今上帝の二代にわたる聖代描写を、「女の物語」で律することはできないだろう。むしろ注目すべきは、物語においてかくまで聖代が強調されることの方にあるのではなからうか。

#### 四

『我身』の卷五・卷八は、『いまの御かど

は「あたらしき御世は」ではじまる冒頭から当代の帝とその治世に焦点を絞り、以下かなりの紙幅を割いて、女帝及び今上帝が実現した聖代を描写する。先に掲げたような類型表現を用いた賛辞をはじめ、それぞれの帝の精勤ぶりを伝えるほか、ほぼ女帝の一代記である巻五は、宮廷の風紀が刷新されあるべき秩序が整ったこと、大嘗会御禊や嵯峨院行幸などの行事のめでたさ、女帝の退位を天照御神までが惜しみ妨害したこと、そして譲位の儀を自力で遂行した後崩御に至るまで、繰り返し女帝とその御代を賛美する。続く巻六は物語の本筋から外れた別伝的な巻だが、詔書覆奏という政事場で女帝の深い学識が発揮されるなど、女帝の帝としての理想性はますます高められている。巻八における今上帝は、女帝ほど主人公性を備えているわけではないものの、亡き女帝の加護により御代長久を保証されたことから、大極殿修復などの具体的な政策にまで言及されることは前述の通りで

ある。帝を主人公とする物語といえど『狭衣物語』が思い浮かぶが、そこでは狭衣の帝としての資質や治世の有様には全く触れるところがない。それに比して、『我身』が帝というもののあり方や公的・政治的な世界に向ける関心の深さは際立っている。

もともと、物語の中で明王やその聖代が称えられることは、決して珍しいことではない。『源氏物語』では、紅葉賀・花宴両巻を頂点として延喜聖代になぞらえられる桐壺帝の御代のほか、冷泉帝も光源氏の後見のもとに「いみじき盛りの御世」（絵合・二一・一八四）を實現し、「末の世の明らけき君」（若菜上・三二・二一〇）と呼ばれている。ただしそれらが聖代であることは、盛大な宮廷行事や文人の優遇など、主に文化的な事象を通して表現されていた。周知のように、『源氏』の語り手は、純粹に政治向きの話題になると、「女のまねぶべきことにしあらねば、この片はしだにかたはらいたし」（賢木・一三・三五一）



「片はしまねぶもいとかたはらいたしや」(薄雲・二―二三七)と、深入りを避ける態度を見せる。文化の興隆が重要な帝業の一つであった時代のこと、女性にも親しく触れる機会のある文化の繁栄を描くことは、女の書く物語にふさわしい聖代賛美の方法だったといえよう。

下って鎌倉前中期成立と推定される数篇の現存物語には、帝を称える文章が割に目につく。たとえば『いはでしのぶ』の今上帝は、十三歳という弱年での即位をはじめ、『我身』の今上帝に似る点がいくつか見られる人物だが、その即位直後の様子は、

げになにごともつゝあるべき御ことなれど、さるはさきいつる花などの心地して、あたらしくめでたき御代の雲井の月しづかにてらして、かぜおさまれる野辺のけしき、露の光もかひある秋にてなむありける。三

と描写されている。「かぜおさまれる」は、

次に掲げる『石清水物語』の「吹風ゑだをならさず」と同じく、天下泰平の常套表現で、『我身』にも「かぜはなをともたてぬや」(巻五・一三五)という一節がある。その他、みかど、おりさせ給はんの御心づかひあり。……此みかど、御心やはらかに、とがあるべき人をも、つみなきさまになだめ、御めぐみひろくおはして、あつしきしづのを、しづのめまでも御あはれみひるかりければ、吹風ゑだをならさず、おさまりたる御代を、かくかはらせ給へば、思ひなげく人おほかり。

(『石清水物語』巻上・五二)

ひとへにおりさせ給ひなんの御心まうけなり。おなじみかど、申せど、あまねき御心にて、かずならぬしづのをまでもおほしはくゝみ、うるはしかりける御まつりごとを、おしみ聞えぬ人なし。

(『若の衣』春・二九)

にはかに御くらゐ、とうぐん(うぐ)にゆづり給

て、たゞいま御よさかりにて、よの中みだれず、ひだうなる事さらにまつり給はず、をだしくめでたしとて、よの中の人、をしみたてまつれど、……

（『むぐらの宿』二七五）

は、いずれも帝の退位に際してその徳政を惜しむものである。また、『雫に濁る』の結末は、帝を補佐する関白の善政を称えて太閤円となる。

関白殿、よのまつりごとめでたく、あめのしたにあやしきたみまでうけられ、めでたきためしにひきけり。（一九〇二〇）  
このように、この期の物語には、帝の仁徳や治世のめでたさへの賛辞を備えているものが多く、しかもそこで評価される「まつりごと」の意味合いが、かなり政治的な領域に踏み込んでいるように思われる。『我身』の聖代描写も、一応こうした傾向に連なるものではあるう。

しかし、上述の他の物語における聖代は、

おおむね物語世界の舞台設定に留まり、理想的な人物による理想的な出来事を描くという物語の通例に従ったに過ぎないともいえよう。特に『石清水物語』『苔の衣』の例では、さして重要人物でもなかった帝の慈愛深さが、退位間際になつて唐突に賞賛される。両者は表現もよく似通っているが、直接の影響関係にないのであれば、典型的な撫民思想に基づいた一種の決まり文句をともに用いたのであろう。女の書く物語としては、公的・政治的な方面に言及するとしても、この程度がごく妥当なところ、もしくは限界だったのではなからうか。それに比して、『我身』の巻五・巻八それぞれの巻頭から仰々しくはじまる聖代描写は、まず量的に長大である上に、内容的にも詳細かつ具体的であることにおいて群を抜いている。もはやそれは物語の背景に留まらず、聖代を描くこと自体が一つの目的であつたと考えざるを得ない。

現在知られる先行物語の中でそれに匹敵す

るものを有しているのは、『松浦宮』のみであらう。先に挙げた内乱平定直後の概括的な聖代描写をはじめとして、母后・幼帝が朝夕政務と勉学に励む様は、『朝政はてぬれば、例の文など講ぜらるれど』（巻二・八四）等、その後幾度も述べられる。その他、有能な人材を登用したこともすでに触れたが、臣下たちもそれに応えて意欲的に治世に協力したという。

ただ身の才、心の賢きを選ばれて、人を用ゐらるれば、おのおの心を添へて、世の治まらむ政を思ひ励むべし。高きにおこらず、易きに怠らず、うち休むひまもなく、みづから務めたまふ御心おきてをはじめ、いささかのひまあるべくもなく、磨ける玉のごと見えたまふ御さま、前の世ゆかしう、むかしのためもありがたげなり。（巻二・九七、八）

また、『誹謗の木』を立てた当初は、『世を知らせたまひてのち、まことに横様なること

なければ』（同・九八）、投書する者もなかったが、やがて弁少将の待遇に対する批判が提出された。その冒頭に、

君、朝に臨みたまひてのち、はからざるに國の災ひを鎮め、窮まれる民の力を休めたまふ。さらに堯舜の世に異ならず。

とあるのは、上奏文の通例とはいえ、この場合十分に実質を伴った賛辞であったといえよう。（同・九九）

このように『松浦宮』は、単なる物語の背景設定としての聖代に留まらず、政務に精勤する母后や帝の賢明さと治世の理想性そのものを対象化して描くことに、相当の筆を費やす作品なのである。『我身』の女帝・藤壺・今上帝の人物造型が『松浦宮』の華陽公主・鄧皇后・幼帝の影響を受けていること、聖代描写の細部にも共通する表現があること、それ以上に『我身』が『松浦宮』に学んだものは、帝の英明と善政を詳述し殊更に称えるこ

と自体だったのではなからうか。

公の政治の世界に言及しないという物語の原則に反して、『松浦宮』が聖代を詳細に描写できた第一の理由は、やはり作者が男性で、漢籍に由来する政治理念を身に付け、実際の政治の場にも関わり、そうした話題を憚る必要がなかったからだろう。さらに『松浦宮』は、その他の点でも伝統的な物語観では律しきれない特徴を多く持っており、かなり異質な印象を与える作品である。藤原京の時代というはるか古代に時代を設定して、登場人物に万葉調の和歌を詠ませたり、地理的にも異国の地に舞台を定め、戦乱に巻き込まれた主人公の神助による活躍を活写したかと思うと、天女との伝奇的・幻想的な恋物語を情緒たっぷりに描くなど、和漢の古典の教養を踏まえつつ、自由に想像力を働かせた様がありありと窺われる。いにしえの聖人の教えに基づいた、現実にはまずあり得ないような理想政治の実現も、その一環と考えられる。舞台

は想像の彼方にある異国、しかも儒教の本場である唐土、時代も古代という極めて空想的な物語の中で、定家と目される男性作者が、漢籍に学んだ儒教的政治理想に花開かせたもの、それが『松浦宮』の聖代描写だったといえよう。

『我身』はその『松浦宮』に学び、本朝の物語に移してきたのであろう。『我身』は、物語世界の時代設定として摂関政治全盛期を意識していたと思われる<sup>三</sup>が、それは物語成立時から二百年以上も昔とはいえ、同じ平安京の時代であり、貴族社会の制度や文化においても連続する面が多く、決して隔絶された過去ではなかった。特に『源氏』を規範に仰ぐ中世のいわゆる擬古物語では、ごくありふれた時代設定である。『松浦宮』などに比較すれば、『我身』はずっと現実的で常識的な物語といってよい。しかし、この物語が比類ない聖代の描写にかけた重みは、女の視点から私的な事柄を扱う一般的な物語の中では特

異なほどであった。しかしそれは必ずしも『我身』の独創というわけではなく、『松浦宮』という男性の手になる物語を経由して生まれたものだったということになる。

## 五

『我身にたどる姫君』には、確かに多くの個性的な女性たちが登場し、男性よりずっと生彩もって描かれており、作者が女性であることを十分予想させる。その特徴ある女性登場人物の一人である女帝には、先行物語の主人公たちの粹を集めたような完全な理想性が付与されており、聖代を築いた英邁さもその一つであった。そこに物語を愛好する女性たちの憧憬を読み取ることは、決して間違いないだろう。

しかし、女帝の明王としての造型が直接に拠ったのは、女主人公が男性を凌いで活躍する『今とりかへばや』『有明の別』のような

先行作ではなく、『松浦宮』という男性の手になる物語だった。最終的に男性の今上帝によつて大団円がもたらされることからしても、『我身』における聖代は、女の理想として追求されたものとはいいたい。むしろ歴史物語風に展開する物語世界に聖代を実現させ、その有様を詳述すること自体に意義があったのではないか。そうした物語の伝統から逸脱するほどの聖代描写も、やはり『松浦宮』という先蹤あつてこそ可能になったものと思われるのである。『女の物語』の流れが、必ずしも『我身』まで直線的に展開してきたのではなく、男性作の物語による屈折を経ていることを確認しておきたい。

さて、『松浦宮』の場合、物語の規範を逸脱して政治的な世界に踏み込むのは、おそらく現実の政治に満たされぬものを感じていた作者定家が、はるか古代の異朝を舞台として自由奔放に構想した異色の物語の中で、豊富な漢籍の知識を基に、半ば空想的な統治理想

を繰り広げた、という事情が推測される。『我身』の聖代描写にも、まずは作者の理想の発露を読み取って誤らないだろう。しかし『松浦宮』と違って、あくまでもこの物語の主調は、『源氏物語』や『狭衣物語』の影響著しい典型的な恋愛物語である。その中で、女の物語の伝統に背くほど詳細に政治理想を展開する必然性があったのだろうか。しかも、身近な本朝の王朝期宮廷を舞台として具体的に説明される善政の数々は、夢想到に留まらぬ生々しさを感じさせる。『我身』が聖代を繚述することの意味を、次章でさらに考えてみたい。

#### 〈注〉

(1) 今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』

(桜楓社、一九八三年) 解題。

(2) 注(3)(4)に挙げるもののほか、『我身にたどる姫君』の女帝と前斎宮とをめぐ

る断章―レズビアンの物語の示唆するもの―(『文学論輯』第三十八号、一九九三年三月)など。また、大脇亜矢子(『我身にたどる姫君』の主題の一考察)(『国文学』第二十八号、一九八八年十一月)は、物語の前半と後半では主題が変化していること、後半の巻五―七は女性中心の物語であることを論じている。

(3) 『物語史(源氏以後)』断章―『夜の寢覚』『今とりかへばや』から『我身にたどる姫君』へ―(今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院、一九八九年)。以下、特に断らない限り、辛島氏の所説は同論文による。

(4) 第一章参照。『有明の別』から『我身』への影響関係については、辛島氏も『我身にたどる姫君』の女帝―物語史における女主人公の系譜―(『徳島大学国語国文学』第二号、一九八九年三月)、『有明の別』覚書(『リポート笠間』第三十一号、

一九九〇年十月）において示唆されている。

(5)『有明の別』には、『古今集』の著名歌

二首、

有あけのつれなく見えし別より曉ばかりうき物はなし(恋三・六二五・忠岑)  
今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな

(恋四・六九一・素性)

がしばしば引かれ、題名の由来ともなっているのだが、この二首、特に後者の引用は、藤原定家の解釈に従ってなされているという(大槻修『有明の別の研究』桜楓社、一九六九年)。俊成卿女作者説が有力な『無名草子』、その『無名草子』が定家作と伝える『松浦宮』とともに、御子左家の周辺で成立した作品だったかもしれない。なお大槻氏は、同書において、『有明の別』巻一、主人公が笙を吹く場面で引き合いに出される『なにかしの月かげにやまにのほりける人』(三三二)は、『松浦宮』の弁少

将を指すかと推定されているが、これは松浦あゆみ『有明の別れ』の笙の笛―女右大将の奇瑞の光と影―(『論究日本文学』第六十九号、一九九八年十二月)が指摘するように、王子晋の故事と解する方が妥当と思われる。

(6)久保田孝夫・関根賢司・吉海直人編『松浦宮物語』(翰林書房、一九九六年)などに指摘。後代の和歌での用例は、

池水にますみの鏡かげそへてちりもくもらぬ秋の夜の月

(『新千載集』秋上・三八八・建長二年八月十五夜鳥羽殿にて、池上月といへることを講ぜられけるにつかうまつりける・公相)

などがある。

(7)底本『しるゝ』。

(8)『明文抄』巻一所引『寛平御遺誠』に、『天子雖に不窮経史百家。而有何所恨乎。唯群書治要早可誦習』とある。

(9) 主人公弁少将その他の人物の行動についても、中国史上の实在人物から想を得たところが多々見受けられる。モデルの指摘をはじめ、『松浦宮』と漢籍との関係は、萩谷朴「松浦宮物語作者とその漢学的素養(上)(下)」(『国語と国文学』第十八巻第八・九号、一九四一年八月・九月)及び同論文を収める『松浦宮全注釈』(若草書房、一九九七年)の注釈を参照した。

(10) 「古人有言、牝雞無晨、牝雞之晨、惟家之索」(索尽也、喩婦人知外事)、「雌代雄鳴則家尽、婦奪夫政則国亡」(『書経』牧誓篇、《》は孔氏伝)に拠り、女性の政治介入を諷める格言。

(11) 引用は『明月記』(国書刊行会、一九一年)による。

(12) 『三長記』同年五月十日条。この事件については『愚管抄』にも詳しく、丹後局はその十年ほど前に起こった同様の事件にも関与していたらしい。

(13) 即位後まもなく重病に陥った今上帝の夢枕に女帝が立ち、靈薬を与えた上で三十六年の在位を予言している。

(14) 底本「いと」脱。

(15) 第二章参照。

(16) 巻四残欠本(冷泉家時雨亭叢書)、十五丁表。

(17) 三角洋一「『松浦宮物語』の主題と構想」

「『松浦宮物語』の意図をめぐって」(『物語の変貌』若草書房、一九九六年)。

(18) 第二章参照。



#### 第四章 聖代描写の意義

中世の王朝物語の特徴の一つとして、一貫した主人公を定めず家々の年代記を綴る歴史物語的作風ということが挙げられ、『我身にたどる姫君』もその一例に数えられている。第二章において、この物語はさらに、代々の帝が物語展開の軸となり、しかもそれぞれの帝が史上の摂関政治全盛期の皇統譜をなぞるように造型されているという点で、特に歴史物語の性格が濃厚であることを論じた。『我身に登場する七代の帝の内、五代目の女帝と最後の今上帝は名君とされ、申し分ない聖代を築いたことが殊更に称えられている。とりわけ巻八には、公的な政治向きの話題に立ち入らないことを原則とする物語には異例なほど、具体的に詳しく今上帝の治績を縷述する部分がある。もっとも、聖代を称揚する物

語としてはすでに『松浦宮物語』があり、『我身』はその先蹤を直接学んでいるらしいことを、第三章で考えた。そこでも述べたように、藤原定家の作と目される『松浦宮』の聖代描写は、男性作者が漢籍に学んだ儒教的理想を、空想的な虚構の世界で開花させたものと思しい。しかし『我身』の場合、聖代を称えることの意味には少しく違ったものがあるのではなからうか。そのことを確かめるために、今上帝の善政のありようを吟味することからはじめたい。

巻五の冒頭が女帝の聖代賛歌だったのと同様、巻八も今上帝の『あたらしき御世』のめでたさを書きつらねることからはじまる。まだ弱年の今上帝が、『むかしの御をしへをも、いみじうま心におぼしめしたもち』『たゞ世のまつりごとすなほに、たみやすからんこと

をつくりいださむとのみ、よるひる御心にか  
け、精力的に政務に励んだ結果、「まだき  
にたくひなくゆゑしきまでぞ、しまのほかま  
でいひきはる」ほどの「めやすき御代」が到  
来したという（二三―二四）。

今上帝の善政の有様は、巻八の半ば、即位  
から数年後の時点でも詳細に記される。長く  
なるが引用しておく。

たゞあけたてば、大ごと殿のやぶれた  
る、おらく院のつくるはるべきなどいふ  
ことをのみにとまなませ給て、ふるきを  
おこし、たえたるをつがんとのみおほし  
めしたれば、時につけては又、なべての  
世中、たゞかゝるすちにのみぞなりにた  
る。うちしきり院たち、宮々、かずお  
ほくおはします。みふをはじめ、みさを  
なにやかやと、かずさへおほかるまゝ、  
国々もいみじう所せかりしを、かたへは  
はぶきとゞめさせ給ふ。さかの女院のむ  
かしの御つたはりは、当代にたてまつら

せ給へりしなどを、みなとゞめて、国  
々のおとろへを、いみじういたはらせ  
給。さるはその冬のさがの院も、せんだ  
いの御むかへいちしるく、花ふりしくと  
いふばかりにて、おほしめず事かなひて  
ければ、げに世中もおほくやすまりにけ  
んかし。ふるかんだちめなどうせたま  
へど、かはりもなされず。かんだちめの  
かずおほかるは、くはんへの御いさめ  
のまゝになどのみ、おほしをきてたれば、  
いさゝかの事もうちみだれず、色あひな  
きまで火さなどいふ事うせきえにため  
り。たゞみほくのいたりふかき事を  
のみ、御心にしめて、そのさえあらはれ  
たる人は、あつき御かへりみあれば、大  
がく、くはんがくなどいひてかげかたな  
かりし事、たゞむかしばかりにおこした  
でられて、だかきいゑのことも雪をあつ  
め、ほたるをひるひけり。（二四〇―二）  
一読してわかるように、かなり具体的な政策

にまで及ぶ説明となっている。女の視点に立ち、公的・政治的な方面に深入りしないことを原則とする物語の世界では、ほとんど取り上げられることのなかった話題である。

ここで述べられた治績をまとめると、

① 大内裏の中心部に位置する大極殿・豊楽院をはじめ、宮城殿舎を修復したこと

② 多数の院宮が所有する封戸や荘園の一部を停止、特に亡き女帝が母嵯峨女院から伝領して養子の今上帝に譲渡したものは全て廃止したこと

③ 「くはんへの御いさめ」すなわち『寛平御遺誠』<sup>25</sup>に従って、上達部の人員を削減したこと

④ 人材を登用し学問を奨励して、衰微していた大学寮・勸学院を振興したこと

の四点となる。宮城・公地公民制・太政官制度・官吏養成機関としての大学、これらはいずれも古代律令国家の根幹となる制度・組織であった。政治・社会制度の変容した平安

中期以降も、あるべき範型としての律令体制へ可能な限り回帰しようとする試みは折々なされ、まさに「ふるきをおこし、たえたるをつがん」<sup>26</sup>とする善政として賞賛されていた。右のような諸政策は、そうした復古事業の典型例というべきもののだが、その模様を諸文献から窺ってみよう。

たとえば、摂関勢力に対抗して意欲的に親政を志し、「よろづの事、昔にも恥ぢず行はせ給て、山の嵐、枝も鳴らさぬ世」(『今鏡』<sup>27</sup>)手向・三五)を築いた後三条天皇の治績の一つが、焼亡した大極殿の再建であった<sup>28</sup>。また、後白河天皇に重用され、「世を淳素に返し、君を堯舜に至したてまつる。延喜・天曆二朝にもはぢず、義懷、惟成が三年にもこえたり」(『平治物語』巻上・一四八)という成果を上げた藤原信西も、荒廃していた大内をわずか二年で修復したという<sup>29</sup>。

外郭重畳たる大極殿、豊楽院、諸司、八省、大学寮、朝所にいたるまで、……年

をつくりいださむとのみ、よるひる御心にか  
け、精力的に政務に励んだ結果、「まだき  
にたくひなくゆゝしきまでぞ、しまのほかま  
でいひさはぐ」ほどの「めやすき御代」が到  
来したという（二三―二四）。

今上帝の善政の有様は、巻八の半ば、即位  
から数年後の時点でも詳細に記される。長く  
なるが引用しておく。

たゞあけたてば、大ご殿のやぶれた  
る、ぶらく院のつくろはるべきなどいふ  
ことをのみにとまなませ給て、ふるきを  
おこし、たえたるをつがんとのみおほし  
めしたれば、時につけては又、なべての  
世中、たゞかゝるすぢにのみそなりにた  
る。うちしきり院たち、宮々、かずお  
ほくおはします。みふをはじめ、みさを  
なにやかやと、かずさへおほかるまゝに、  
国々もいみじう所せかりしを、かたへは  
はぶきとゞめさせ給ふ。さかの女院のむ  
かしの御つたはりは、当代にたてまつら

せ給へりしなどを、みなとゞめて、国  
々のおどろへを、いみじういたはらせ  
給。さるはその冬、さかの院も「せんだ  
いの御むかへいちしるく、花ふりしくと  
いふばかりにて、おほしめす事かなひて  
ければ、げに世中もおほくやすまりにけ  
んかし。ふるかんだちめなどうせたま  
へど、かはりもなされず。かんだちめの  
かずおほかるは、くはんへの御いさめ  
のまゝになどのみ、おほしをきてたれば、  
いさゝかの事もうちみだれず、色あひな  
きまで火さなどいふ事うせきえにため  
り。たゞみほく、のいたりふかき事を  
のみ、御心にしめて、そのさえあらはれ  
たる人は、あつき御かへりみあれば、大  
がく、くはんがくなどいひてかげかたな  
かりし事、たゞむかしばかりにおこした  
でられて、だかきいゑのことも雪をあつ  
め、ほたるをひるひけり。（二四〇―二四一）  
一読してわかるように、かなり具体的な政策

にまで及ぶ説明となっている。女の視点に立ち、公的・政治的な方面に深入りしないことを原則とする物語の世界では、ほとんど取り上げられることのなかった話題である。

ここで述べられた治績をまとめると、

① 大内裏の中心部に位置する大極殿・豊楽院をはじめ、宮城殿舎を修復したこと

② 多数の院宮が所有する封戸や荘園の一部を停止、特に亡き女帝が母嵯峨女院から伝領して養子の今上帝に譲渡したものは全て廃止したこと

③ 「くはんへいの御いさめ」すなわち「寛平御遺誠」<sup>三</sup>に従って、上達部の人員を削減したこと

④ 人材を登用し学問を奨励して、衰微していた大学寮・勸学院を振興したこと

の四点となる。宮城・公地公民制・太政官制度・官吏養成機関としての大学、これらはいずれも古代律令国家の根幹となる制度・組織であった。政治・社会制度の変容した平安

中期以降も、あるべき範型としての律令体制へ可能な限り回帰しようとする試みは折々なされ、まさに「ふるきをおこし、たえたるをつがん」<sup>三</sup>とする善政として賞賛されていた。右のような諸政策は、そうした復古事業の典型例というべきもののだが、その模様を諸文献から窺ってみよう。

たとえば、摂関勢力に対抗して意欲的に親政を志し、「よろづの事、昔にも恥ぢず行はせ給て、山の嵐、枝も鳴らさぬ世」(『今鏡』<sup>三</sup> 手向・三五)を築いた後三条天皇の治績の一つが、焼亡した大極殿の再建であった<sup>三</sup>。また、後白河天皇に重用され、「世を淳素に返し、君を堯舜に至したてまつる。延喜・天曆二朝にもはぢず、義懐・惟成が三年にもこえたり」(『平治物語』巻上・一四八)という成果を上げた藤原信西も、荒廃していた大内をわずか二年で修復したという<sup>三</sup>。

外郭重疊たる大極殿、豊楽院、諸司、八省、大学寮、朝所にいたるまで、……年

をへずしてつくりなせり。不日と云べかりしか共、民のついへもなく、国のわづらいもなかりけり。(同・一四八・九)

②の莊園停止に関しては、醍醐天皇による延喜の莊園整理令をはじめとして、やはり後三条が行った延久の莊園整理も名高いところである。

始テ記録所ナンド云所オカレテ国ノオトロハタルコトヲナラサレキ。延喜・天曆ヨリコナタニハマコトニカシコキ御コトナリケンカシ。(『神皇正統記』一四一)

その後、院政期から鎌倉初期にかけて幾度か発令された公家新制も、多くは莊園整理の条項を含んでいた。また藤原兼実は、「我朝者、偏依ニ莊園ニ滅亡者也」と慨嘆し、理想論としてではあるが、「延久之先符」「延喜之古風」に倣って、社寺権門の所領を悉く停廃することを謳っている(『玉葉』。承安三年十一月十二日条)。同じく兼実は、上達部の員数について、納言の数が往時の倍以上になつて

いる現状に鑑み、「先可レ被レ定ニ公卿員数ニ也」と後白河院に進言して、これ以上の増員には否定的な見解を述べている(同・文治二年十月二十八日条)。しかしその弟慈円が『愚管抄』を著した頃には、「コノ比ノ十人大納言三位五六十人」(巻七・三四〇)、「十大納言、十中納言、散三位五十人ニモヤナリヌラン」(同・三五四)という有様で、

僧俗ヲカイエリクシテ、ヨカラン人ヲ、タゞ鳥羽・白河ノコロノ官ノ数ニメシツカイテ、ソノホカラバフツトステラルベキナリ。(同・三五七)

という提言が見られる。最後の人材登用は、為政者の心がけとしてごく一般的なものだが、大学の振興となるとまず第一に挙げるべきは、『源氏物語』少女巻であろう。そこでは、時の権力者光源氏の息子の入学に促されて大学が隆盛を誇った様子が、

むかしおほえて大学の栄ゆるころなれば、上中下の人、我もくとこの道に心

ざし集まれば、いよく世の中に、才ありはかゝしき人多くなんありける。……すべて何事につけても、道くの人の才のほど現るゝ世になむありける。

(二二二八八)

と描写されており、おそらく『我身』の④の記述と無関係ではあるまい。現実世界でも、三善清行の意見十二箇条や保延元年の藤原敦光の勘文<sup>三</sup>などの中で、大学の経済的窮迫への対策が上申されている。このように、四つにまとめた『我身』今上帝の諸政策は、いわば善政の典型例として挙げられやすいものであり、平安中期から鎌倉初期にかけて、実際に政治の場で議論され、あるいは実行された事柄であった。

また、①から④まで列挙された順序に注意すると、四つの事柄が個別に寄せ集められたのではなく、ごく自然な脈絡に沿って展開していることがわかる。『平治物語』の内裏造営のくだりにも言及されていたように、①宮

城殿舎の修理は諸国への賦課によってまかなわれるのが通例であり、②御封・御荘の停止はその負担軽減のためと察せられる<sup>三</sup>。嵯峨院崩御により院宮が一人減ったことはその意味で僥倖だったが、上達部の死去にも同様の論理が適用されよう。直後に「火さへ過差」などいふ事うせきえにためり」と続く文脈から判断すると、③冗員の削減は財政緊縮政策の一環であったと思われる。となると慈門のいうように少数精鋭主義で、④「ヨカラン人」の登用が求められるであろう。このように、あたかも自然な連想の赴くままに、現実の政治の場で取り上げられやすかった事項を書きつらねたかのような記述なのである。

こうしたことからこの作者の人物像を推するに、宮廷、特にその公的な部分に近い場所において、まつりごとを身近に見聞していた者、という条件が浮かんでくる<sup>三</sup>。そして先学の見解がほぼ一致しているように、作者が女性であるとすれば、宮廷で天皇<sup>三</sup>に近侍する女

房、中でも天皇の秘書役として廷臣との間の取り次ぎ役を務め、公事に触れる機会の多かった内侍司の女官などが有力視されるのではなからうか。巻六で四人の典侍・内侍が女帝の近習女房として印象的な活躍を見せることも、この推測を補強するものである<sup>三〇</sup>。

しかし、作者がそうした立場にある人物だったとしても、「女のまねぶべきことにしあらねば」(賢木・一―三五―)という理由で政治的な話題を避けた『源氏』以降、帝徳や世の安泰を称える類型的な修辭表現を除けば、後続の物語がおおむねその原則を守ってきた中で、ここまで詳しく帝の治績を述べ立てる必然性があったのだろうか。今上帝の諸政策が物語の他の部分と何らかの有機的な関連を持っているわけではなく、物語内部の要請による叙述とは思われない。確かに構想上、最終の巻八に理想的な聖代という大団円が必要であったことは首肯し得るのだが、それにしても、他の作品にも見られるような定型化

した賛辭<sup>三一</sup>では不十分だったのだろうか。巻五の女帝賛美と併せて、『我身』の聖代描写は、物語としてはやや過剰の感がある。それに匹敵するものを持つ先行物語は、第三章で触れたように、現在知られる限り『松浦宮物語』がほぼ唯一である。『松浦宮』は、主要登場人物を天人の生まれ変わりとする点など、『我身』に影響を与えた作品の一つと考えられる。為政者としての女帝や今上帝の人物像を含め、聖代描写に物語の背景設定以上の重みをかけることもまた、『我身』は『松浦宮』に学んだものと思しい。周知のように『松浦宮』の作者は定家と伝えられているが、少なくとも漢籍に通曉した男性であることは間違いない。その男性作者が、唐土を舞台とした空想的な物語の中で、儒教の理念に基づく政治理想を自由に実現させたものが、『松浦宮』の聖代だったと思われる。同様に『我身』今上帝の善政の数々もまた、まずは作者の理想とするところであつたと考えて誤らな



いだろう。

『我身』の成立は鎌倉時代中期、後嵯峨院が院政を行っていた頃と目されるが、その当時の実態からすれば、如上の四つの政策は、到底実行できそうにない事柄ばかりであった。①大極殿・豊樂院は平安末期までに焼失しており、内裏も安貞元（一二二七）年の火災の後再建されることなく、宮城跡はすっかり荒廃していた。②莊園整理令自体、嘉祿元（一二二五）年を最後に発令されなくなるのだが、整理令がしばしば出された院政期は、一方で上皇や女院を含む天皇家が多く、莊園を有する権門と化してゆく時期とされている。しかも鎌倉中後期には、天皇自身の所領を削減するどころか、むしろ長講堂領・八条院領といった莫大な皇室財産が、それぞれ後深草・龜山兩天皇の支配下に集積されるという現象が見られる。③公卿の数は平安中期以降増え続ける一方で、『愚管抄』にあったとおり、後鳥羽院政期には大臣・納言・参議

だけでも三十人に余り、前官や非参議を含めれば百人に達する勢いである。増加傾向はその後も続いており、『寛平御遺誠』の定める定員にまで戻すなどという試みは、無謀に近かった。④大学寮・勸学院は安元三（一一七七）年の大火とともに焼亡し、勸学院はやがて復興したが大学寮はついに再建されなかった。大学制度はその後形式上存続していたが、官吏養成機関としての実質的な役割はすでに失っていたとされる。このように、『我身』の描いた今上帝の聖代のあり方は、物語成立当時の現実に照らし合わせれば、いずれもおよそ実状から懸け離れた理想論であったといわざるを得ない。

そして『くはんへの御いさめ』を持ち出すところから察するに、その理想は延喜の治を範と仰いだものである。醍醐天皇の御代には、初めての全国的な莊園整理令が出されたほか、公卿の数はほぼ『御遺誠』のとおりに守られているし、文章道から人材が輩出して

高位に至る者も少なくなかった等、今上帝の治績と共通する要素が多い。また、『我身』巻八の開始後まもなく、今上帝の夢枕に立つた亡き養母女帝が「御位卅六ねん」と予言するという事件が起こった（二三三）が、在位期間の長さも聖代の証の一つであり、醍醐はその点でも随一だった。

醍醐の聖帝としまして、世の中に天の下めでたき例にひき奉るなれ。位につかせ給て、卅三年を保たせ給けるに、……

（『栄花物語』月の宴・二七）

延喜ハ卅三年マデタモタセ給タリ。其後ハ三十年ニラヨビテヒサシキ御位ハナシ。

（『愚管抄』巻三・一五七）

今上帝の在位年数三十六年とは、醍醐の三十三年を意識して、それを上回る数を設定したものではなからうか。『松浦宮』は、唐土の聖代を「堯舜の世」（巻二・九九）になぞらえていたが、その堯・舜と併称される本朝の聖主が醍醐・村上だった。

よのなかのかしこきみかどの御ためしに、もろこしには、「堯・舜のみかど」  
と申、このくにには、「延喜・天曆」とこそは申めれ。（『大鏡』巻二・九七）  
『我身』はその延喜の代を模範とし、さらに誇張して、それを凌がんばかりの聖代を仮構したのである。

『我身』の語る今上帝の治績は、往昔の聖代を虚構の物語世界で再現した体のものであり、物語成立当時の実状からすればまず実現の見込みのない理想であつた。その意味では、『松浦宮』と同類というべきかもしれない。しかし、藤原京の時代というよりはるか古代、唐土という異郷を舞台に設定し、全体として極めて空想的な物語を奔放に繰り広げる『松浦宮』に対し、日本の王朝時代の宮廷社会における出来事を綴ってゆく『我身』は、よほど現実的な物語である。同じく政治理想の具現といっても、それそれが範とした堯・舜と醍醐との現実味の程度を比較すれば明らかにな

とだが、漢籍より得た理念に基づく『松浦宮』の聖代が、帝王の精勤・儉約の励行・人材の登用など、かなり観念性が強かったのに較べ、実際に朝廷で取り沙汰されてきた政治的問題をつらねる『我身』は、具体性と身近さにおいてはあるかにまさっている。そこには、虚構の世界ゆえの自由な理想の展開というに留まらぬ、一種の生々しさが感じられる。しかも、基本的には王朝物語の伝統に則った恋愛物語の中に、それとそぐわない政治向きの話題を敢えて盛り込んだ作者には、何らかの思惑があったことが予想される。その点を考える手がかりとして、明王今上帝のもう一つの美点について検討してみたい。

## 二

今上帝の御代には、後宮の秩序も理想的に維持されていたことが称えられている。

A 人木石にあらねば、みななきけあるわ

さを、いかでよしなき色にあはじなどのみ、おほしめしつゝめば、もとよりまいり給へるあぜちの大納言のひめ君、式部卿のなど、……見そめつるちぎりばかりをあはれとおほしめせば、いとなだらかなる御もてなしにて、さまよくまうのほり給ふ。わざと女御なども、いまださだまり給はず、宮す所とぞきこゆる。

## (二三—二)

B むげにいはいはけなき御程なれど、山ぐちしるき御さま、なにがしの色にあはじとぞおほしめしうとみしかど、げにいはい木にあらざりけんや、御ものわすれこよなけれど、あながちにおほしめしかへしつゝ、あさまつり事はたゆませ給はず。なをあやしの宮すところも、はちがましからずぞもてなさせ給ひける。(二四〇)

Aは巻八巻頭に近い即位直後の状況、Bはその数年後、左大臣の娘忍草姫君が入内した折の記述で、前節に長文で引用した部分の直前

に位置する。今上帝にとって、女性関係に身を慎み後宮の秩序を保つことが、国政に励むことと並んで重大な帝王の責務であり、明王の条件であったと、繰り返し強調されているのである。後宮の秩序維持を聖代の証とするのは、女性的な視点であると同時に、天皇との外戚関係が権力の帰趨を決する摂関政治の論理に即した評価でもある。摂関政治の発展と繁栄を描く『栄花物語』は、その冒頭の巻で、数多の後妃たちへの「なだらかな取り扱いをもつて、村上天皇を聖主と称えている。

よろづに情あり、物のほえおはしまし、そこらの女御・御息所参り集り給へるを、時あるも時なきも、御心ざしの程こよなけれど、いさゝか恥がましげに、いとをしげにもてなしなどもせさせ給はず、なのめに情ありて、めでたうおぼしめしわたし、なだらかに掟てさせ給へれば、……かくみかどの御心のめでたければ、吹風も枝を鳴さずなどあればにや、

春の花も匂のとけく、秋の紅葉も枝にとゞまり、いと心のどかなる御有様なり。

(月の宴・二八・九)

しかしその村上も、後年には尚侍登子への偏愛により、「世のまつりごとを知らせ給はぬさま」(同・四七)となつて世人の謗りを受け、天曆の聖代に瑕瑾を残した。それに対し『我身』の今上帝は、あくまでも身を慎んで政務も怠らず、明王の面目を全うしたのである。

その事情は、巻五の女帝の御代にも幾分当てはまる。もちろん女帝の宮廷に一般的な意味での後宮は存在しないのだが、上臈・下臈の女房たちがそれぞれの分を守つて女帝に仕えたこと、男性貴族は清涼殿の奥向きの部屋に立ち入らなかつたこと、

おとこも女もあまたつらねて、ものをもいひかはし、たはぶれをもするならで、ひとりまゝにうちさゝめきなどするならひもなくなりにはしかば、みなのはけさ

やかに、かくれもなくのみもてつけたる  
ようぬ、まことにきら／＼し。(一三二)  
のごとく綱紀が引き締められたこと、さらに  
女帝自身廷臣たちに決して隙を見せぬよう注  
意していたことなど、宮廷の風紀、特に男女  
間の秩序を保ったことが、女帝の治績の中  
とりわけ言及されている。同じく女帝の御代  
を扱う巻六は、物語全体の中で別伝的な位置  
付けがされており、取り扱いには慎重を要す  
る巻だが、そこでも女帝の近習女房たちにつ  
いて、

おとこといふ物を、みすのへだてなくて  
みじ、きかじと思ひたるこゝろさまを御  
覧じしりて、かくけちかくめしつかはる  
ゝなるべし。(一八六)

と説明されるなど、同様の傾向が確認できる  
。

さて、今上帝の自誠は、「いかでよしなき  
色にあはじ」「なにがしの色にあはじ」とい  
う言葉で表明されていた。これはすでに指摘

されているように、その前後の「人木石にあ  
らねば、みななさけあるわざを」「げにい  
は木にあらざりけんはや」と併せて、『白氏文  
集』巻四「李夫人」の、

人非木石皆有情、不如不遇傾城色

（人木石にあらざれば皆情有り

、如かじ傾城の色に遇はざらんには）

に拠る表現である。著名な「李夫人」の中  
での結句となるこの一節はよく知られたもの  
で、『松浦宮』末尾のいわゆる偽跋にも引用  
されている。やはり『白氏文集』巻十二より、  
「花非花霧非霧、夜半来天明去、来如春  
夢、幾多時、去似朝雲、無覓処」という詩  
を書き付けた後、

これもまことのことなり。さばかり傾城

の色に逢はじとて、あたなる心なき人は、

なにごとに、かかることは言ひ置きたま

ひけるぞと心得がたく。唐にはさる霧の

さぶらふか。(一三九)

と、批評めいた感想を記すところである。句

末を「あはじ」とする点で『我身』と一致している。『我身』に『松浦宮』から影響を蒙った形跡が見られることを考慮すれば、その「李夫人」引用もまた、直接には原詩に拠ったにせよ、『松浦宮』偽跋が介在していた可能性は高い。

もっとも、この詩句はすでに『源氏物語』にも引用されていた。浮舟の急逝が報じられた後、匂宮の惑乱する様を目の当たりにした薫が、複雑な思いをめぐらした末に口ずさむ場面である。

さるはおこなり、かゝらじ、と思忍おれど、さまざまに思ひ乱れて、「人木石にあらざればみな情あり」と、うち誦じて臥し給へり。（蜻蛉・五十二七九）  
また、Bに見える「木石」を和らげた「いは木」という語は、「岩木よりけになびきがたき」（夕霧・四一一四九）「あはれなる御心さまを、岩木ならねば思ほし知る」（東屋・五一一四九）のように、人情を解さぬものの

象徴として使われ、他の作品にも用例が多い。特に『我身』は頻用しており、あと五例が検索できる。

ただ、『源氏』蜻蛉巻の引用にせよ、「いは木」を用いた表現にせよ、「李夫人」末尾の二句の内、「人非木石皆有情」という前半に比重がかかっていた。原詩は新樂府の一篇で、「鑑・嬖惑也」という諷諫にこそ作者の本意があるのだが、それを最もよく表す最後の一句は言及されないのである。もちろん蜻蛉巻の場合、薫としては、口に出さなかった後半の句に後悔と自誠の思いを託して呟いたものである。しかし物語が描くのは、「思忍おれど」なお「さまざまに思ひ乱れる惑いの姿であり、この後薫がその誠めを忠実に守ったわけでもない。当該詩句引用の効果は、血の通った人間のままならぬ情念を慨嘆するところに求められ、原詩の諷諭の意図を積極的に生かしているとはいえない。もっともそれは、物語というものが男女の恋愛を中心に

展開する以上、当然のあり方であつたのだらう。

対して『松浦宮』は、詩句の後半を引用して教訓の意味合いを表に出している。ただし物語の内部ではなく、作者が書写者の筆を装つて自らの物語を批評したという、偽跋の部分であつた。そこでは、「あだなる心なき人」、つまり「李夫人」において好色を誡めた白居易当人が、一方で「花非花」のような、『文選』の「高唐賦」で有名な巫山の神女のお話を髣髴とさせる幻想的な詩を残したことを揶揄している。「花非花」は、『松浦宮』の弁少将・鄧皇后の恋愛物語を象徴するような内容の詩であり、「高唐賦」とともに物語の構想に深く関わつたものと推定されている。とすれば、この白居易の矛盾を茶化す偽跋の文章は、同時に、その自詩と同趣の幻想的、浪漫的な恋物語を創作した作者自身への皮肉ともなるのではなからうか。

『松浦宮』の主要登場人物たちは、いずれ

も男女関係において身を慎んでいながら、宿命的な恋に陥るといふ経緯をたどる。主人公弁少将は、「世の常の若き人のごと、色めきあだなることもなし」（巻一・一六）と紹介され、唐の美女たちを見ても「さらに乱れず、限りなくをさめたる」（同・三三）態度を保つていたが、華陽公主や鄧皇后との出逢いによつて一変する。また、「このかたに乱れあらば、かならず身を滅ぼすべき我が身」（同・四七）であることを自覚していた華陽公主は、弁少将と逢瀬を持ったためこの世を去ることになる。地上に降誕した天女として、「なべての目に見る人は、けがらはしう、疎く、はるかにのみ思ひ慣らへる」鄧皇后も、弁少将に対しては、「人の身を享けてけるまどひのおろかさ」のままに、慕情を抑えられなかつた（巻三・一二四）。『傾城の色に逢はじ』と自重していても、木石ならぬ主人公たちは人間的な愛念に流されてゆく。皮肉な口調で「李夫人」の詩句を引用する偽跋は、そうし

た自らの物語内容に対する諷刺的言辞のよう  
に思われる。

『我身』の今上帝に戻ると、彼は「よしなき色にあはじ」と固く決意したばかりでなく、それを忠実に守ってゆく。忍草姫君の入内にはさすがに心が揺らぎかけたものの、なお思い返して「あさまつり事はためませ給はず」、后妃たちを公平に取り扱うことも忘れなかったという。こうした人物像が物語において稀有な存在であることはいうまでもなく、帝に限定しても、「あさまつり事」を怠った『源氏』の桐壺院をはじめ、失恋の痛手により位を捨てる帝<sup>三</sup>や、一人の女性をめぐって臣下と競う帝<sup>四</sup>の多い中で、今上帝の性格は際立っている。それは今上帝が恋愛物語を担う主人公格の人物ではないということだとしても、志操堅固さが殊更に強調されている感は否めない。そしてそこでは、原詩の趣旨に沿って教訓性を前面に押し出す形で、「李夫人」の詩句が繰り返し引用されているのである。

王朝物語に限らなければ、『白氏文集』の諷諭詩が教訓の目的で用いられることは少なくなく、特に鎌倉時代に入ってその傾向が強まるとされる<sup>五</sup>。当該詩句もその例に漏れず、

これひとりきみへ玄宗のみにあらず。

人むまれて木石ならねば皆をのづからなさけあり。いにしへよりいまだいたるまでたかきもいやしきも、かしこきもほかなきもこのみちにいらぬひとはなし。いりとしいりぬればまよはずといふ事なし。しかじたゞ心をうごかす色にあはざらんには、……

(『唐物語』第十八話、六六)

しかのみならず、唐帝の、楊貴妃に別れし恨みは、長恨歌といふ文、名において聞ゆ。漢皇の李夫人におくれし恨み、いかばかりなりけむ。……これひとへに、愛著生死の業なれども、木石ならぬ身の習ひにて、この恨みにしうむたくひ、古今数を知らず。ただ傾城の色にあはざら



むことを、こひねがふべし。

（『十訓抄』第九・三七七）

むかしより今にいたるまで、賢帝も猛き武士も、情のみちには迷て、政をしらず、いさめるみちを忘れけるとかや。「しかし、傾城の色にはあはざらんには」と、香山居士が書置けるは理かな。

（『平治物語』巻下・二七五）

のように、玄宗と楊貴妃、武帝と李夫人、清盛と常盤など、女色に迷って道を誤った実例に伴って、読者への訓誡として用いられている。「我身」の場合、直接読み手へ向けた言という形は取らないものの、こうした教訓目的のものに近い性格を持っているように思われる。

今上帝にも、もって誠めとすべき先例があった。同母兄にあたる前代の悲恋帝である。権門の娘のいない後宮に不満な悲恋帝は、美しい叔母皇太后宮に思慕を寄せ、秘かに一夜の契を結んだが、誇り高い宮は食を断って自

ら死を選ぶ。それを知った帝も後を追うように崩御するが、その最期の言葉は、

「やすみしるあまつ日つきを」たもつ

とも人のいとはん世にはのこらし

むなしきからなりとも、かの御あたりに

をかせ給へ。わがさきの世の十ぜんもち

から、かならずつきざらん。あらぬ世に

すがたはかはるとも、かの御身をはなれ

じ」（『平治物語』巻下・二七八）

というものであった。帝位をなげうち十善の戒力を捧げることも惜しまないという激情は、自らの身を滅ぼし相手をも死に至らしめた罪深い妄執、殊に帝王にはあるまじき行為というほかない。今上帝は、こうした悲恋帝と皇太后宮の「あさましくよのつねならずうちづかせ給にしことのさま」について、「世人さへきゝぐるしういひあつかふなる」のを聞くにつけ、「いかでこのみちに、人のをしりおはず、なにごとにつけても、たゞ世のまつりごとすなほに、たみやすからんことをつ

くりいださむ」と肝に銘じて（巻八・二三）  
一、兄と対照的に模範的な帝となつたのである。

このような善と悪との対比は、効果的に教訓を与える方法としてごく一般的なものであるが、『我身』にはさらに遡つた時点から、同様の傾向を窺うことができる。悲恋帝は多くの后妃が集つた父三条院の華やかな後宮を羨んでいたが、巻四に描かれたその実際は、中宮藤壺と寵妃後涼殿が反目したり、二人の女御が廷臣と密通するなど、かなり秩序の乱れた様子を呈していた。続く巻五では、後涼殿のもとに籠つて公事も怠りがちであつた三条院に対比する形で、「なに事もたゞすがすがととゝのへられつゝ、御くしなどかきくたさるゝまで、露ばかりほどもへず」という女帝の勤勉さを称え（一一三）、宮廷の風紀の刷新された様子を語る。巻六を除く巻四以降の巻々は、それぞれほ帝一代ずつを覆う形になつてゐるのだが、各巻の帝は交互に賢愚・明

暗を繰り返し、前代と対照的に描かれてゆくのである。そうした経緯の末に登場し、兄の不祥事を痛切に受けとめる今上帝の「よしなき色にあはじ」という自誠は、暗に読者に対して訴えかけるものでもあらう。

『源氏』等では人情を確認する方向で使われていた「李夫人」末尾の詩句を、教訓色を表に出して引用したのは『松浦宮』の偽跋だったが、本体の物語ではやはり恋の道に惑う男女を描いていた。おそらくその『松浦宮』を経由した『我身』は、「不如不遇傾城色」という誠めを遵守する、物語には珍しい性格の人物を造型した。そこには、『白氏文集』の諷諭詩を教訓の目的で用いることの多い時代の趨勢とも照応して、読者に対する訓誡の意図が込められていたのではなからうか。

### 三

好色の誠めを守る今上帝の人物像には、物

語の内部要請に留まらぬ対読者意識が窺えるようだが、それは当時の物語観と関わってくる問題である。いうまでもなく物語は狂言綺語観による批判の対象であったが、中でも糾弾されたのが、「唯語男女交会之道」（『源氏一品経』<sup>29</sup>）という点であった<sup>30</sup>。澄窓の作と伝えられる『源氏一品経』は、続いて物語の「秀逸」である『源氏物語』について、

「宗巧男女之芳談」と述べ、

男女重色之家貴賤事、艶之人、以之備口実、以之蓄心機、故深窓未嫁之女、見之偷動、懷春之思、冷席独臥之男、披之徒勞、思秋之心、

という弊害を難じている。また、『今鏡』の「作り物語の行方」でも、「男女の縁なることを、げにくと書き集めて、人の心に染めさせ、なさけをのみつくさむこと」（二九四）が非難されている。

しかし一方で『源氏』を擁護する『今鏡』は、人々に仏道を勧めるための方便と解釈す

ることによって、そうした批判を克服しようとした。

罪深きさまをも示して、人に仏の御名をもとなへさせ、とぶらひきこえむ人のために、道引給はしとなりぬべく、なさけある心ばへを知らせて、うき世に沈まむをも、よき道に引入、世のはかなきことを見せて、あしき道を出して、仏の道にすすむ方もなかるべきにあらず。

（二九五）  
その一例として、北の方に先立たれて世を捨てた宇治八宮や、父の遺言を守って独身を通じた大君などの例が挙げられている。

あるは別れをいたみて、優婆塞の戒を保ち、あるは女のいさぎよき道をまほりて、いさめごとにたがはず、この世をすこしなどし給へるも、人の見ならふ心もあるべし。

（同）  
申世の物語には悲恋遁世譚が流行するが、道心を抱きつつ逡巡していた薫や狭衣からさら

に一步進んで、愛する女君を失った主人公が出家を遂げ来世を願うという話型は、『仏道への勧めに意義を認めるこうした『源氏』への評価と、無関係ではなかっただろう。『我身』の場合、概して物語に宗教色は稀薄で、失恋を契機として菩提の道に進むような人物はいない。その代わりに、三条院後宮の乱脈や悲恋帝の不祥事の末に、好色を誡める教訓を遵守する今上帝のような人物が登場する。この場合仏門への勧奨という性格は弱いものの、やはり教訓の効用を求める物語観を反映して、悪例と対照的な模範例を示すことにより、『人のみならふ』ことを狙ったものと推察される。

さて、今上帝の帝徳として、身を慎み後宮の秩序を保ったことと常に並び称えられていたのが、より純粹に為政者としての美点、つまり政務に精勵し善政を布いたことである。初めに検討したように、それは抽象的な定型句を用いるに留まらず、実際に政治の場で取

り上げられ、望ましい政策として推奨されてきた事項を具体的に述べており、物語成立当時の実状から判断すれば到底実現の見込みはなかったにせよ、ある意味で現実感に富む理想を示していた。しかも伝統的な王朝物語のあり方にはそぐわない上に、物語の展開上要請されたわけでもない記事だった。このような聖代描写に期待されたものは、好色の誡めと同様の教訓性、とりわけ天皇に対する教訓的効用だったのではなからうか。好色を誡めるにあたって提示した悪例も模範例も全て帝を主体としていたことが、『我身』の特色として指摘できる。それは、漢の武帝を例に諷諫の意を託した『李夫人』の詩句を、原詩の趣旨に最も忠実な局面で引用したというばかりでなく、この物語が天皇に極めて近い場で成立したとこと、さらに、天皇をも読者の一人に想定し、天皇の教育書としての効用を志向していたことを示唆しているのではあるまいか。そしてそれはやはり、『源氏』を中心

とする物語享受のあり方と無関係でない。

『源氏』に求められた教訓は、仏教的なものから日常道徳や処世訓をはじめ、儒教的色合いを強めて、『三四代のあひだに君も臣もみあはせぬること』（為氏本『源氏古系図』）「君臣父子のたゞずまひ」（『原中最秘抄』下）のような君臣倫理から、さらに政治的な方面にまで及ぶ。その最も顕著な現れが、正応四（一二九一）年の年号のある『賦光源氏物語詩』の序文（以下、『詩序』と略称）である。そこでは、「深思好學之者」にとって『源氏』が「惇誨之基」であると謳い、

此物語之為レ体也。仁主四代之繼ニ天祚焉。鴻霈德遍。三公百僚之仰ニ風化一矣。鱗水契深。……凡厥儲貳之耀ニ銀榜一。博陸之惣ニ紫機一。後宮綺羅之佳人。維城盤石之宗子。是皆追ニ聖代聖治之法度一。莫レ不レ可ニ左史右史之書紀一。況又論ニ政理一。則紉ニ三綱五常之道一。

のごとく、帝王の徳が遍くゆきわたり諸臣も

畏服した聖代の有様を描き、政理を論じ儒教的道徳を説いた点を評価する。とりわけ、大学に学んで執政の地位に至った夕霧を、「任ニ補闕一而竭レ忠」「逢ニ明時一而底ニ天時之變理一。以文治レ世」と称揚するのが目立つ。主として臣下を対象としたもののようだが、為政者たる者の模範という価値を『源氏』に見出しているのである。

このような儒教的立場からの『源氏』贊の内、「追ニ聖代聖治之法度一」という評言は、『我身』の善政の数々をつぶさに語る箇所にも、そのままではめることができよう。『我身』の聖代描写は、『源氏』にこうした評価がなされる状況に反応し、それに倣って教誡の効用を持たせようとしたものなのではなからうか。ただしもちろん、『詩序』の『源氏』評価は偏っている上に過大であるし、『源氏』そのものにさほど詳しい政治関係の記述があるわけではない。女の語る物語として公の世界への言及を控えた『源氏』から『我身』へ

と直結するわけではなく、その間に『松浦宮』という、男性貴族が政治理想を憚りなく開陳した先蹤作』を経由することが必要だったと思われる。『我身』の精細な聖代描写は、物語の模範である『源氏』に後代の享受者が求めたものを、『松浦宮』の手法を取り入れることによって、より明瞭な形で実現したものであるといえよう。

また、『詩序』は別の箇所で、「舍人親王之華篇」「司馬子長之実録」、つまり『日本書紀』や『史記』といった和漢の正史に『源氏』をなぞらえ、『左史右史之書紀』にもかなうものと評価している。後世の古注釈のように『源氏』は史書と明言するまでには至らずとも、延喜准拠説は当時すでに形を成しつつあり、『源氏』と歴史との関わりの深さは十分認識されていたらしい。一般に歴史の書は教育の用途に供されがちだが、中でも帝王を中心に記録する正史は、帝王への鑑戒という役割が重んじられていた。『源氏』が男

性貴族はいうに及ばず、天皇の周辺でも公然ともてはやされる権威を帯びるには、その史書的人格、及びそれに付随する教誠性も与っていたと思われる。一方初めに述べたように、『我身』は代々の帝を物語展開の軸とする点において、歴史物語風の性格を最も顕著に表していた。七代にわたる皇位継承を追った末に、『源氏』も准拠したという延喜聖代を髣髴とさせるような明王による聖代にたどり着く物語は、十分に一箇の虚構の歴史たり得ているといえよう。そうした物語構想にも、『源氏』に求められた類の教誠性、特に天皇への意識が窺われるように思う。

ただし、政治的な方面にまで及んで教誠的価値を期待するような物語観は、必ずしも一般にゆきわたっていたわけではなく、かなり特殊な環境でこそ支配力を持つていたものである。繰り返し述べるように、『我身』の作者は、天皇の周辺、公的世界にも近い所の人物だったと推測されるが、そうした場で『源

氏』が享受される時には、物語に描かれた帝や聖代のあり方に、とりわけ関心が集まったのではなからうか。特に承久の乱後の鎌倉中期、王朝の復興を志した後嵯峨院の時代には、院の意向に應じて歌壇に政教的雰囲気浸透していたとされる。同様に後嵯峨院の周辺では、物語に対しても治世の具・教誡の手段と見なす風潮が生じていたのではないかと、『風葉和歌集』の性格を通して考えたことがある。

『風葉和歌集』は、後嵯峨院晩年の文永八（一二七一）年、院の後大宮院の下命で撰進された物語歌撰集である。厳密には私撰集ながら、『古今和歌集』を模した仮名序をはじめ、部立・配列など勅撰集に準じた体裁を持つ。ばかりでなく、後嵯峨院や大宮院の実家西園寺家への賛頌を寓意するような歌が多数採られており、勅撰集に近い政教的性格を備えている。そうした『風葉集』は、単に趣味的な物語愛好の産物ではなく、直前に編まれ

た勅撰集『続古今和歌集』と併せて、帝王による和歌集成事業の一環と認識されていた可能性がある。一般の和歌と同じく、物語の作中歌もまた政教的和歌観の中に取り込まれたわけだが、その背景には、当時の宮廷において、『源氏』をはじめとする物語自体に政教的価値を求める向きがあったという事情が想定されるのである。

その『風葉集』の序文は、物語に教誡の効用があることをはっきりと主張している。

世の中にある人なすことしげきものなれば、みるにもあかずきくにもあまることをさだかにその人とはなければどのちの世にいひつたへて、よきをしたひあしきをいましむるたよりになりぬばかりしるしおけるなりければ、ひたふるにそらごとといひはてむもことの心たがひぬべくや『源氏』螢巻の物語論をほとんど引き写した文章ながら、傍線部のような勸善懲惡論は、『よきさまに言ふとては、よき事のかきり選

り出でて、人に従はむとは、又あしきさまのめづらしき事をとり集めたる」(二十四三九)と述べるに留まる『源氏』にはなかつたもので、当時の歌壇における正当論であつた和歌教誡思想に極めて似通つてゐる。

また、『風葉集』に入集歌の多い物語を順に挙げる。と、上位三位は『源氏物語』『宇津保物語』『狭衣物語』という古典的大作が占め、続いて『風につれなき』『御垣が原』『いはでしのぶ』と、『無名草子』にも名が見えない作品が並び、『浜松中納言物語』『夜の寝覚』を上回つてゐる。中でも『御垣が原』は、現在断簡すら発見されていない散佚物語だが、『風葉集』では重い扱いをされており、時好になつた作品であつたかと察せられる。主人公は最多十首の詠者である帝と目され、帝と数名の女性との恋のいきさつを軸とする物語だつたらしい。そのほか少なくてとも四人の院の名を見るほか、四十一首の和歌の大半は、何らかの点で皇室の人々に関

係したものであり、行幸・御幸や賀宴といった晴れの行事の場面が多いなど、題名が示すように宮廷を主な舞台に展開してゐたようである。代々の帝とその周辺の人々を中心とした宮廷の年代記風に展開する『我身』と、作風が似通つてゐることに留意される。次に『風につれなき』『いはでしのぶ』は、いずれも完全に伝わるのは前半の一部のみという作品だが、前者では、四十五首中十二首と最も多くの歌を『風葉集』に残すのが、女主人公への恋実らず出家したと思しい吉野院である。『いはでしのぶ』の場合、主人公は臣下の男性だが、『源氏』や『狭衣』の衣鉢を継いで皇位の行方に少なからぬ関心を寄せた物語で、歴史物語風の規模と骨格を備えていたと思われる。『風葉集』には、行幸を仰いで法皇御賀における帝と院たちの唱和歌も採られてゐる(春下・六七・九)。また、『夜の寝覚』の次には、『女すすみ』『よその思ひ』と散佚物語が続く内、入集歌数第十位と



なる『よその思ひ』は、『御垣が原』と同じく帝を主人公とする恋物語だったと推定され、

やすみしる我がすべらぎにしたがはでたが誠をか神はうくべき（神祇・四四五）のごとく、大神宮が帝の祈願に応えて加護を約した歌などが見える。このように、『風葉集』に入集歌の多い物語を見ていくと、すでに古典としての権威を持っていた名作について、帝が中心人物となる物語や歴史物語風の構造を持った作品が目立つのである。

ところで、『我身』の成立年代を推定するにあたってほとんど唯一の確実な根拠が、『風葉集』に七首の作中歌が収められていることであつた。ただし、巻五以降の和歌が一首も採られておらず、かつ詠者名表記が巻四末までの官位に拠っていることから、『風葉集』が撰歌資料に用いたのは巻四までの本だったと判断される。このことを『我身』の成立と絡めて説明する見解がいくつか出されている

が、主な説は次の三つに要約できる。

イ まず四巻で完結した本が『風葉集』撰集に用いられ、後にそれを書き継いで八巻本ができた。

ロ まず巻四までの未完成本が『風葉集』撰集に用いられ、後に巻八まで書き継がれた。

ハ 文永八年以前に巻八まで完結していたが、『風葉集』撰者は巻四までの欠本しか入手できなかった。

イとロの違いは、巻四までで物語がいったん完結していたかどうかという点だが、この物語は当初からかなり明確な構想をもって巻八の大団円を目指していたと思われる、女帝の即位を告げて終わる巻四末に完結性を認めることは難しい。またハについても、巻八まで完成していたにも関わらず、『風葉集』撰者が欠本しか入手できなかった事情を積極的に支持する根拠は、特になさそうである。よって最も考えやすく妥当なのは、ロというこ

とになろう。『風葉集』編纂と同時並行的に執筆され、撰集資料に供されたのが巻四完了の時点だったとすれば、構成の緊密性から全体が比較的短期間に書き上げられたという見込みにも抵触しない。

つまり『我身』は、『風葉集』と相前後して、その撰集を中途に挟む形で書き進められていったものと思しい。『風葉集』がどのような過程を踏んで編纂されたのか、具体的な状況は明らかでないが、治天の君たる後嵯峨院の后にして後深草・龜山二代の母后という高貴な地位にある大宮院の下命により、古今の数しれぬ物語歌を集大成しようとする大規模な事業だったことは確かである。仙洞や内裏にもその噂は達したであろうし、あるいは撰集作業自体に巻き込まれていたかもしれない。『我身』作者がその模様を身近に見聞していた可能性は大きい。そして、物語歌の撰集が勅撰集に準ずる権威と意気込みで行われつつある雰囲気から、何らかの刺激を受けた

ことも予想されよう。

『我身』全編は、年立上、巻三・巻四間の十七年の空白期間をもって前半・後半に分けることができるが、その内前半の巻一・二は、扱う年数が少ない。上に、物語は我身姫君の数奇な運命や中納言と女三宮の密通などを中心に展開してゆき、帝やその治世をさほど表立てることはない。帝を軸とした歴史物語的作風にせよ教誡性にせよ、とりわけ顕著になるのは、各巻がほぼ帝一代に充当し、それぞれの帝の賢愚・明暗が対照的に描き分けられてゆく後半部である。大局的に見れば物語の構想は前半から後半へと一貫していると思われるが、筆法に若干の変化が生じていることは否定できないだろう。

この変化は、並行して進んでいたと思しい『風葉集』撰集事業と無関係だったのだろうか。勅撰集に匹敵する権威をもって撰進されつつある物語歌撰集、そこでは序文において物語の教誡的効用が明言され、当代物語の中では

『御垣が原』のように帝の存在感の大きい作品が、古典的名作について尊重されていた。『我身』作者がその撰集事業から遠からぬ場にいたとすれば、そのように政教的物語観の昂揚した気配を十分察知していたであろう。自作の物語の享受圏としても、同様の雰囲気、満たされたごく身近な場、具体的には宮廷の周辺を予想していたはずである。その中心かつ最高の存在である天皇を読者として意識した結果が、帝を軸にした物語展開であり、天皇に向けられた教誡性だったのではなからうか。そしてそうした傾向が後半顕著になるのは、同時期に成立しつつあった『風葉集』に促されるところが大きかったのではなからうか。

#### 四

公的な政治向きの話題から距離を置くことを原則とする王朝物語の中で、『我身』の今

上帝の聖代描写は、異例なほど長大・詳細で具体性に富んでいた。それは、作者が宮廷のしかも天皇にごく近い立場の人であって、女性ながらそうした事柄に通じていたことを示すと同時に、物語に教誡性を求める風潮、特に『風葉集』に結晶した宮廷周辺の政教的雰囲気、に敏感に反応して、好色の誡めと併せて帝王への教訓という思惑のもとになされたものであろう。『我身』の成立時期も正確に定められないため、『風葉集』との直接の交渉については断定できないが、少なくとも両者が共通する地盤から産み出されたものであることは、首肯されるのではなからうか。ただしもちろん、教訓を与えることがこの物語の本意だったわけではあるまい。今井源衛氏が主題の第一に「男女の不思議なつながり」というもの、特に非条理的な恋愛、あるいは性愛の諸相というものを『』を挙げておられるように、男女の織りなす恋物語の顛末を描くことに最も作者の意が尽くされていること

は、他の多くの物語と変わらない。むしろ五組を数える密通事件や宮廷奥深くにおける乱脈ぶりなど、頽廃的という評価もある程度やむを得ない要素を含んでいる作品だったといえよう。そして悲劇に終わった悲恋帝の場合、はともかく、廷臣と后妃との間に生まれた不義の娘たちが真相を秘したまま后となり、天皇家と摂関家の結合を保証して大団円に寄与するという結末を見れば、「よしなき色にあはじ」という好色の誠めがどこまで説得力を持つかは疑問である。今上帝の行った様々な政策の詳述にしても、物語の展開の中に有機的に位置付けられるものではなく、いかにも取って付けたような趣を呈していた。詮ずるところ、教訓的意義は建前の域を出るものではない。

その意味で『我身』には、作者の周辺で支配的だった物語観に順応し、悪くいえば読者―それも権威と権力を持つ読者―におもねったという一面があることを否定できない。し

かし、物語の作者が多かれ少なかれ読者の受けを意識するのは当然であり、特に作品の主な享受圏が作者のごく近辺に限られていた当時のこと、とりわけ敏感になったとしても致し方ないだろう。しかも物語の領袖たる『源氏物語』でさえ、文芸的価値のみで正当化されるわけにはいかない時代であり、宮廷という場であった。

『我身』の作者も、『源氏』に深く親しんだ一読者であったことは間違いない。『ただ一言葉にても、末の世にとどまるばかりのふしを書きとどむべき』(二七六)という切望から紫式部を羨望していた『無名草子』の一女房と同じく、『源氏』のようにすぐれた物語を自ら綴りたいという願望が、執筆動機の少なからぬ部分を占めていたと思われる。そうした作者が、『源氏』評価に代表される周囲の物語観を顧慮したとしても無理はなからう。それを迎合と否定的に裁断するばかりでなく、自らものした物語を、高貴な場で至尊

の読者にも公然と受け入れられている『源氏』と同じ水準にまで引き上げようとする熱意のほどをも、酌み取っておきたい。

『風葉和歌集』の撰集という、既存の物語を集大成するような試みがなされたこの時代、先行作品の厚い層を前にして、新しい物語創作への意欲もお衰えていなかった。そうした状況下において、先行物語の表現・趣向の模倣とはまた違った意味で、享受のあり方が制作面に大きく作用していたことを確認した。

〈注〉

(1) 底本「いと」脱。

(2) 今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』

(桜楓社、一九八三年。以下、今井注と略称)は、「みちく」の誤写かとする。

(3) 『年中行事抄』三月所引の逸文に、「公卿正員者。太政大臣左右大臣各一人。大納

言二人。中納言三人。参議八人。合十六人。」とある。

(4) 漢語「興廃繼絶」(班固「兩都賦」序)

などに由来する基本的な政治理念で、

思<sub>レ</sub>繼<sub>ニ</sub>既絶之風<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>興<sub>ニ</sub>久廢之道<sub>一</sub>

(『古今和歌集』真名序)

帝の御心ばへ、絶へたることをつぎ、

古きあとを興さむとおほしめせり。

(『今鏡』春のしらべ・六一)

たえたるあとをつぎ、廢れたる道をおこし、……

(『平治物語』巻上・一四八)

等、用例は多い。

(5) 引用は『今鏡本文及び総索引』(笠間書院、一九八四年)による。

(6) 『今鏡』の他、『玉葉』『愚管抄』などにも所見。

(7) その他、『今鏡』『愚管抄』などにも所見。

(8) 引用は『玉葉』(国書刊行会、一九〇六

（七年）による。

（9）『本朝統文粹』卷二に所収。

（10）市田弘昭『平安後期の荘園整理令―全国令の発令契機を中心に―』（『史学研究』第百五十三号、一九八一年九月）によれば、平安後期の荘園整理令の多くは内裏造営を契機として発令されたという。

（11）徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』（有精堂、一九八〇年。以下、徳満注と略称）は、作者の条件の一つに、「宮廷の儀式や慣例を熟知し、宮廷生活の経験を有する人」を挙げる。

（12）正確には天皇もしくは治天の君である上皇というべきだろうが、本稿では便宜上、両者の意を含めて「天皇」を用いることがある。同様に、「宮廷」も内裏及び仙洞を指すものとする。

（13）第六章参照。

（14）第三章参照。

（15）『御料地史稿』（帝室林野局、一九三七

年）参照。

（16）久木幸男『日本古代学校の研究』（玉川大学出版部、一九九〇年）。

（17）第二章において、『我身』の皇位継承の次第が史上の摂関政治全盛期の皇統譜をなそうように形成されており、その場合今上帝は後三条天皇に対応することを論じた。治績の点でも、①大極殿造営②荘園整理令④文人の登用などは後三条に通うものであり、醍醐ばかりでなく、延喜・天曆について称えられる（前掲『神皇正統記』など）後三条の治世も加味されている可能性は高い。

（18）「ひとりま」について、徳満注は「火取り間」または「独り間」、あるいは「ひとり間」の誤写かとし、今井注は『今昔物語集』に用例の見える「独りま」（ただ一人で、の意）とするが、「ただ一人」では「ささめく」という動作が落ち着かない。現存する三種の伝本に本文異同はないが、ある

いはもと「ひとま（人間）」とあったものが。

(19) 第六章参照。

(20) 「傾城」という漢語をBのように「なにがし」とほかす例は、他にも見られる。たとえば、

すこしそむき給へるは、なにがしのくらゐにもえやとぞ、つみふかくまもらるゝ。

(巻三・七五)

とある「なにがし」は、『狭衣物語』に、けざやかに見えさせ給へる御髪のかゝり、つらつきなどは、等覚の位に定まるとも、見たてまつらずなりなん事は、口惜しかるべきを、……

(巻四・四二八)

とあるのを踏まえ、「等覚」という仏教語を臘化したものであるう。

(21) 『浅茅が露』『風につれなき』『雫に濁る』など。

(22) 『夜の寝覚』『いはでしのぶ』など。

(23) 太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』下(勉誠社、一九九七年)。

(24) 引用は古典文庫による。

(25) 底本「日つぎの」。

(26) 第二章参照。

(27) 引用は増補国語国文学研究史大成による。

(28) 以下、特に『源氏物語』への評価については、重松信弘『増補新攷源氏物語研究史』

(風間書房、一九八〇年)を参照した。

(29) 「艶」のあて字と思われる。

(30) 仏教思想に裏付けられた好色の誠めは、巻六において顕著な形で現れる。第六章参照。

(31) 底本「臣」は欠字となっているが、ほぼ同一の文章を載せる『源氏大鏡』の類により補った。

(32) 樋口芳麻呂氏は、『松浦宮』に伏見院・後光厳院の宸筆と伝えられる写本が伝存することから、「読者が女性だけでなく、貴

族にまで広がって、治政の上からも有用でおもしろいと考えて書写され、読まれたことを意味するのではなからうか」（新編全集解説）と推測されている。定家自身にその意図があったかということは別問題として、『我身』の性格を考える上で示唆的であろう。

(33) 阿部秋生『源氏物語の物語論』（岩波書店、一九八五年）。

(34) 佐藤恒雄「後嵯峨院の時代とその歌壇」（『国語と国文学』第五十四巻第五号、一九七七年五月）。

(35) 拙稿『風葉和歌集』の政教性（上）（下）——物語享受の「様相——」（『国語国文』第六十七巻第九・十号、一九九八年九・十月）。

(36) 樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』（ひたく書房、一九八二年）・米田明美『風葉和歌集』の構造に関する研究（笠間書院、一九九六年）。

(37) 現存する『風葉集』は巻十九・巻二十を欠き、他にも脱落があるので、厳密な順位ではない。

(38) 『御垣が原』及び後出の『よその思ひ』の物語内容の復元は、小木喬『散佚物語の研究』（笠間書院、一九七三年）を参照した。また、新美哲彦『散佚物語』御垣が原——その特質と成立圏——（『平安朝文学研究』復刊第八号、一九九九年十一月）も、帝と中宮が主人公性を持つこと、舞台が宮中であることを『御垣が原』の特質として挙げ、さらにその特質を後嵯峨院時代の政教性と絡めて論じている。

(39) 横溝博『風葉和歌集』入集歌数上位の鎌倉時代物語の位相——散逸『御垣が原』物語を切り口にして——（『平安朝文学研究』復刊第八号、一九九九年十一月）は、『風』につれなき『御垣が原』『いはでしのぶ』の三作品の影響関係を推定し、『御垣が原』と『我身』との類似についても言及してい



る。

(40) 第三章で指摘したように、『石清水物語』など、『無名草子』以降『風葉和歌集』以前の成立と目される物語の中には、定型的な表現を用いて帝徳を賛美する文章が比較的よく現れるという現象もある。

(41) 小木喬『鎌倉時代物語の研究』(東宝書房、一九六一年)。

(42) 金子武雄『物語文学の研究』(笠間書院、一九七四年)。以下、金子氏の所説は同書による。

(43) 同前。今井注も「八巻まとめて文永八年以前に成った」という立場である。

(44) 金子氏の詳論がある。また徳満注・今井注も、この物語が全体として緊密な構成を持っていることを認め、全巻は短期間の内に完成したのであろうと推測している。

(45) 金子氏は、後半四巻が著しく頽廃的であるため、倫理的顧慮から完本の提出が差し控えられたという理由付けをされている

が、巻六・巻七あたりはともかく、女帝の聖代を描く巻五が特に頽廃的とは思えない。

(46) 物語全体が七代四十五年にわたる内、巻三までで二代、年数にして三年ほどを覆うに過ぎない。

(47) 『我身』の後半部が巻四からはじまることと、巻四までが『風葉集』に採られていることの間には若干のずれがあるが、『我身』の執筆が『風葉集』の撰集作業と同時に並行的に進み、かつ前半・後半の執筆時期にさほどの断絶がなかったとすれば、両者の区切れが一致せずとも、『風葉集』が『我身』に影響を及ぼしたと想定することは許されよう。

(48) 今井注の解題。

第五章 卷六の位置付けについて

『我身にたどる姫君』全八巻の内、内容や用語に際立った特異性を持つ巻六は早くから注目され、その成立についても論じられてきた。まず別作者の疑いが呈された<sup>三</sup>が、金子武雄氏<sup>四</sup>や市古貞次氏<sup>五</sup>は同一作者の立場を取り、ただし巻六の着想・執筆は、巻八までのいわゆる本系の物語を書き上げた後である<sup>六</sup>と推測された。一方今井源衛氏は、現行巻序通りの執筆を主張されている<sup>七</sup>。

これらの成立論の内、さほど客観的な根拠を持たない別筆説には容易に従いがたいであろう。むしろ、しばしば異質さを指摘される巻六の素材の中にも、女ばかりの空間（前斎宮家―巻五の女帝の宮廷）、好色な女性（前斎宮―巻三の女四宮）、個性的な女房たちの活躍など、他巻と傾向を同じくするものを見

出すことができる<sup>八</sup>。また、用語に關しても、次に挙げる諸例のように、他の仮名散文作品には用例の少ない特徴的な表現ながら、他巻と共有するものをいくつか指摘でき、かえって同一作者を示唆するようである。

○心すみやく<sup>九</sup>

うつりがのよのつねならぬを、まづとりてみたまふに、すゞるに御心すみやくて、

（巻六・一七一）

よべの少将の君、なにとなくこゝろすみやくて、あやしう思ひゐたるに、……

（巻八・二三九）

○かげかたなし<sup>一〇</sup>

されど、その人も見えす、かげかたもなくて日ごろになりぬ。（巻六・一七五）

むかしまぎれありき給し所く<sup>一一</sup>のなかに、かげかたなくうせなりて、はかくしういひあらがふ人なき、……

（巻二・三九）

大がく、くはんがくなどいひて、かげか

たなかりし事、たゞむかしばかりにおこしたてられて、……（巻八・二四一）

○にくきものと。

おりしも、にくきものと、四位少将、右兵衛のすけなどうちつれて、……

（巻六・一七七）

日ついでなどとはせ給ふに、けふしもにくき物と、さはり。なかりけり。

（巻七・二二三）

○ぬけあしふみて。

をのづから心えけるにや、みなぬけあしふみてにげにけり。（巻六・一八二）

中つかさの君は、ひとへばかりぬぎすべして、ぬけあしふみていでぬ。

（巻三・八三）

同筆を前提として執筆順序の問題に移ると、金子・市古両氏の後補説は、巻六の物語世界の異質さを主な根拠としており、やや印象論に傾く趣が否めなかった。それに対し今井氏は、巻六の記述を前後の巻々と詳細に突

き合わせた結果、「巻六は全体としては、構想上かなりうまく他巻に適合している」ことを論証されたのである。しかし、「いずれにせよ決定的な外証の得られないまま、現行巻序をむやみに疑うことは避けられているのが現状であろう。

成立論の一方で、巻六の性格そのものを取り上げた論考も少なくない。その際、巻六を半ば独立した挿話として扱う立場と、物語全体の中における位置付けを探る立場とが存在する。そして後者の場合、大抵論じられるのは直前の巻五との関係であった。巻六が時間的に巻五に並行し、巻六の中心人物前斎宮が巻五の主人公たる女帝と対照されている以上、そうした観点は至極当然であるし、正鵠を得ているだろう。しかし、現行の巻序、あるいは巻五の「ならび」<sup>三</sup>という把握から、巻五との関係のみにとらわれては、見落とすものも多いのではないか。後述するように、巻六ははるか下って巻八とも呼応しているの

である。

本稿の目的は、卷八との関係を検討することによって、卷六が物語全体の中に占めている位置を見直すことにある。それは成立過程論と無関係の問題ではないが、当面物語の構造の問題として考えることにする。

一

卷六で活躍する前斎宮とその女房たちは、卷五以前には片鱗も姿を見せていなかったし、続く卷七・卷八でも、後に触れる一箇所を除いて登場することはない。卷六の物語は、本系の物語に全く影響を与えないといつてよい。この様態は、ちょうど『源氏物語』のいわゆる紫上系・玉鬘系諸巻の關係に似ている。また、卷六卷末には長大な後日談が付されており、前斎宮をめぐる物語として一卷で完結しているように見える。その上に内容・用語上の特異性も重なって、独立した別伝の

巻と見なされやすく、成立の問題も生じてきたのであった。もつとも、独立とはいっても、時間的にはほぼ並行する卷五の内容を踏まえていることは明らかなので、卷五の並びと位置付けられることになる。

しかし、卷六の完結性には、卷五をもってしても補えない綻びが、僅かながら存在する。卷五の時間からはみ出した、卷末の後日談の部分である。初めに前斎宮家の女房中将の君の動向が語られ、「小宰相のいでられしにぞ、「たに、は春も」など、またうちあげられしかど」（一九二）の辺りから小宰相の君に転じる。小宰相は、かつて中将に代わって前斎宮の寵を受けるようになった女房である。これ以前に、次第に新大夫の君が勢力を伸ばしつつあるものの、小宰相も完全に失寵したわけではない由が語られていた。しかし、その小宰相が何故にまたどこへ出て行ったのか、これだけではわからない。

続いて、

A 世にはとくちりたる事もなくて、いう

にありつきて、時々などは車たてながら  
まいりて、みまいらす。花びら、ほうも  
ちは、さぶらふ人のなみに、うるさから  
ぬおりはまいらせ、又おはりのちよくし  
のいとなど、おほからかにみならひ給へ  
ればなど、つかみつかはせば、ひとへが  
さねもをらせ、又うちわたりとて、はづ  
さずこひせめさせたまへば、五せちのく  
しもとめてまいらせ、宮す所のうつくし  
き御ぞまいらせなどすれば、きたなき人  
ならばこそは、「あなうつくし。わらは  
きむ」などよろこばせ給ふ。いとあらま  
ほしき御なかなり。（一九一―二）  
とあることから、小宰相が「うちわたり」の  
「宮す所」に勤めはじめたらしいと察せられ  
る。しかし、その「宮す所」の素性は依然不  
明である。にも関わらず、いかにも既知の事  
柄であるかのように語られている。

暫くおいて、再び小宰相のその後について

触れるところがある。

B 小宰相は、さしづなどおもしろからね  
ど、しのびやかなるかくれがに、又いと  
よきさとまうけていである。おとこの家  
あるじもほしうせねば、いでもかはらず、  
弁の心もありがたく、いゑのうちをとな  
くありつきてぞ、おひはつるまで過にけ  
る。（一九二）

ここでもまた、「弁」なる人物が謎である。  
「弁内侍」「頭弁」など、「弁」と呼び得る  
者はすでに幾人が登場しているが、いずれも  
小宰相との接点は皆無であった。  
もつとも、この人物については、続く「と  
をなか」（前斎宮家の格子番）の後日談の中  
で明らかになる。

C まことや、御かうしまいりしとをなか  
は、……あるべかしき心さへつきて、い  
もうとたづねまいりたりし時、たれとも  
しらぬにいであひて、ゑみむかひたりし  
をよすがにて、蔵人弁に申文もていきて、

なくく、いひければ、心ばへよき人にて、  
そうしとをして、しなの、権のかみにさ  
へなりにける。おもふことなさかぎりも  
なくて、小宰相どの、まいられたる車よ  
せによりて、弁のとの、御心なさけ、な  
くく、よろこびけるだに、まことにめで  
たきに、…… (一九二、三)

巻六がはじまってまもなくの頃、小宰相の同  
母兄という「兵衛佐」なる人物が、長年噂に  
聞くばかりであつた妹に会うため、前斎宮邸  
を訪れていた。そこでは「とをなか」の応対  
は語られていなかったものの、Cを読めば、  
その兵衛佐が今では「藏人弁」となり、Bの  
ように「弁」と呼ばれているのであろうと推  
察され、一応疑問は解ける。しかし、任官記  
事もなしに突然呼称が「弁」と変わるのは、  
やはり不自然に感じられる。

もっとも、未述の事柄を既成事実として記  
すことは、物語にまみえられる叙法である。  
『我身』においても、いつの間にか人物の身

分・官位の変化している例が、他にないわけ  
ではない。たとえば、巻八で今上帝に入内し  
た忍草姫君は、立后記事のないまま、数年後  
には「中宮」と呼ばれており、それに伴って、  
巻七まで「中宮」であつた後涼殿(三条院妃)  
は、「皇后宮」として久々に登場する。しか  
しいずれの場合も、前後の文脈をたどれば混  
乱・誤認する恐れのないように記されてい  
る。また、一の人を父に持つ忍草姫君が、有  
力な競争相手のいない後宮に入内した以上、  
続く立后は、当時の物語享受層にとっては常  
識の範囲に属していただろう。それに連動し  
て、後涼殿中宮の位が移行することも当然で  
ある。その他、巻四・巻五の「関白殿」が巻  
七の幼帝の御代では「摂政殿」となる、とい  
った事例もあるが、仮に任官記事の書き落と  
しだったとしても、さほどの違和感なしに承  
承することができよう。

しかし、兵衛佐から藏人弁への転任は、出  
世コースの一つではあるが、必ずしも自明で

お定まりの昇進というわけではない。Cで判明するにしても若干隔たっているし、そこでも既成事実として扱われているので、やはりBの記述に何がしかの不自然さは拭えない。

また、兵衛佐はこれ以前に、前齋宮家の不作法さに閉口して、「たゞふみなどばかりそをこする」(一七一)という状態になったまま、長く姿を消していた。Bの「弁の心もありがたく」が、彼が妹を生涯親身に後見したことをいうものとすれば、やや飛躍があるようにも感じられる。おそらく小宰相が前齋宮家を退いたことと関係するのだろうが、その辺りの事情はやはり曖昧である。

巻六はそのまま幕を閉じ、巻七以降、それとは全く無関係な本系の物語に立ち戻るのだが、巻八末、物語の大尾に至って、再び小宰相兄妹が登場する。

D この宮す所の御かたには、右の大殿の御めのとのめいなりける、前齋宮にさぶ

らひけるぞ、……いひよりてまいりにければ、いとめやすく思ふやうなる人にて、この御方の事、おとなしくいひをきて、まいる人にあひなどしける。はらひとつなる兵衛のすけといひしも、ふたへをりものはおそろしうて、がくもんをのみ、よるひるしければ、いみじうまめなるおほやけ人にて、この御時は、とりわきかずまへおほしめしたる藏人弁とて、ちゝの中納言よりも世おほえことなれば、いもうとのためも、いとこまかに心ざしありてなん、あはれにおもひかはしたりける。(二四七)

「この宮す所」とは、東宮に入内した右大臣の娘(初草姫君)を指す。前齋宮に仕えていたという「右の大殿の御めのとのめい」は、「兵衛のすけ」の同母妹だから、小宰相に違いない。小宰相が東宮御息所に出仕し、兵衛佐は刻苦勉勵の末、今上帝に信任されて藏人弁となったというわけである。卑官の頃は、

「たゞいま思ひをきてんに、なにばかりの心ざしをかすべきならねば」(巻六・一六七)と、満足に妹の世話もできなかった兵衛佐だが、今や地位・声望を得、小宰相もまともな主人に仕えはじめたため、心おきなく後見しているのである。引用部分に続いて、前斎宮が小宰相の退出を悲しみながらも許したところ、小宰相が旧主とも交流を保ちつつ御息所方で重んじられたことが述べられ、巻八は終結する。

これらの内容自体は巻六の後目談AとCと全く齟齬を来さず、むしろ先に見た不審点がここで晴らされることになるのだが、問題はその語り口にある。すでに巻六で、小宰相が前斎宮邸を退いて「宮す所」に仕えていると記し、その兄を「蔵人弁」と呼んでいたにも関わらず、それには全く素知らぬ顔で、小宰相が御息所のもとに参じた経緯や兵衛佐の昇進の事情を、いかにも初出の情報であるかのごとく述べているのである。

Dの叙述は、AとCでうっかり書き漏らしたことを、説明不足だったことを補ったという体のものではない。また、巻六の後目談は、「人は心もてよくもあしくもなるものかな、又所がらに、こゝろはつかふべき物とも御らんぜよ」(一九二)という、勧善懲惡的な教訓を建前としていた。だからこそ善人側の小宰相兄妹には、よき果報、つまり宮廷女房という境遇、あるいは蔵人弁という頭職が用意されたのである。その趣旨に従うならば、二人の栄誉を直接的に語るD以下の内容を、巻六で不注意に書き漏らしたとは考えがたい。とすれば、巻六と巻八の巻末部にそれぞれ位置する後目談の前後関係を、改めて見直す必要がある。

## 二

Dについて、巻序執筆説の立場からは、AとCの時点で「既に巻八末までの構想が出来



上っていたこととなろう」という解釈がなされている。なるほどこの物語は、年立・系図や官位変動における矛盾が比較的少ないなど、構想設計の周到さに定評がある。よって、卷六末執筆時点ですでに、卷八末における小宰相兄妹の処置を予定していた可能性は考えられる。それにしても、小宰相の出仕先にせよ兵衛佐の昇進にせよ、卷六で一言触れておいても差し支えなかったのではという不審は残る。とすると、卷六の唐突な記述は、作者の錯誤による先走り、あるいは意識的な先取りということになるだろうか。

前者の場合、やや似た事例として、『源氏』の並びの巻の一つ蓬生巻が挙げられる。しばしば後記補入説の論拠とされるところだが、まだ兵部卿であるはずの紫上の父宮が、多くの伝本で「式部卿の宮」と呼ばれているのである。もつともこちらは年立上の問題であり、ごくさりげない言及なので、「作者の不注意な誤り」に帰すことも可能である。しかし

AとCの場合、その内容自体が小宰相や兵衛佐の境遇の変化を必須の前提としており、つい筆が滑ったという程度のものではなからう。構想力の確かさが評価されるならばなおさら、先々の物語の展開を十分見越していながら、かかる前後関係の混乱を不注意に犯す恐れは少ないように思われる。

では、作者が何らかの効果をねらって、意図的にこのような記述をなしたのであるのか。たとえば、やはり『源氏』の並びの巻、紅梅巻・竹河巻は、前後の巻々では宰相中將である薫の中納言時代の出来事を語り、後の橋姫巻で紹介される「八の宮の姫君」「宇治の姫君」の存在を仄めかしている。後記説や別作者説が生じる所以の一つだが、一方、現行巻序のまま、宇治十帖の伏線・予告としての機能を認める見解もある。両巻の成立の実態はともあれ、中世の物語としては珍しく並びの巻を設定するほどの『我身』であるから、このような『源氏』の例に倣ったと考えられ

なくもない。

しかし、AとCとDとを読み較べた時、次に展開する物語への期待を誘うという伏線の効果を認めることは困難であろう。人物も所詮脇役に過ぎない上に、話題はごく単純な境遇の変化であつて、ストーリーとしてそれ以上発展するものではない。しかもAとCの書きぶりは、仄めかしの度合いを越えていよう。結果として何らかの表現効果を上げるところか、巻六の内部に不安定要素を残しただけに終わった感がある。

巻六後記補入説に従えば、本系の物語攔筆後に巻六が執筆された際、「巻六に照応すべき簡単な記事が巻八の末尾に書き添えられた」ということになる。巻六執筆の途中、AとCに先立ってD以下を書き加えたのだとすれば、叙述の前後関係は不自然でない。ちなみに巻序執筆説の場合でも、巻六の成立を二段階に分け、巻五―巻六本体部分―巻七―巻八―巻六後日談という執筆順序を想定すれ

ば、同様の考え方を適用することができる<sup>(16)</sup>。しかし、確かにDとAとCという執筆順序により、叙述の展開としては矛盾なく理解されるにしても、何故このように前後関係の逆転した記述をなしたのか、その点についての説明にはならないだろう。

巻八末に「書き添えられた」前斎官家関係の後日談の意義を考えるに、巻六の世界を本系の物語の中に組み込むという働きが、第一に挙げられよう。ただでさえ異質さの際立つ巻六だが、後補であるならばなおさらその位置は不安定にならざるを得ない。本系の物語の流れからすれば、最悪の場合、全く無視されてしまう恐れもある。巻六抜きには理解不可能なD以下の後日談は、巻六を本系の物語に引き寄せ、その脱落を防ぐであろう。しかし、それだけの意図であれば、このように読者を混乱に陥れかねない記述をなす必然性はない。要するに、巻六末と巻八末との入り組んだ関係は、執筆順序の如何によって

解決される問題ではないのである。よって以下、成立過程論から離れて考察を進めたい。

AとCとDとの照応は、単に巻八末が巻六を踏まえているばかりではなく、巻六の側でも巻八末を必要とすることを指示している。巻六が年立上並行する巻五と密接な関係にあることは改めていうまでもないのだが、その巻六には、AとC以外にも、

さかの女院の御事いできにしかば、なべての世、まして思ひしめりたるにも、

(一七一)

齋宮は、御国ゆづりにうちづき、あさましかりし夢のよを、

(一九〇)

のように、やや説明不足で、そのみでは意味を明確にしがたい記述が見受けられる。前者は女帝の母嵯峨女院の逝去による諒闇、後者は女帝の譲位直後の崩御という、それぞれ巻五で起こった出来事を指している。これらの行文は、当然巻五の存在を前提とした読みを期待しているはずである。

「小宰相のいでられし」は、この二例と同じく、助動詞「き」でもって既成事実として表現されていた。そしてその詳しい事情は、これ以前の物語には言及がなく、かといって全く不明なのでもなく、巻八末でほぼ過不足なく語られるのである。とすれば、巻六末の小宰相兄妹の後日談もやはり、巻八末の後日談より後に、その内容を踏まえて読まれることを求めているのではなからうか。

それは一つには、年立を明らかにするためのものである。小宰相兄妹をはじめ前齋宮家周辺の人々の余生は、巻五末の女帝崩御以後、巻七の悲恋帝の御代を跨ぎ、今上帝の統治する巻八、その最後に語られた東宮御息所の入内をも越えて継続する。つまり、巻六末は物語全編の中で最も遅い時間を語っているのだが、AとCとDとの逆転的な記述がその時間関係を指定するという機能は、確かに認められよう。

しかし、『源氏』の並びの巻でも、年立の

上で前後の巻々と入り組む事例は珍しくないが、先述した紅梅・竹河両巻を除けば、大抵の場合、現行巻序通りに読み進めても特に違和感を感じさせなかった。それに比して、巻六末を読むために巻八末が要請されるという『我身』の様態は、年立の錯綜という観点からでは説明しきれない特異な性質を持っている。片や並びの巻、片や最終巻の掉尾と、それそれ物語の中で特徴的な位置を占めるだけに、両者の関係は物語の構造の面から再考する余地があるように思われる。

### 三

すでに今井氏は、巻六の成立を検討される中で、巻八の巻末部にも言及されていた。つまり、その後目談が追加補筆であるという金子説に従えば、原初形態での巻八は、出家した後涼殿の余生を、

五 をのといふわたりに、心ふかくおぼし

めしまうけて、うつろはせ給にしかば、  
まして分まいる人もまれに、こゝろほそ  
き御すまひなり。(二四七)  
と語って閉じられていたことになるが、  
これでは、八巻に亘る大長篇の大尾とし  
ては、甚だもの足りない形のように感じ  
られる。少くとも文末は「……けり」で  
終りそうなものであるが、さりとて、ま  
た単にただ「けり」の結びに変えるだけ  
では、大尾としては不充分のように見え  
る。

という指摘である。

こうした印象は、確かに否定できないよう  
に思われる。周知のように、物語の典型的な  
大尾は、『竹取物語』の「……とぞ、言ひつた  
へたる」(七六)をはじめとして、「……とぞ、  
……とかや」等、伝聞の形を取る。また、

次の巻に、女大饗の有様、大法会のこと  
はあめりき。「季英の弁の、娘に琴教へ  
給ふことなどの、これ一つにては多かめ

れば、中より分けたるなめり」と、本にこそ待るめれ。

(『宇津保物語』<sup>110</sup> 楼の上下・九四三)

に見られるように、架空の続巻や原本の存在を仄めかすものも多い。こうした定型句を用いずとも、

世とともにものをのみおぼして過ぎたまひぬるこそ、「いかなりける前の世の契りにか」とこそ見えたまへれ。

(『流布本系『狭衣物語』<sup>111</sup> 巻四・三七三)

のように、作中人物への評言を述べるなど、何らかの形で語り手・書き手が顔を出す草子地風の文が通例である。

その他、『有明の別』は、「……すぎさせ給にし御ためとも」(巻三・四四六)と、会話が途中で断ち切られる形で終わっており、後続部分の脱落でなければ、『源氏』のいくつかの巻末に見られた中断形<sup>112</sup>や、故意に損傷を仮構したらしい『松浦宮物語』にも通う技巧であつたかもしれない。いずれにせよ、中

古から中世の物語を通じて、ほぼ例外なく締め括りの意識が表現の上に現れているのを認めることができる。

また、内容的に見ても、物語の掉尾を飾るにふさわしい話題・対象を選ぶのが通常である。主人公たちの幸福・栄華を語り、大団円の内に収めるのが最も典型的だが、特に継子譚などでは、そこに勧善懲悪に基づいた教訓色が加味される。一方、『源氏物語』夢浮橋巻が女君を失った男主人公の懊悩する姿で結ばれて以来、同様の趣向が『浜松中納言物語』『狭衣物語』等に引き継がれる。そして中世には、その延長上に生じたと思しい悲恋遁世譚が盛行し、宗教性を帯びた結末が増えてゆくことになる。

試みに、『我身』同様、『無名草子』以降『風葉和歌集』以前の成立と推定される諸物語の終結部を見てみよう。末巻のみ残る『むぐらの宿』は、主人公の悶死の後、女君の栄華を「めでたし」を連発して称え、

のこりの五巻などにかき□□たるとかや。よろづは、かやうにありけるこそめでたく、御さいわいありがたく侍れ、とぞ。

(二八二)

とだめ押しして終わる。同じく末尾部分のみの残欠本『雫に濁る』は、女君の死去、帝の即身成仏の後、関白の善政を賞賛して幕を閉じる。

おとゞは一ほんのみやと申あはせて、めでたきまつりことなりと、たみまでいはれ、めでたかりけるとかや。(二二)

この後、一行分ほど空けて二字下げで、

これを御らんぜむ人は、念仏申させ給へし。かならずく。

という宗教的教訓が続く。もっとも、この部分は後人の所為という可能性もある。

その他、列举すると、

かの山ふかくいりにし人も、ねんくつもりて、願ひのごとく、九品の上のしなにさだまる。おなじはちすの望も、むな

しからざるべけんとぞ、ほんには侍るめるとかや。

(『石清水物語』巻下、一五三)

御むまどもにめして、よしの山をさして入給ぬるぞ、あはれなる事にこそ、そのころはき、侍りけめ。

(『いはでしのぶ』三七五)

殿、中宮などは、せきかねたまへる御けしき、ことはりなりとぞ。

(『苔の衣』冬、一七七)

『石清水物語』は、伊予守通世の後、木幡の姫君立后、一族の繁栄、そして伊予守の極楽往生という後日談で結ばれる。『いはでしのぶ』の大尾は、後半の主人公と目される右大将と権中納言の出家行。『苔の衣』は、中宮を物怪から救って立ち去った山伏が、行方知れずの父親であつたと判明した場面を最後に置く。いずれも主人公級の人物が登場し、宗教性の濃い感動的な場面が語られ、文末は伝聞形式を取る。また、中世に様々な異本を展

開させた『住吉物語』でも、最後に主人公一族の栄華と継母方の末路を語り分け、処世のないし仏教的教訓を付すという基本形は、諸本共通している。

このように、深い感銘と余韻を与える終わりが通例化していた当時の物語の中にあつて、『我身』のEは淡泊に過ぎるようである。大局的に見れば巻八は大団円の帰結を見るといつてよいが、たたみかけるように栄華を強調するのでもなく、むしろわびしげな最後の一文は、宗教的感動にも乏しい。後涼殿は主要人物の一人ではあるが、大尾を担うほどの主人公性を有していたわけでもなからう。表現面でも終結部らしからぬ形であるのは、今井氏の指摘されるとおりである。

よつて、Eが「甚だもの足りない」大尾であることは首肯されるのだが、その不審は、D以下の後日談が後続することで解消されているであろうか。現在見る形での巻八の結びは、新たに御息所に仕えはじめた小宰相の勤

務ぶりを語る一文である。

E たゞさぶらふ所の御木下、かべしる、  
わらは、はしたものの、御てうどなにやか  
やと、いとまゝゝるにいひをきてければ、  
おほいみじうほめてぞ、さぶらひつき  
にける。(二四八)

小宰相は、これ以前には巻六にしか登場していなかつた脇役的存在である。その一介の女房が宮廷に出仕し重用されたというわけだが、たとえば『落窪物語』のあこきや『住吉物語』の侍従の目覚ましい出世に比して、やや中途半端な果報に留まる。文末はかろうじて「けり」を用いるものの、「とぞ」の類に較べれば、物語を締め括る力は弱いだろう。内容・表現ともに、典型的な結びの形との間には大きな懸隔があるといわざるを得ない。

要するに、EにせよFにせよ、「大尾としては不十分」という点では大差ないように思われるのである。かといつて、この物語に未完の疑いを差し挟む余地もまた皆無である。

一挙に約十年にわたる年月を進行させ、記録風に次々と出来事を述べてゆく巻八が、物語の終結を目指した巻であることは明らかであろう。今上帝の治世下、聖代が到来し、母后藤壺は宮中であつてそれを後見している。左大臣と麗景殿との密通により生まれた忍草姫君は、実父に引き取られて入内と立后する。右大臣も漸く北の方を定めた後、三条院の姫宮として育てられていた不義の娘（初草姫君）を後涼殿のもとより盗み出し、東宮（三条院第三皇子）の配偶とする。娘を失つた後涼殿は出家隠棲、嵯峨院。我身女院、三条院はすでに崩御している。ここにあらゆる懸案が解決し、全ての主要登場人物の境涯が定まったことになる。もはや物語に語るべきことは残されておらず、これ以上の展開は望めそうにないのである。

さて、幼い東宮は、御息所となつた初草姫君が、かつて兄妹として睦んでいた後涼殿の姫宮にそっくりであることに驚きながら、同

一人物であることまでは思い至らない。それが、情景として描写される物語最後の場面である。

G いはけなき御心ちに、そのこともなく御心にしみて、あはれとのみ見たまひし人の御さまに、人へ初草姫君はおぼえたるも、ことよろしきことこそあれ、ひがめかとのみあやしきに、いかなる御心ざしかそはん。……ほのかなるすみつきさへ、むかしの御さまにだがふ所なきぞ、なをあやしかりける。（二四六〇七）

この場面は、すでに物語巻一、二、三で幾度か繰り返された、次のような場面を髣髴とさせるものである。音羽の山里で我身姫君を垣間見した中納言（当時三位中将、後の関白）は、恋い慕う女三宮に瓜二つであることを驚く。姫君は実は中納言の父関白と水尾院皇后宮との密通により生まれた娘であり、女三宮とは異父姉妹の關係にあつた。やがて中納言は父のもとに引き取られた姫君と再会するが、音



羽で見かけた女君との酷似に再び驚きながら、やはり同一人物であることに気付かないのである。そして、

たゞあやしうかよひ給へる御くしのかゝり、御袖のかさなりなど、猶おもひいでられぬにはあらねど、……(巻二・四〇)

中納言もさまゝ、さらぬおもかげのみおもひいでらるゝ御さまに、見てもなくさむにや、つねにまいり給つゝ、とてもかうてもたゞおはしますさま、ことにはめづらしうめでたきに、めのみおどろかれ給。

(同・四六)

めもおどろかるゝ御ふでのながれ、すみつきまで、たゞかの心をつくす御あたり(女三宮)に、いみじうかよへるをみるに、いとゞうちもをかれぬを、……

(巻三・六四)

ちかき御にほひの、よのつねならず人にぬは、たゞそれかとのみまがひ給は、げにおほくのなぐさめなるに、……

(同・七四)

と、音羽の姫君の、ひいては女三宮の面影を妹の上に見ることによつて、心を慰めるのだった。

両者を比較すると、中納言が思いをかけた女性には実は妹であり、東宮が妹と信じていた姫君は実は他人でやがて妃となるという具合に、ちやうど対照的な形になっていることが見て取れるであろう。容貌・筆跡の酷似をもつてしても、同一人物ないし姉妹であることに全く思い至らない男君、片や二人の姫君は、いずれも臣下と后との密通により誕生し、後に実父に引き取られた、いわゆる「我身にたどる姫君」である。Gの場面に物語前半部との対応が配慮されていることは、間違いないだろう。

Gに引き続いて後涼殿の小野隠棲が語られるわけだが、これまた物語劈頭の「音羽の里に住む我身姫君に照応していると思われる。まず、「音羽」の地名は逢坂山方面・比叡山

方面の二箇所が存在するが、我身姫君が住んでいたのは、中納言が比叡山の帰途立ち寄っていることから、後者の音羽川流域の地であることがわかる。そしてそこは、

そのわたりは、比叡の坂本、小野のわたり、音羽川近くて、滝の音・水の声あはれに聞こゆる所なり。

（『宇津保物語』忠こそ 一三三）  
とあるように、小野にほど近い地であった。

密通によつて生を受けた我身姫君は、名も知らぬ実の両親を恋慕いつつ、その音羽の里において、「ふみわけたるあとなき庭」（巻一・九）「人めまれなるいはほのなか」（同・一九）というわび住まいで、世を捨てた尼君に育てられた。一方後涼殿は、不義によつて儲けた娘の行方が知れぬことを嘆き、自ら出家して、「分まいる人もまれに、こゝろほそき御すまひ」に引き籠るのである。また、叔母・姪の関係にある我身姫君と後涼殿は、ともに水尾院皇后宮の輝くばかりの美貌を受

け継いで、酷似した容貌を持つ（巻四・一〇二、巻七・二〇七）。しかも、実は後涼殿もまた、中納言と女三宮との密通によつて生まれた「我身にたどる姫君」の一人のはずであった。この事実は巻四以降ほとんど黙殺されているのだが、因果はめぐつて、初草姫君という新たな「我身にたどる姫君」の母という役割が、後涼殿に課されることになったのである。

以上のように、巻八のGからEに至る部分は、物語の前半部と照応するところが大きい。しばしば指摘されるように、この物語は人物の系統性・対称性の設定に随分意を用いている。豆のだが、そうしたいわば図式的な性向をここにも看取できるであろう。そしてその照応の基軸となるのが、「我身にたどる姫君」という、まさに物語の題号たる主題なのである。忍草姫君・初草姫君が第二・第三の「我身にたどる姫君」の運命を担って登場してくるのも、巻八であった。かかる主要テーマの

掘り起こしによる物語冒頭との緊密な対応をもつてすれば、Eは十分物語の終結部たる資格を備えているといえよう。

その場合、後続する小宰相らの後日談は、ほとんど蛇足に等しいものとなる。もともと、Gの場面を受けて「この宮す所の」とはじめDは、いかにも付けたいの感があった。しかも、本系の巻々の中では前斎宮家周辺の人々が登場する唯一の部分ゆえ、浮き上がった印象を否定できないだろう。終結にあたり、巻六の人物の後日談を加えることで、巻六を含めた物語全体の統括を意図したと解するにしても、初めに見たように、小宰相や前斎宮の物語はここで完結するわけではなく、さらにその先が巻六末に書かれているのである。その意味でも、Fの終わり方は甚だ中途半端だといわざるを得ない。

よって、EとFとを比較した限りでは、本系の物語の全てに解決を与えた上で物語冒頭部との照応を図っているEの方が、物語の結

びとしてよりふさわしいように思われる。しかしそれにも関わらず、Eが大尾として「甚だもの足りない形」であるという印象もまた、拭いがたいものがある。先に確認したように、物語の終結部には、一読してそれとわかるようなしるしを、何らかの形で留めておくのが通例なのである。冒頭部との照応というかなり手の込んだ工夫を凝らしながら、何故明瞭に大尾らしい形を与えず、しかもその後に一見不必要な後日談を続けるのだろうか。

#### 四

この物語が、物語の典型的な終わり方というものに、無知ないし無関心であったとは思われない。複数の巻から成る物語の場合、各巻の巻末部にも、全編の大尾ほどではないにせよ、ある程度の巻末意識が反映されることが多いが、『我身』もその例に漏れないのである。たとえば、

うちきくより、れいのこゝろげさうかきりなうて。

(巻二・五五)

大将はつきせぬ御こゝろのうちのみ。

(巻三・八九)

のように、文の途中で断絶して余韻を残す方法。また、巻一の、

いとしのびて、御ぶくのことなどのたまはせをきつるも、めづらかなり。(三四)

はやや平凡だが、水尾院皇后宮の逝去に引き続いて、関白が我身姫君を引き取るという急転回に対し、当事者たる姫君の心中に即して、語り手が批評を加えたものと考えられる。同様に、

夜とゝものひとりずみのすさまじさぞ、なくさむかたなきや。(巻四・一二五)

も、代替わりに伴う変動の後、困難な恋に懊悩する男君たちの姿を、語り手による詠嘆の口調で描出する。さらに、最も典型的な伝聞形式も二度用いられている。

ゆめかうつゝかとも、なををろかなりと

ぞ。

(巻五・一五九)

なにの御いのりもかひなしとぞ。

(巻七・二二八)

この両巻は、帝の突然の崩御でもって幕を閉じるという点でも共通している。

以上、いずれの巻の巻末も、一巻の結びにふさわしい形を取っていることが理解されよう。それは語法面に留まるものではなく、委細は省略するが、何らかの劇的な事件や、代替わりのように区切りとなる出来事を選び、その巻における主人公級の人物の悲嘆・苦悩等の痛切な感情でもって、余情を漂わせて締め括っている。これらの諸巻からは、巻末を意識して工夫を凝らした形跡を、十分に窺うことができるのである。

そして、その巻末意識が最も明瞭な形で現れるのが、巻六の後日談は勸善懲惡に基づくように、巻六末の後日談は勸善懲惡に基づく教訓性をあらわにしていたが、それは現世での因果応報ばかりでなく、「とをなかの極

樂往生、申將の「あつちじに」にまで筆が及んでいく。そして卷六の掉尾を飾るのは、亡き女帝の追善に余生を送り、兜率天に生まれ変わった近習女房たちによる和歌会であった。

かぎりもなくこのましく、うらやましかりし人くこそ、いきたるかぎり、かたちをやつし、ながきかみをそりすて、おいたるおやをなげかせて、やすきいもねず、つかへいとなみあはれたりし、あぢきなくみえしかど、のちの世はみな、とそちのないぬんへまいられけるとかや。はてはなを、うらやましき人にぞさだまりはてにける。かのきんず女房たちに「おほせて、わかのかはいありけるにや。たがかりつたへけるにか、しらず。」

(一九四)

続いて四人の女房と女帝の詠歌十首を羅列し、

H たんばの天人は、いまもかみあけすが

た、ましてきよげにて、如意殿はきまはりて、どのもの官人、女官、女ずまでもすてず、たづねもとめみちびき給ひけりとなむ。

かばかりくもりなき世に、斎宮、新大夫どの、りんず、のちの世のきこえぬこそおほづかなけれ。

(一九五)

と締め括る。傍線部のような伝聞形式、語り手の顕在化、宗教的感興等、後日談全体の教訓性と併せ、一巻の巻末を通り越して、一篇の物語の結末としても申し分ない形を備えているといえよう。

しかも、現存する伝本の内、書陵部本と前田家本は、「……となむ」と「かばかり……」の間に一行分ほどの空白を置いている。前節に挙げた『雪に濁る』のような例を参考にすれば、独立して記された最後の一文は、物語の聞き手ないし読者の感想を装ったものと解釈すべきかもしれない。こうした技巧が物語原本に由来するものならば、その末尾意識

はますます明瞭となろう。

従来、このような巻六巻末の性格は、「短篇物語としての結末を、型通り中世の往生譚形式で収めた」という今井氏の言に代表されるように、巻六を独立した別伝系の挿話と見なす一因となっていた。しかし先に見たように、巻六を破綻なく読み通すためには、巻五はもちろん巻八が必要であり、巻六末の教訓性も、小宰相の出仕と兵衛佐の昇進を明記する巻八末を伴ってはじめて十全なものとなるのである。

逆に本系の物語の側から考えると、全巻の大尾でありながら巻八は中途半端に終わり、その巻末の後日談は巻六末の後日談へと滑らかに接続して、そこで漸く結びらしい結びにたどり着くのである。その時、巻六末尾のHは、巻六の終結に留まらず、実質的に物語全篇の大尾のような様相を呈してくるのではなからうか。

そもそも巻八のEが、物語を閉じんとする

気配を濃厚に漂わせながら大尾らしい形に収めなかつた、あるいは収めることができなかった理由を考えるに、物語の掉尾を飾るにふさわしい人物の不在を、その一つに数えることができるように思う。大団円でめでたく結ぶにせよ、出家譚・往生譚のように宗教的感動の内に閉じるにせよ、その核となる主人公が必要となる。しかし『我身』の場合、七代四十五年にわたる物語の進行につれて、焦点人物はどんどん拡散してゆき、当初主人公と目された我身姫君でさえ、いつの間にか遠景に霞んでしまったまま、ひっそりと生涯を終えていた。物語全体を一身に受け止めて統括できるような人物は、もはや存在しないのである。

その中で敢えて最も有望な候補者を挙げる とすれば、すでに亡き女帝しかいなかったのではないか。巻五で聖代を現出し、往生譚とかくや姫のイメージに濃厚に彩られつつ臨終を迎えた女帝は、巻七・巻八で繰り返し追慕

される。さらに、今上帝の聖代実現は亡き女帝の加護に依るところ大であつたし、巻六でもその超人的な明王ぶりが一層強調されている。少なくとも巻五以降、誰にも劣らぬ存在感を保持し続けてきた人物だったといつてよい。

巻六末尾の兜率天歌会の主催者は、まさにその女帝であつた。そこでは女帝とともに、女帝に忠誠を尽くした近習女房たち、女帝と常に対照されてきた前斎宮など、本系の物語とは全く無関係ながら、巻六では中心的に活躍する人物たちの後生が語られる。一方、本系の物語に登場する人々の処理は、巻八のEの段階で一応片付いている。巻八から巻六末の後日談へと読み継げば、本系の巻々と巻六とを問わず、物語の全ての主要登場人物に決着が付けられることになるのである。その上で、双方の世界に跨って多大な役割を果たしてきた女帝を中心に、大仰な教訓話と往生譚を繰り広げる巻六末は、物語全体を収束する

に不足ない重みを備えているといえよう。

そして、そうした巻六末の位置付けを保証しているのが、巻八末の後日談なのではなからうか。巻六全体を物語の巻序の中に置く場合、その本体部分が巻五の「ならび」であることは動かないから、やはり現行の位置が最もふさわしいであろう。そうすると必然的に、巻末の後日談も巻七・巻八に先行することになる。しかし先述のように、A・C辺りの叙述には若干の違和感が残るので、その不審を引きずって巻八末に至った読者は、Dの記事によって納得し、巻六末が巻八末の後に位置すべきであることに気付くであろう。そして改めて巻六末に目を向けることになれば、その時且は物語全篇の結びとして立ち現れてくることになる。本系の物語の中でやや落ち着きの悪い巻八末の後日談は、物語の終結を巻六末へと誘導する役割を担って、そこに置かれたものではないだろうか。

もっとも、巻六末尾が物語の大尾であるな

らば、それ自体が卷八の最後に位置すべきではないかとの疑問も生じよう。しかし、卷六のような異質な世界、その中でもとりわけ諧謔に満ちた後日談が、一応完結している本系の物語の秩序を掻き乱すことは必定である。D以下の短い章段のみならば、直前のGの場面と自然に承接するし、卑俗さも比較的穏やかであり、本系の物語に持ち込むことのできる許容範囲だったのではなからうか。

また、卷六末の後日談は、前斎宮をめぐる悲喜劇と一体であればこそ、教訓ないし諧謔の効果を上げるものであり、卷六の本体部分と切り離すことは難しい。要するに卷六の卷末部は、本体部分の後日談の役割を果たすと同時に、本系の巻々を含めた物語全体を統括するという、二つの課題を担っていたものと思しい。卷八末との前後関係の転倒は、そこに起因するのではないかと考える。

『我身』の本系の物語は、卷八において後

涼殿の小野隠棲を語った時点で、内容的には確かに終結している。しかし、さらに卷六と関連する記事が付されることによって、卷六末尾というもう一つの結尾が引き寄せられることになる。そしてそれは、大尾としてはるかにふさわしい形を備え、物語全編を締め括るに足るものであった。

このように複雑な構造の類例を、現存する他の物語作品に見出すことは難しい。しかし、大尾の形に腐心し独特の手段を講じたという点では、たとえば『松浦宮物語』の省筆・偽跋が、收拾のつかなくなった物語を一挙に終息させる手法であったともいわれるような例に、一脈通じるものが感じられる。

そして、物語の典型的な終わり方を模索した工夫の跡に、物語の伝統というもののへの拘りを窺うこともできるだろう。しかし、卷六末の教訓性や宗教性は徹底的に滑稽の色調に染められており、同時代の他作品のように真摯な態度から発したものととは考えがたい。か



かる戯文をこの長編物語の大尾と見なすことには、確かに抵抗も感じられるのであるが、こうした諧謔の精神は、濃淡の差はあれ、巻六ばかりでなく物語全体にゆきわたっているものであった<sup>三</sup>。物語の典型に則りつつ、しかも最も深刻たるべき題材を扱いながら、それを輻輳するかのような諧謔ぶりにこそ、この作品の本領が発揮されているのかもしれないのだが、その点については章を改めて考えたい。

（注）

（1）『日本文学大辞典』第三卷（新潮社、一九三四年、永積安明執筆）など。

（2）『我身にたどる姫君論』（『物語文学の研究』笠間書院、一九七四年）。

（3）『申世物語の展開』（『申世小説とその周辺』東京大学出版会、一九八一年）。

（4）『我身にたどる姫君論』（『王朝末期

物語論』桜楓社、一九八六年）。以下、特に断らない限り、今井氏の所説は同論文による。

（5）今井氏も、性愛描写・ユーモア等、巻六を含めた物語全体の特色を指摘されている。

（6）何か予感があつて気がそわそわする、というぐらゐの意で用いられている。他の用例に、『あはすでにとて、をのくすみやきあへりける程に』（『今鏡』雁がね、一七〇）などがある。

（7）『落窪物語』に「うち捨ててかけかたも聞こえぬは」（巻三・二〇八）という用例がある。

（8）折悪しくも、という意味らしい。他の用例未見。

（9）底本「さはかり」。

（10）「われと知られじと抜き足に歩み給ふに」（『源氏物語』末摘花・一一二〇九）のよ  
うに、「ぬきあし」という形が一般的。「ぬ

けあし」の用例は、「我もとへ鞠くれば、ぬけあしをふみてにげられき」（『安元御賀記』）など。

(11) 現存する三種の伝本の内、金子本のみ、巻六の首題に「ならび」の注記を持つ。

(12) 底本「いでうれ」。

(13) 「名家譜第任<sub>レ</sub>之。多者先補ニ五位藏人<sub>一</sub>。乃任<sub>レ</sub>弁也。藏人帶<sub>レ</sub>之。頗清撰也」(『職原鈔』巻上、中弁・少弁の項)とあるように、弁官と藏人の兼任は、限られた栄職である。

(14) 底本「ばかりう」。

(15) 底本「こ」脱。

(16) 今井源衛・春秋会『我身にたどる姫君』

(校楓社、一九八三年)。

(17) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第三巻(角川書店、一九六五年)。

(18) 前掲注(2)。

(19) 詳細を確認していないが、前掲注(16)には、巻六の後日談を「巻八欄筆以後の執筆

とする説」も示されている。

(20) 引用は室城秀之『うつほ物語全』(おうふう、一九九五年)による。

(21) 引用は新潮日本古典集成による。

(22) 青表紙本系統の本文によれば、花宴・若菜下・柏木・匂宮・竹河などの諸巻に見られる。

(23) 阿部秋生・前田裕子「零に濁る物語一冊」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』第二号、一九八三年三月)。

(24) 完本が現存するのは巻一・巻二のみだが、全巻の巻頭・巻尾は抜書本(三条西家本)に残っている(小木喬『いはでしのお物語本文と研究』笠間書院、一九七七年)。

(25) 宮田光『『我身にたどる姫君』に於ける人物の対比と系統性について』(『熊谷武至教授古稀記念国語国文学論集』笠間書院、一九七七年)にまとめられている。

(26) 底本「女房たちし」。

(27) 底本「如意微」。

(28) 橋本不美男・桑原博史『我身にたとる姫君』(汲古書院、一九七五年)の影印による。

(29) 金子本でも、行間は空けなが、最後の一文は改行して記されている。

(30) 第一章参照。

(31) 前掲注(5)参照。

## 第六章 卷六における仏教的教誡

『我身にたどる姫君』全八巻の内、巻五の「ならび」とされる巻六は、滑稽・卑俗な内容・用語や成立過程をめぐって、いろいろな問題の多い巻である。第五章において、従来別伝として取り扱われてきたこの巻が、物語全体の構造上いかなる位置を占めているのか再検討し、その巻末部の後日談の部分が物語全編の大尾という役割を担っているのではないかと述べた。本稿では、巻六後日談の大尾らしさとして指摘した宗教性・教訓性についてさらに吟味し、巻六の存在意義を少し別の角度から考える。ならびに、巻六の特異性のよってきたる所以にも触れてみたいと思う。

まず、巻六の後日談がどこからはじまるのかを明らかにしておこう。それを判断するには、写本の形態上かなりはっきりした目安が存在する。現在伝わる諸本Ⅲの内、金子本を見ると、第六十九丁裏の六行目は、「にあへといかにといふ人なし」の後、半行分ほど空白で、次に七行目の冒頭から、「たんはの内侍はよしなき」と続いている。他の二本は、「いふ人なしたんはの内侍は」と切れ目なく記しており、この間に脱文があるわけでもなさそうである。

金子本に見られるこの改行箇所こそ、巻六の中心をなす前斎宮の物語とその後日談との境界であるうと考えられる。巻六の巻頭は、伊勢から帰京した前斎宮が、父嵯峨院にも疎んじられたため、かろうじて勅旨田を「ひとつばかり」賜って、「しのお草のなかにすみ給ふ」（一六三）という状況からはじまった。その後も前斎宮家の窮乏よりは様々な形で繰り返し語られ、「うとましのうちの御心や。

よろづかうこそおもふに、たゞひとりあるは  
らからを、たづねさせたまはぬさまよ」(一  
六七)と、姉の女帝を恨むこともあった。や  
がて前斎宮家の女房が宮中に入り込んで愁訴  
するに至り、ついに女帝は、「いとかなかな  
らず、かの御身にはをもだゝしかるべき」(一  
八七)莊園を授けることにする。それによつ  
て宮邸の様子は一変し、みな狂喜して女帝の  
恩徳を称えることになる。

みやのうち、あらぬ物にめでたし。軒の  
忍ぶうちらはせ、もりぬれしなごりな  
くふきわたし、ちりはらはせなどすれば、  
えもいはずあらまほしきたひに、たゞう  
ちのごぜんを、あつまりてかたじけなく  
きこえさはぐ、ことはりなり。……あら  
まほしくこのましきことのみ、たぐひな  
き宮のうちなり。(一八九)  
そして、前斎宮家の打って変わった威勢のほ  
どを語るこの段落の最後が、宮邸の門前を通  
る通行人にまで「こしうや」を強要し、そう

しない者は懲らしめたと述べる文、

まことにめよはなるものは、さぶらひつ  
ぶてうちかけなどして、かぎりもなく世  
にあへど、いかにといふ人なし。(同)  
なのである。

『我身』の巻六といえは、女房との同性愛  
をはじめとする前斎宮の奇矯な言行に目を奪  
われがちだが、その骨格には、肉親に顧みら  
れることなく窮迫していた前斎宮が、姉女帝  
の恩顧により一転して日の目を見る、という  
筋書きが流れていた。それを仮に前斎宮物語  
と呼ぶならば、その物語は、莊園を下賜され  
た前斎宮家の繁栄が、巻頭のわび住まいと対  
照的に語られた時点で、一応の結末に達する。  
金子本は、ちやうどその箇所改行を施して  
いたのである。  
この改行箇所以降を後日談だとすれば、後  
日談の方にもやはり、首尾の照応した構成を  
読み取ることができる。改行直後の「たんば  
の内侍は……にはじまる一段(一八九、九〇)」

は、女帝とその四人の近習女房たちの話題である。丹波内侍は、前斎宮家の女房の口真似をしてからかったため女帝の勘気を蒙っていたが、やつと許されたことに感謝し、女官・女孀や主殿寮の官人を動員して、宮中の清掃に精を出す。自らの死を予感した女帝は、丹波内侍に「は、がみんほどばかりは、あまにな、りそよ」とさりげなく遺言し、中納言典侍・新宰相典侍には、やり残した写経・造仏等の仏事を、やはりそれとなく遺託したという。もう一人の右近内侍に関しては、女帝が日頃かき撫でていたため、「がみもかほりみちて」いたという説明がある。また、段の最後には、

いみじき時の人ども、かたち、よういも  
こゝろことに、みる人も心うごくおほかりしかど、なをはかなき世のならひは、  
これゆへ又、よしなき、も心をつくして、  
袖のひまなきちぎりもやあらんと、あはれなる行するのおほつかなきともなり。

という、近習女房たちの行末を案じる一文がある。

そして後日談の最後、すなわち巻六の巻末は、女帝と近習女房たちによる兜率天歌会の場面（一九四・五）で閉じられる。四人の近習女房はみな、女帝の死後出家して追善に余生を送り、その功德によって兜率内院に往生したという。

かぎりもなくこのましく、うらやましかりし人、こそ、いきたるかぎり、かたちをやつし、ながきかみをそりすて、おいたるおやをなげかせて、やすきいもねず、つかへいとなみあはれたりし、あちきなくみえしかど、のちの世はみな、とそちのないぬんへまいられけるとかや。はてはなを、うらやましき人にそさだまりはてにける。

また、今や天人となった丹波内侍は、如意殿を掃き回り、「とのもの官人、女官、女ずまでもすです」、尋ね導いたという。兜率天歌

会における右近内侍の詠、

恋侘し袖のうつりがそれならでありしよ

りけにほふ花かな

も併せて、これらが改行直後の段の内容に呼応していることは明らかであろう。

このように、巻六の後日談は、女帝と近習女房たちの往生にまつわる話題にはじまり終わるのだが、それに前後を挟まれた、主に前斎宮家周辺の人々のその後を語る部分も、全体として宗教的雰囲気濃厚である。前斎宮でさえ、女帝の突然の讓位・崩御に、「仏のおはしまさざりけん」時の御心のうち」と衝撃を受け、「いざや、ものまうでせん」「いざくどくつくらん」と、懺法・仏供養などの仏事に「あそびたはぶれ」という（一九〇一）。また、前斎宮家に仕えていた「とをなか」という人物は、老後、比叡山の学生となつた息子に孝養を尽くされ、「入道殿とて、あみだぶたかく申て、らうゑい、いまやうなど、心をやりてうたひ」、八十余歳にして「り

んずめでたくて」極樂往生を遂げ、

この世にはやそちの月をながめきてひかりかひあるにしの山のは

という辞世の歌まで記されている（一九三、四）。これほど宗教的な記事が集中するのは、

巻六でも巻末に近い部分のみで、その首尾を括っているのが、女帝と近習女房たちの往生譚なのである。金子本の改行箇所が前斎宮物語と後日談との境界にあたることは、この点からも首肯し得る。

とはいえ、確かに内容上ここに区切れがあるにしても、一つの巻の内部で改行するといふ事態は、物語写本の形態としてやはり珍しい。実は『我身』巻六には、当該箇所以外にも二例、文章の途中で行を改めるところがある。まず一つ目は、金子本と前田本に共通するものだが、巻末の兜率天歌会の場面で「近習女房四人の詠歌を列挙し、さらに「ひかりをさゝとはなちて、まひあそびあはれたりける」と記した後、数字分の空白を残して改行

した上で、「御せいには」として女帝の御製二首に続いてゆくところである。書陵部本の場合、「まひあそびあはれたりける」でちやうど行末にくるため、空白なしに「御せいには」が行頭に出ている。もう一つは、兜率天歌会の場面の最後、

たんばの天人は、……とのもの官人、女官、女ずまでもすてず、たづねもとめみちびき給ひけりとなむ。

と、巻末の一文、

かばかりくもりなき世に、斎宮、新大夫どの、りんず、のちの世のきこえぬこそおほつかなけれ。

との間である。この箇所、金子本は行の途中で改行するのみだが、前田本・書陵部本では、さらに一行分の空白が間にある。

この二例の内、前者については、「御せい」という重々しい語ゆえ行頭に出された、つまり「平出」と呼ばれる表敬法に倣って、女帝を他の女房たちから際立たせるための表記か

と推測される。また、後者については第五章でも少し触れたが、兜率天歌会という内容的な盛り上がり、さらに「……となむ」という語り収めの表現をもつてすれば、改行前の一文で巻が閉じられていても不思議ではない。その兜率天歌会の場面を「かばかり」と受けて「おほつかなけれ」と不審がる目ぶり、物語の聞き手ないし読者の言であるように感じられる。といっても、後に述べるように、この一文は巻を終えるにあたって絶妙の効果を上げるものであり、作者自身の手になることは疑いあるまい。段を改めさらに空自行を置くことによって、わざと後人の筆を装ったもの、たとえば『松浦宮物語』のいわゆる偽跋にも通う、一種の技巧だったのではなからうか。

このように、他の二つの改行箇所については、ある種の表現上のねらいを読み取ることができる。そこから類推して、問題の箇所も何らかの効果を意図したものかと予測される



が、あまり判然とはしない。だからこそ、他の二箇所と違って、金子本以外の伝本では改行が保存されなかったのだろう。敢えてその意図を憶測するならば、前斎宮物語が落着きここから後日談に入ることとを明示するためだったのだろうか。

あるいはこの改行は、巻六の成立の事情を反映しているのではないか、つまり、前斎宮物語と後日談の執筆の時期は連続していなかった、その痕跡を留めているものと考えられるかもしれない。第五章で検討したように、巻六と巻八巻末部との前後関係は複雑な様相を呈しており、巻六の中途に執筆上の断絶があったという可能性は十分にある。これまで様々に論じられてきた巻六の成立過程については、よりはつきりした証拠が見付からない限り、結論を下すのは難しいだろう。ただし注意しておきたいのは、たとえ前斎宮物語と後日談の執筆時期に多少の隔たりがあったとしても、物語構想上の断絶はなかった、つま

り、決して前斎宮物語だけで巻六が完結していたわけではなかったと思われることである。それは、前斎宮物語の中に、続く後日談の伏線と思しき記述がいくつか見受けられることによる。

たとえば、巻六のみに登場する、女帝の近習女房たちを見てみよう。彼女らはその名のとおり女帝の側近くに仕えた典侍・内侍たちで、冗談や戯れを交えて女帝と親しく交流する様が、ほほえましく描かれている。しかし、女帝の治世を語る巻五では、女帝は数多くの女房たちを誰彼と区別することなく、等しく一定の距離を置いて接していることになっていた。

内には、もとよりこの御方には、たれこそちかくさぶらへ、いづれをおぼしへだてたりといふことなく、さぶらふほどの人は、たゞあけくれとをく見あげまいらせ、つかふまつるべきほどくの宮づかへ、御てうづやなにやかやならでは

けちかやかにて御物がたり、たはぶれなど、一こと葉ものたまはせならしたる事もなかりしかば、……上らうはすこしけちかく、下らうはとをくなどさぶらふならでは、さぶらひにくゝわびしきにもあらず、又ものなつかしくならしきこゆるまでは、おもひもよらでのみぞさぶらふ。

(一三〇—一)

また巻七でも、すでに亡き女帝を偲ぶ文脈で、こまかにけちかき御ことばなどこそ、あまりものをき御もてなしなりしか、あやしくかずならぬきはまで、もらさず御らんじかけつゝ、かたじけなくありがたかりし御おもかけは、…… (二〇〇) と、同様の趣旨が述べられている。

作者としてもこの矛盾には気付いていたらしく、巻六で、初めて四人揃った近習女房たちを紹介する時、

たれをたれともおぼしめさず、とりわきたるもなけれど、この四人を、まことに

はすぐれて御こゝろとゞめたる人なるべき。 (一八五)

特にお氣に入りはいいないのだが、「まことに」は「この四人がお氣に入りなのだった」と、やや苦しい説明を試みている。他巻と矛盾を来すことは承知しつつも、敢えて近習女房たちを登場させたかったらしいのだが、その意図はいかなるものだったのだろうか。

しかも、四人が勢揃いするのは、巻六も半ばを過ぎて、前斎宮物語がまもなく終わろうとする頃であった。もし巻六が前斎宮物語のみで終結していたならば、ここで近習女房四人が出揃う意味、特に、最も遅れて登場し、他の三人と違ってストーリー上役割らしい役割を持たない右近内侍の存在意義は解しがたい。やはりこの近習女房たちは、巻末の兜率天歌会というクライマックスを担うために造型された人物であり、四人という数も、女帝を含めて五人各二首、計十首と和歌の数を整えるための設定だったのでなかろうか。

あるいは、兜率内院に君臨する女帝を取り巻く四人の女房という構図には、仏を圍繞する四天王のイメージが託されているのかもしれない。兜率天歌会における女房たちの詠歌の中には、次のように女帝を月に喩えるものがあった。

影きよき雲井の月になれしよりうき世に  
ふかきやみはのこらず（新宰相典侍）  
あかぬ夜の月をしたひしあまつ空心たか  
くもすみはつるかな（右近内侍）

一般にこうした釈教歌において、「月」は仏の喩に用いられることが多い。女帝は巻五において、この世の人ならぬ天女の生まれ変わりという形で超人性を示されていたし、巻八には仏菩薩に見紛うような威厳をもって夢枕に立ち、生者の迷いを誠めるという場面もある。のだが、この巻六末では、彼女はもはやはっきり仏と同等に扱われているといえよう。

ところで、これ以前、前齋宮物語の時点で

すでに、女帝をまさしく「仏」と呼ぶことがあった。女帝の恩顧を受け得意の絶頂にある前齋宮の、「内のござんは、たゞ仏のあらはれておはしますなりけり」（一八八）という賛辞である。そして前齋宮物語はこの直後に終結し、続いてあたかもこの言葉に誘導されるかのように、限りなく仏に近付いた女帝を中心とする後日談が開始することになる。前齋宮が不遇から一転して繁栄を得るまでの物語は、反面で、この評判芳しからぬ妹にもあまねく注がれた、女帝の慈悲と叡智を称える挿話でもあった。別伝風に挟み込まれた形の巻六は、女帝賛美という点でかろうじて他の巻々と結び付くとされてきたが、より踏み込んでいえば、巻六の前齋宮物語とは、「仏のあらはれておはしますなりけり」という発言を引き出して、最終的に女帝＝仏を中心に据えた往生譚を導くことを目指していたのではないかとさえ思われてくる。

以上のことから察するに、金子本の改行箇

所の前後で執筆に多少の中断があったとしても、物語の構想は断絶なく連なっていたのである。近習女房たちを順次登場させ、女帝を仏として高めてゆく前齋宮物語は、後日談における往生譚をある程度は視野に入れていたと考えざるを得ない。本稿では便宜上「後日談」と呼んでいるが、実際のところ巻六の巻末部は、ただの付けたりと片付けるわけにはいかないようである。第五章で論じたように、物語全編の終結部という役割をも担っていたとすれば、なおさらその重要性は等閑視できないものとなる。

しかし、その後日談の中核をなす往生譚は、宗教的雰囲気濃厚であるのはもちろんながら、同時に「諸誰が眼目」「諸誰の気が皆無のもの」の一つとしてない。ともいわれる。確かに、兜率天歌会における釈教歌十首の羅列といい、「ひかりをさ」とはなちて、まひあそびあはれたりける」「たんぼの天人は、いまもかみあげすがた、ましてきよげにて、

如意殿「はきまはりて」等の天女たちの描写といい、大真面目な語りの中に、おかしみが漂っていることは否定できない。

もちろん、往生の様を描くこと自体が必ずしも滑稽というわけではない。たとえば、これより先の『海人の刈藻』<sup>3</sup>には、即身成仏を遂げた申納言の遺児の夢として、

あけがたに、すこしまどろみ給へる夢に、  
むかし人とおぼしき人、すみそめのすが  
たうるはしくて、「……われはいとす  
しきみちに侍り。くは、みたまへ」との  
給とおぼして、御枕をもたげてみ給へば、  
しうんたなびき、花ふり、廿五のぼさつ  
まひあそび給ふ。れんげだいにうつり給  
とみ給て、夢さめぬ。

(巻四・二九八―九)

のごとく、往生伝の典型に則った描写がある。よく知られるように、この物語の即身成仏という非現実的な趣向は、『無名草子』の批判を浴びた。しかし、『海人の刈藻』の主調が

哀れ深い悲恋遁世譚であることを思えば、少なくとも往生を語る作者の姿勢が真摯であつたことは認め得るであらう。それに対して『我身』巻六の場合、前斎宮とその女房たちの狂態はいうまでもなく、女帝の近習女房たちの活躍もかなり戯画的に描かれてきた。その末に、しかもとりわけ滑稽な前斎宮家周辺の人々の後日談を挟む形で置かれるこの大仰な往生譚を、真面目に受け取るのは難しく、作者の遊び心を感じずにはおれないのである。

それでもまだ兜率天歌会の場面は、女帝を仏とあがめることで、一応感動的にまとめているともいえようが、先に挙げた最後の一文、「かばかりくもりなき世に、斎宮、新大夫どのよりんず、のちの世のきこえぬこそおぼつかなければ」が、だめ押しのように諧謔の効果を上げている。「くもりなし」は、自らまばゆいばかりの光輝を発する女帝の聖代を象徴するキーワードであつた。

せちゑなどには、御丁のかたびら、よの

つねのよりはいふせき心ちこそすれ、御いしにおはしますなどを、はるかにみはしのもとまで、しらではあしかりぬべければ、御そのつま、袖などは、くもりなき日かげに、かゝやくばかりにておはします御さまの、さらに世にたくひなきぞ、めやすかりける。(巻五・一三一―一三二)

さきく、のせちゑよりは、御丁のかたびらなど、すこしはれくしく、くもりなきひるなれば、御あふぎばかりこそあれ、あさく、とえもいはぬ御くしの、かたつきなどのみえさせ給ふは、たゞ神などのあらはれおはします心ちして、……

(同・一五六、讓位の場面)

また、大嘗会の御禊の行幸の場面では、「れいのことなれば、神無月さだめなき空ともみえず、うらく」とはれたる日かげに」(同・一三三)と、女帝の行くところ晴天が当たり前であつたとされている。今やその女帝は弥勒の浄土である兜率内院に君臨し、ますます

「くもりなき世」であるにも関わらず、前斎宮とその寵愛女房新大夫の臨終・後生だけはわからないという。最高潮に達した女帝の威光も、この二人によって相対化されてしまうがごとくである。それも、先述のように、語り手の言葉としてではなく、わざわざ後人の書き付けのような形を装って、徹底的に諷刺の姿勢をとっていた。

述べてきたように、女帝らの往生譚を眼目とする巻六の後日談は、相当の重要性を与えられていたと察せられる一方で、諧謔性も顕著なのである。もちろん巻六という巻自体が滑稽に満ちた巻なのだが、往生という最も厳粛であるべき事柄に対してさえこうした態度を見せるのは、巻六の特殊性に帰せられることなのだろうか。他の巻々において、往生、あるいはその前段階としての出家遁世がいかに扱われているか、他の物語と比較しながら概観してみよう。

## 二

一般に『無名草子』以降『風葉和歌集』以前の成立と見なされている現存物語は、ほぼ例外なく悲恋遁世譚を含んでいる。前後の時期の作品や散佚物語に目を配ってみても、当時最も流行の話型であったことは間違いない。それらの物語は、愛する女君を失って悲しみの極みにある主人公が遁世を決意するに至る経緯、一方で現世の絆を振り切りがたく苦悩する姿、あるいは取り残された者たちの嘆きなどを、同情的な筆致で情緒深く描く。出家生活の末、往生を遂げたと伝えられる者も少なくない。宗教的な深まりという点では物足りないにせよ、此岸での葛藤を経て彼岸を求める人物への共感や称賛、一種の憧れに似た心情は、十分に察することができる。

ところが、それらとほぼ同じ時代に成立したと思しい『我身』には、かなりの長編で極めて多数の人物が登場するにも関わらず、悲

恋遁世譚の要素が全く見られない。遁世譚に展開しそうな恋物語がなかったわけではない。たとえば、かつて密会した水尾院皇后宮に先立たれ、その追善の仏事に勤しんだという関白（巻一、三）。女三宮のつれない態度に絶望し、半ば脅迫的に出家の意志を仄めかしていた中納言。しかもその女三宮は、あやにくにも彼の父に降嫁してしまう（巻二、三）。また、三条院の女御後涼殿と秘かに逢瀬を持ち、熊野詣などの「山ぶみ」を試みた宮の中将（巻四）などは、その可能性が十分にあった人物である。しかし、いずれも実際に世を捨ててには至らず、やがてそれぞれ妻とした別の女性のもとに落ち着くことになる。

もちろん、出家を遂げた人物も少なくはない。最愛の后を亡くした水尾院・嵯峨院の場合がそうである。また女性の方でも、女三宮・水尾女院・我身姫君・後涼殿らが、夫や子との死別を主な動機として剃髪している。た

だし、こうした近親者、特に配偶者の死による出家は、ある意味予想しやすい出来事であるし、次に引用するように、主要登場人物の動向として簡単に報告される程度で、悲嘆がら道心に向かう内面が掘り下げられるわけではない。例の一つ目は、我身院の崩御に伴い母水尾女院が出家したこと、後の我身姫君も同様に望んだが引き留められたことを告げるもの、二つ目は、嵯峨女院の死後、夫の嵯峨院、及び娘の一品宮に皇太后の位を譲った我身姫君（嵯峨女院の妹）が本懐を遂げたことを語るところである。

その頃、院のみかど、いとにはかにわづらはせ給ふを、さりとをもをのづからの事ならんと、たれもおどろき給はぬに、ほどなく夢のことおはしますを、たれもく、いかゞはなのめにおほさん。女院ぞ、わきてもいのちながさを心うくおぼしめして、おしげなき御世とはきこえながら、やがてそむかせ給ぬ。皇太后宮へ我

身姫君も、おなじさまにとおぼしめしをきてしかど、あまり物さはがしきやうならん、猶うちへいらせ給はんこともたえぬべきに、人くもきこえとゞめつ。

(巻四・一二三)

院も、もとより心えざりし御すまひ、たゞふた所、あさ夕ならば給て、みをききこえさせ給はんを、心ぐるしうおぼしめしければ、いとすがやかにおぼしめさだめて、いとひすてさせ給へるを、……とまらせ給へる女院へ我身姫君も、さはがしうおどろかせ給ふさまならねど、もとより皇太后宮へ一品宮の御さまなど、見さだめきこえんまでと、おぼしめしをきてしかば、おなじさまにおぼしめしたちにければ、……

(巻五・一四二・三)

また、『我身』には、生来道心深く常に分離を願っているような、いわゆる薫型の理想的人物も登場しない。出家を遂げた人物の往

生についても、ただ一人、嵯峨院に関して、

さるはその冬、さがの院も、せんたいへ女帝の御むかへいちしるぐ、花ふりしくといふばかりにて、おぼしめす事かなひてければ、…… (巻八・二四一)

と、すでに亡くなっていた娘の女帝に導かれて往生を果たしたことを、これまた報告事項として、簡単に述べる程度である。

その女帝は、信仰や往生について言及されることが最も多い人物である。亡母の追善供養のため、自ら五部の大乘経を書写して清凉殿で八講を催し、四天王らの降臨を仰いだ。やがて譲位した女帝は、全巻暗誦していたという法華経を手に持したまま崩御する。第一章で論じたように、こうした記述は、信心深い女帝が兜率天に往生したことを暗に示すものであった。しかしそうした女帝の信仰心は、三条院の皇后として登場していた巻四や、治世のめでたさが言葉を尽くして称えられる巻五の前半ではほとんど触れられず、いよいよ



讓位・崩御を迎えるという局面になって、初めて話題に上る。しかも、彼女が仏道に帰依するに至った動機や経緯は明らかでなく、やや唐突の感は否めない。

兜率往生にしても、法華經捧持などによって暗示されているとはいえ、

おもふもしるく、しら露のきえ行心ちするに、御てをとらへて、「やゝ」ときこえさせ給ふにぞ、人々おきさはき、みずきやうなにくれ、そのことゝなし。頭弁なども、かうてなりけりと思ひあはすれば、かひなき御いのりども、いづこのいひ所なし。(一五九)

という崩御の場面を、先に触れた『海人の刈藻』の中納言の往生の場面、

ゆめともなく、廿五のぼさつたちかけりて、しうんたなびきて、をんがくしきりにきこゆ。……三月十五日、有明のかねのこゑほのかにきこえて、かうばしきか、みちくたるにおどろきて、さうじひき

あけてみたまへば、からだにもなく、はやしうんにうつり給ぬ。(巻四・二九二)や、この『海人の刈藻』の影響下に成ったらしい『雲に濁る』で、退位した帝が『法華經』巻四・法師品を誦誦しつつ即身成佛する場面、

念仏せさせ給にやとおもふに、かうばしきかみちくて、そらにえもいはずめでたきがくのこゑ、かすかにきこゆ。山のさすあやしきに、「これはきこしめずにや」と申給。ことをともせさせ給はず。なをあやしくて、御しやうじをひきあけて見させ給に、さらにをはしまさず。なをいかなることぞと、こゝかしこみたまつるに、をはしまさず。(一八)

などと比較するとき、女帝の崩御を往生譚として盛り上げようとする意識は薄いといわざるを得ない。女帝の道心・功德とその結果としての往生は、「月のみやこ」へ帰還するかぐや姫の面影や、『源氏物語』御法巻の紫上

に倣った哀切な臨終とともに、あらゆる方面に及ぶ女帝の理想性<sup>三</sup>を完全にし、死を莊嚴にするために付け加えられた属性という面が強いように思われる。

このように見てきたとき、出家遁世や往生といった宗教的一大事に対する『我身』の関心は、極めて淡泊だという印象を受ける。せいぜい一つの出来事として淡々と記すばかりで、同情にせよ憧憬にせよ、思い入れのようなものはほとんど感じられないのである。さらに、無関心という以上に、より冷ややかに突き放すような態度も見受けられる。巻七に描かれた、悲恋帝と皇太后宮（我身院と我身姫君の間の姫宮）の悲劇の場合である。

叔母にあたる皇太后宮に思いを寄せていた悲恋帝は、ある夜強引に契を結んだ。激しい衝撃を受けた皇太后宮は、食を断って発病。出家の願いは聞き届けられたが、なお生き長らえる意志はなかった。

「いかにいきをせじ。めをみじ」とのみ、

つよくおぼしめしいそぐに、かぎりありといひながら、それも心になふにや、そのあか月がだ、いとよはくおはしませば、れいのそう正、念仏など、よそめばかりはあらまほしく、あみだ仏おはしましげにて、つゝめにたえはてさせ給ぬ。

（二二七―八）

皇太后宮は、同じような局面に立たされた『狭衣物語』の女二宮を常に意識していた。その女二宮が、母宮の死という犠牲の上にはあるが、出家して狭衣から逃れ、功德を積む余生を送ったのに対し、皇太后宮は出家しても救われぬまま、悲惨な死に至る。ここで注目しておきたいのは、「念仏など、よそめばかりはあらまほしく、あみだ仏おはしましげにて」と、宮の往生の可能性を否定する表現、しかもまるで揶揄するかのようなその口調である。

悲恋帝の側はというと、皇太后宮出家の報に接しても、尼でもかまうことがあるうかと

いう執心を見せる。

「あまにてもおはしませ、法師にてもおはしませ、もとより世のつねのさまにおもはゞこそ、それにもより侍らめ。たゞなどにか、あけくれみたてまつらまほしく侍れば、この位をさりて、かのさぶらふ女房どものつらにてなん、ながらへ侍べき。そのかはるらん御すがたは、もうこしにも我くに、も、ためしなくやは侍」

(二二七)

そして宮の逝去を知ると、その後を追うように、自らも息を引き取った。

「やすみしるあまつ日つきを」たもつとも人のいとはん世にはのこらしむなしきからなりとも、かの御あたりにかせ給へ。わがさきの世の十せんのうちから、かならずつきざらん。あらぬ世にすがたはかはるとも、かの御身をはなれじ」とのたまはせて、つゐにたえはてさせ給ひぬ。なにの御いのりもかひなしと

そ。

(二二八)

帝位をなげうっても、十善の戒力と引き替えてでも、後の世で宮と添い遂げたい――悲恋帝がまだ幼いことを割り引いても、帝にあるまじき妄執である。しかもこの今上帝の悶死は、「なにの御いのりもかひなしとぞ」の一言で片付けられてしまい、巻七はここで終了、次の巻八は冒頭から、今上帝の「あたらしき御世」を語ることに終始する。悲恋帝と皇太后宮の不祥事は、「あさましく、よのつねならずうちつゝかせ給にしことのさま、おどろく／＼かりし御心まどひども」(二三一)として世人に取り沙汰され、今上帝の自誠の種となるに過ぎない。

許されぬ仲の女性に執着を残して死ぬ人物といえは、『源氏』の柏木を先蹤に挙げるべきだろうが、柏木の死が家族・友人たちによって深く悼まれ、手厚い供養も施されていたのに対し、『我身』の悲恋帝らには、そうした救済措置が一切語られない。妄念にまみれ

て死んでいった二人の魂が救われるのかという問題に、物語は極めて冷淡である。「念仏など、よそめばかりはあらまほしく、あみだ仏おはしましげにて」という皮肉な物言いは、その冷淡さを端的に表しているよう。

阿弥陀仏に関わる記述を、もう一つ見てみよう。故式部卿宮（水尾院二宮）の子右大将（宮の中將）と麗景殿（三条院女御）の兄妹が、それぞれ秘密の恋に懊悩する様を語る段の一節である。

は、うへは、もとより君たちの御うへなど、はかしくしうのたまひ、うしろむ御心もなかりしを、宮おはしまさでのちは、たゞ仏のおまへにたてこもりて、「あみだ仏、をそくおはします」とのみうらまきこえたまへば、なか／＼心やすき御身どもなり。（巻五・一四八）

式部卿宮北の方は、夫の没後、おそらく出家したのであるが、夫の後を追うことを願って、ひたすら仏前に籠る生活だったという。

そうした母親の無関心をよいことに、右大將は三条院の寵妃後涼殿への思いに鬱々とし、麗景殿は左大將と密会して、秘かに不義の娘を出産するに至る。子供たちが大胆な恋愛を繰り広げていることも知らず、一途に勤行に励む母親―そこにはやはり皮肉が感じられ、熱心に往生を待ち望む北の方の姿は、戯画的に描かれているといわざるを得ないだろう。

以上見てきたように、『我身』は総体として仏道の方面への関心が稀薄で、悲恋遍世譚を核に据える同時代の他の物語と違って、宗教的感動を求める意識はほとんど読み取れない。そればかりか、阿弥陀仏の来迎つまり極楽往生という、信仰上最も理想的な事柄にさえ、からかうような皮肉なまなざしを向け、時に戯画化することもあった。もつとも、深刻重大な局面にあたつて少々皮肉をきかせる語り口は、『我身』の随所に見られるもので、そうした態度が宗教の方面にまで及んでいた、という方がより正確であろう。当時の文

学ないし社会の中で、こうした冷めた意識を  
いかに評価すべきかという問題も興味深い  
が、ここでは立ち入らず、巻六後日談の問題  
に戻ることにする。

### 三

巻六後日談の往生譚における諧謔性が、他  
の巻々における、宗教的感動にひたることな  
く常に一步距離を置いた皮肉な態度に、程度  
の差こそあれ、通底していることは確かであ  
ろう。しかし次にわいてくる疑問は、そもそ  
も仏教への関心が高いわけではないらしいこ  
の作者が、何故このみ往生譚に大きな比重  
をかけるのかということである。それは一つ  
には、第五章で論じたように、巻六末が物語  
全編の大尾の役割を担っていることに由来し  
よう。そこでも例を挙げたが、当時の物語は  
宗教的な内容で締め括られるものが多く、『我  
身』もそうした典型的な終わり方に従おうと

したのだと思われる。そのことと密接に関わ  
ってくることにはなるが、作者の意図をもう  
少し踏み込んで考えてみたい。

もう一つ、物語の終結にふさわしい性格と  
いうと、『住吉物語』などに顕著な教訓性が  
挙げられる。読者に教訓を与えるという意図  
は、『我身』巻六の後日談にも窺うことがで  
きる。それは、前斎官家の女房たちのその後  
について語る部分で、

させる事なきあを女房たちのうへなれ  
ど、人は心もてよくもあしくもなるもの  
かな、又所がらに、こゝろはつかふべき  
物とも御らんぜよとて、こまかにかきつ  
くとなん。中将の君さうじあらくたてら  
れずは、かのいゑにもやゐられまし。小  
宰相は、さしづなどおもしろからねど、  
しのびやかなるかくれがに、又いとよき  
さとまうけていである。おとこの家ある  
じもほしうせねば、いでもかはらず、并  
へ小宰相の兄の心もありがたく、いゑ

のうちをとなくありつきてぞ、おひはつるまで過にける。この人どもは、いかにもほうよき人のうちなるべし。(一九二)

とあることにより、明らかである。ここで述べているのは、人の幸不幸は心が次第であること、それに場所柄を弁えねばならないという、いわば処世訓に近い誠めであり、特に後者は、主持ちの女房を対象にした心得のよう思われる。

この物語は全体的に宮廷を舞台とすることが多く、主要登場人物は皇族及び上流貴族に限定されており、作者は宮廷に近い人物だったことが予想される。その中であつて、巻六のみは女房階級が大いに活躍する巻で、視点が下がっていることを感じさせるのだが、近習女房四人に対する待遇表現を見ると、原則として最も上臈である申納言典侍に対してのみ敬語を用い、他の三人には用いていない。また、前斎宮家の女房たちを「させる事なきあを女房たち」と見下していることも併せて

判断すると、この巻のレベルは、近習女房たちとほぼ同等の宮廷女房の階層に設定されているようである。

ところで、物語が大団円を迎える巻八には、聖代を築いた今上帝の善政の有様を、具体的な政策にまで言及して、縷々述べ立てるところがある。女の物語の伝統から逸脱するほどのこうした記事は、おそらく宮廷の、天皇に近いところにいた作者が、天皇を讀者として意識し、治世の見本を示すという意味を込めて記したものと考えられる。つまり巻八には、天皇という最高の讀者に対する政治的教訓が盛られていた。それに対し巻六では、讀者層の主力を成していたであろう宮廷女房へ向けて、処世上の教訓を打ち出したのではなからうか。

巻六後日談に盛り込まれた教訓には、もう一つ、好色の誠めという側面もあった。たとえば近習女房たちは、「いづれも人よりまさりたるさまかたち」だったため、男性貴族た

ちから「めざましく」思われていたが、女帝の意向に従って、「おとこといふ物を、みすのへだてなくてみじ、きかじ」と決意していた。女帝は彼女らがそのように志操堅固であることを承知していたからこそ、身近に召し使っていたのだという（一八五、六）。そして女帝が崩御した後は、四人揃って花の姿を墨染の衣にやつして余生を送り、兜率内院への往生を果たした。その兜率天歌会における女帝の第二首目に、

露霜のむすぶちぎりをいさめこしあさ日  
のひかりけふやはれぬる

とあるように、近習女房たちは、女帝の教えに従って男女関係で心乱されることのなかったがゆえに、往生がなかったということになる。そうした彼女らの生き方には、「はてはなを、うらやましき人にそさだまりはてにける」という賛辞が捧げられている。

一方それと対照的に、前斎宮とその女房たちの同性・異性を問わぬ痴態はよく知られる

ところだが、その中にあって、「いかにもほうよき人」と呼ばれる小宰相だけは、「おとこの家あるじもほしうせねば」ということが一つの美点とされていた。このように近習女房や小宰相を称揚することは、それを模範として身を慎むようにという、女房階級の読者たちへの訴えかけとなろう。なお第四章で述べたように、巻八には、兄悲恋帝の悲劇を教訓に、今上帝が「いかでよしなき色にあはじ」（二三一）「なにがしの色にあはじ」（二四〇）と自誠していたとあり、好色・乱倫を戒めるといふ趣旨は、ここにも通流している。

さて、近習女房や小宰相の美談が、あるいは往生譚の中で、あるいは因果応報思想に沿って語られていたように、巻六後日談の宗教性は、教訓性、中でも好色の戒めと強く結び付いていたのだ。ここで考え併せておきたいのは、当時の物語観、特に『源氏物語』享受の姿勢に、男女の恋愛物語に終始することを超えて、仏教的教訓の効用を求める風潮

があつたことである。その早いものが『今鏡』の「作り物語の行方」で、

罪深きさまをも示して、人に仏の御名をもとなへさせ、とぶらひきこえむ人のために、道引給はしとなりぬべく、なさけある心ばへを知らせて、うき世に沈まむをも、よき道に引入、世のはかなきことを見せて、あしき道を出して、仏の道にすむ方もなかるべきにあらず。

(二九五)

と、『源氏』に仏道奨励という意義を見出している。続いて具体的な模範例として、北の方に先立たれて俗聖の境涯に至った八宮、生涯独身を貫いた大君、帝位を捨てて仏門に入つた朱雀院などを挙げる。

そのありさまを思ひつゞけ侍に、あるは別れをいたみて、優婆塞の戒を保ち、あるは女のいさぎよき道をまほりて、いさめごとにたがはず、この世をすごしなどし給へるも、人の見ならふ心もあるべし。

……又帝の位をすて、おとうとに譲り給て、西山のほらに住み給なども、仏の道に入り給、深き御法にも通ふ御ありさまなり。

(同)

その他、列举すると、

私云、此物語は内外典を始として、君臣父子のたゞずまひ、夫婦兄弟のまじはり、煙霞雪月のあそび、詩哥管絃の道までもかきのこせる事なきか……是をまなびば仁義徳行の道にも達ぬべし、これをたしなまば菩提得脱のたよりとも成ぬべし。

(『原中最秘抄』下・五九四)

夫光源氏物語者。本朝神秘書也。浅見寡聞之者。以之為遊戯之弄。深思好學之者。以之為惇誨之基。……帰覚王。示顯教密教之奥旨。

(『賦光源氏物語詩』序文)

漢家ニハ荊溪ノ金鉉論、本朝ニハ吏部ガ源氏ノ物語モ、物ニヨセツクル事ナレドモ、或ハ世ノ人ノ情ケ有事ヲ思ヒ、或ハ



仏法ノ義門ヲ弁エシメンガタメニ、其跡ヲノコス。(『沙石集』卷十末・四六一)など、同様の評価は多く見受けられるところである。

『源氏』に仏道への勧奨という価値を見出す『今鏡』の主張は、「男女の縁（三）なることを、げに／＼と書き集めて、人の心に染めさせ、なさをのみつくさむことは、いかゞはたうとき御法とも思ふべき」(二九四)という批判に対するものであった。中世に入り、貴賤男女を問わず愛読されたのはもちろん、歌壇でも重視されるようになった『源氏』だが、一方では狂言綺語観に基づく非難の対象となり、とりわけ「唯語（四）男女交會之道」(『源氏一品経』（五）)という点が糾弾されていた。そうした批判を克服する方策の一つが、教誠の書としての効用を唱えることだった。一口に教誠といっても、日常道徳や処世訓をはじめ様々だが、中でも「仏の道にすゝむ方」(前掲『今鏡』)が最も効力を持ったであろうこ

とは、想像に難くない。これら諸文献の言うところは、その実態を如実に映し出している。

そして、物語の最高峰である『源氏』に寄せられたこうした期待が、その他の物語、あるいは新たに制作されつつあった物語にまで敷衍され、仏道への導きたるべしという物語観が正論としてまかり通るようになったとしても、不思議ではない。鎌倉前中期の成立と目される物語の多くが悲恋遁世譚を枠組みとするのは、必ずしもそうした物語観に縛られたというわけではないにせよ、決して無関係でもなかっただろう。「男女の縁なることを、げに／＼と書き集め」た末に、恋に破れた主人公が出家するという物語展開は、読者に「世のはかなきことを見せて、あしき道を出して」(前掲『今鏡』)、仏道に帰依するよう勧める方便となり得る。とはいえ、それらの作品は、むしろ宗教的情緒と悲哀感に読者の共感を求める傾向が強く、教訓を与えることにさ

ほど重点を置いていたわけではあるまい。

それに比して、『我身』の教訓性は多分に意識的なものである。第四章で論じたように、この物語の巻八には、物語の伝統に照らして異例なほど具体的に政治理想を展開する部分があるのだが、それもやはり宮廷周辺における物語享受のあり方に敏感に反応したものだ。つまり、当時すでに『源氏』は公に近い場でも公然と享受され、「追<sub>ニ</sub>聖代聖治之法度<sub>ニ</sub>」（『賦光源氏物語詩』序文）という観点からも高い評価を受けていた。そうした状況に鑑み、この物語も『源氏』同様、為政者への教訓、治世の見本という面で利用価値の大きいことを主張していたのである。

一方、『源氏』正当化の最大の根拠である仏教的教誡という側面が、『我身』のいわゆる本系の巻々には欠けている。概してこの物語は宗教的な主題を追求する姿勢に乏しく、信仰の奨励になりそうな要素をほとんど持たなかった。もっとも巻八には、今上帝の母后

藤壺の夢枕に立った女帝が、「なみだもろなる御さま」を誡め、「あひみんことをおぼせかし。うき世の色をのみ」と、現世を厭い来世を願うように諭したという場面がある（二二三―二三四）。しかし後文によると、帝の後見として権勢を誇る藤壺は、女帝に対し「はづかしく」思いながらも、「御心ひとつなる世」を離れることができなかった（二四四）というぐらいいなので、教訓としての効果は十分ではなからう。

このように、他の巻には欠けていた仏教的な面での教訓性を補うものが、巻六の後日談だったのではなからうか。その際、往生譚の中心人物としては、本系の物語において暗示的にではあったが兜率往生を仄めかされていた女帝が、最適任だったことはいまでもない。その女帝の誡めに従って男女の契りから離れた近習女房たちが、女帝を善知識として仏門に入ったおかげで、兜率内院に生まれ変わって「うらやましき人」にきわまったとい

う往生譚には、「人の見ならふ心」（前掲『今鏡』）を刺激する意図を酌み取ることができるだろう。

以上、当時『源氏』がどのようにに評価されていたかを参照することによって、『我身』巻六の後日談の意義は仏教的教誡の要素を付与するところであり、それは物語の価値を高め正当化する手だてだったのではないかと推測した。第五章で述べたように、最も大尾らしい形で物語を締め括るという役割も、その宗教性・教訓性と密接に関わっていたのである。

しかし前節で見たように、もともとこの物語において、出家や往生といった宗教的な事柄に対する意識は極めて冷めたもので、ともしれば皮肉や揶揄交じりに語る傾向があった。今さら当時はやりの悲恋遍世譚のように、情緒たつぷりの悲話で読者の感動を誘うといったことは、その性向に合わなかったのである。かといって、堅苦しく教義を説くわけ

にもいくまい。この物語にとつては、大仰で大真面目な口調の中に、やや茶化すようなおかしみの漂う往生譚こそ、最もふさわしかったといえよう。

そうしてみると、巻六後日談の諧謔性が前斎宮物語の滑稽さの延長であると捉えるよりは、むしろ逆の方向、往生譚を滑稽に収めるべく、巻六全体に滑稽さが求められたと考えるべきなのかもしれない。先に述べたように、前斎宮物語は、最終的に女帝を中心とする往生譚を目指していたようである。たとえば前斎宮と女房たちとの狂態も、後日談における好色誠の前提として機能しているのである。もちろん見方を変えれば、後日談の教誡性によってすべて正当化されるからこそ、巻六では自由奔放に筆を揮うことができたという面も否定できないだろう。いずれにせよ、一見相容れがたい巻六後日談の二つの性格、諧謔性と宗教性・教訓性とは、ここでは矛盾するものではなく、むしろ表裏の関係にあったという

べきなのではなからうか。

#### 四

中世の社会・文化一般における仏教思想の浸透は、王朝物語の世界でも、悲恋遁世譚の流行をはじめとして顕著である。その中にある、『我身』の仏道に対する姿勢は一風変わっており、概して関心が低いばかりか、むしろ皮肉・揶揄の対象としており、来世を欣求する真摯な信仰心はほとんど感じられないのだった。

にも関わらず、巻六の後日談では、かえって他の諸作品以上に大仰な往生譚が展開される。その目的は、当時の物語享受の姿勢として、仏教的教誡の効用という点で『源氏物語』に高い価値を認める向きのあった状況に鑑み、本系の巻々では稀薄だった仏教色を、かなりあらわな教訓とともに付与することによって、物語の正当性を高めることにあったと

思われる。そこで選ばれたのが、登場人物の中で最も信仰篤く、往生を遂げたことになっている女帝であった。それゆえ巻六は、巻五の『ならび』として、再び女帝の御代という設定で、女帝の徳を称える物語となったのだろう。しかもその後日談を巻八と関連付けることにより、物語の大尾の役割を担わせようとさえしていた。

しかし、遁世譚や往生譚を共感・憧憬を込めて語ったり、諄々と教訓を述べたりすることは、やはりこの作者の性向に合わなかった。仏教色が強まれば強まるほど、かえって皮肉で揶揄的な姿勢は助長され、ゆえに巻六の物語は徹底的に諧謔に満ちたものとなったのだろう。皮肉のきいた滑稽味を交えることは、他の巻々でも決して珍しくはないのだが、この巻では往生譚という建前のもと、一層自在にその傾向が発揮されたのではなからうか。

『我身』巻六の特異性―並びの巻という物語構造上の特殊な位置、内容面での際立った

滑稽・卑俗さ―は、以上のような事情により生じたのではなからうか。この物語の作者は、数百年來蓄積されてきた王朝物語の伝統に十分親しみ、物語の典型もしくはあるべき形というものに対して敏感な意識を持っていたと思しい。しかし同時に、その伝統の枠内に収まりきらない個性をも、少なからず持ち合わせていたのだらう。その相反する二つの志向が、必ずしも十分止揚されぬまま、ともにとりわけ強烈な現れを見せたのが、巻六だったのではなからうか。

〈注〉

(1) 現存する伝本は、次の三点。

・ 九条家旧藏金子武雄氏藏本 (国文学研究資料館寄託)

・ 前田家尊経閣文庫藏本

・ 宮内庁書陵部藏本 (橋本不美男・桑原博史『我身にたとる姫君』汲古書院、

一九七五年)

以下、それぞれ金子本・前田本・書陵部本と略称する。なお、金子本は二巻ずつ合冊された四冊本である。

(2) 底本「なん」。

(3) 次の例は、いずれも釈迦を月に喩えるもの。

題不知

皇后宮肥後

をしへおきていりにし月のなかりせば  
いかでおもひをにじにかけまし

(『金葉集』雑下・六三一)

心懷恋慕、渴仰於仏、寂然法師  
別れにしその面かげの恋しきに夢にも  
みえよ山のはの月

(『新古今集』釈教・一九六〇)

(4) 第一章参照。

(5) 巻六の中ほどに、殿上人たちが宮中で「而於此經中」という經文(『法華經』法師品)を口ずさみつつ通り過ぎる場面がある(一七七)。三条院の治世を語る巻四にも似た

場面があるが、そこでは「明月峽の曉の」

(『和漢朗詠集』下・行旅)と吟じていた

(一〇五)の対比すると、これなども、女帝の感化によって宮廷に仏道が浸透していたことを伝え、女帝の仏性を示唆する記事かと思われる。

(6) 今井源衛「『我身にたどる姫君』論」(『王朝末期物語論』桜楓社、一九八六年)。

(7) 底本「如意微」。

(8) ただし、現存本は『風葉和歌集』成立以後の改作と推定されている。平安末期の原作も、物語の筋に大差はなかったようだが、このとおりの表現であったとはいえない。

(9) 『浅茅が露』『石清水物語』『いはでしのぶ』『風につれなき』『昔の衣』『雪に濁る』『むぐらの宿』の七篇。ただし『むぐらの宿』では、悲恋の主人公は出家することなく逝去するのだが、死の床で出家の意志を漏らしており、遁世譚の一つのヴァリ

エーションと解せる。

(10) 底本「しるし」。

(11) 第一章参照。

(12) 底本「日つぎの」。

(13) 悲恋帝の死に関連して、近い時代に、執着を残したまま死に行く帝王の姿を冷静に描いたものとして、『とはずがたり』の後嵯峨院崩御の記事を引いておく。

御善知識には経海僧正、また往生院の長老参りて、さまざま御念仏も勧め申され、「今生にても十善の床を踏んで、百官にいつかれましませば、黄泉路、未来も頼みあり。早く上品上生の台に移りまして、かへりて娑婆の旧里にとどめたまひし衆生も導きまませ」など、さまざまかつはこしらへ、かつは教化し申ししかども、三種の愛に心をとどめ、懺悔の言葉に道をまどはして、つひに教化の言葉にひるがへしたまふ御気色なくて、文永九年二月

十七日、酉の刻、御年五十三にて崩御  
なりぬ。(卷一・二一六、七)

(14) 第四章参照。

(15) 重松信弘『増補新致源氏物語研究史』(風  
間書房、一九八〇年)。

(16) 引用は『今鏡本文及び総索引』(笠間書  
院、一九八四年)による。

(17) 『艶』のあて字と思われる。

(18) 引用は増補国語国文学研究史大成によ  
る。

(19) 第五章参照。

## 〈論文目録〉

### 第一章

『我身にたどる姫君』女帝の人物造型―兜率往生を中心にして―

『国語国文』第六十八卷第八号 一九九九年八月

### 第二章

『我身にたどる姫君』の描く歴史（上）（下）

『国語国文』第六十九卷第九・十号 二〇〇〇年九・十月

### 第三章

『松浦宮物語』と『我身にたどる姫君』―聖代描写について―

『人文研究』第五十二卷 二〇〇〇年十二月（予定）

### 第五章

『我身にたどる姫君』巻六の位置付け

『京都大学国文学論叢』第二号 一九九九年六月

### 第六章

『我身にたどる姫君』巻六の後日談について―仏教的教誡の意義―

『文学史研究』第四十一号 二〇〇〇年十二月（予定）